陸前高田市立博物館紀要
第 9 号（平成 15 年度）

陸前高田市立博物館紀要

ー第9号ー

特 集 「小泉遺跡出土の墨書土器の研究」

小泉遺跡と出土遺物　佐藤 正彦

小泉遺跡出土土器の編年的位置づけ　八木 光則

小泉遺跡の墨書土器　村木 志伸

小泉遺跡出土の大型植物遺体　熊谷 賢

2004. 3. 31

陸前高田市立博物館

（岩手県）

紀要9号の正誤表

次の箇所に誤りがあり，申し上げございません。ご面倒ですが，この「正誤表」を参照の上，訂正くださりますようお願い申し上げま

・例言

（誤）戸根貫之　　（正）戸根貴之

・21頁

図13　188・189の図版が逆。

・24頁

観察表　188・189の内容が逆。

（正）

188	-	土師器	甕	坏	*	*	*	内黒	（摩滅）		九字線刻		623
189	A7-2層	土師器	甕	坏	*	*	*	内黒	*	*	九字線刻		622

・44頁　23行目

（誤）A類からC類に変容した仮定すると，　（正）A類からC類に変容したと仮定すると，

ご あ い さ つ

平成 7 年度博物館の研究体制強化の一環として，専門研究員制度を発足させて以来，その活動の成果を毎年博物館紀要として発刊し続け，本年度陸前高田市立博物館紀要第 9 号を発刊する運びとなりました。

特に，今回は昭和 55 年市内高田町法量地内で岡田親子によって発見され，その後，平成 11 年道路改良工事に伴う緊急発掘調査の結果，土師器・須恵器・鉄製品・木片・種子などが出土し，その整理の中で「厨」をはじめ大量の墨書土器が含まれていることが判明した「小泉遺跡」を取り上げ特集号として発刊することにいたしました。

墨書土器，特に「厨」をめぐっては，平成15年8月に法政大学国際日本学サテライトシンポジウム「海の蝦夷—小泉遺跡が語りかけるもの—」が陸前高田市高田松原シーサイドキャピタルホテル 1000 で開催され，小泉遺跡とその出土遺物の重要性と官衙施設の可能性が大いに議論されたところであります。

小泉遺跡の全容は，まだ不明で今後の調査・研究を待つこととなりますが，本書が多くの研究者・研究機関に活用され，また市民の地域文化財理解の一助になれば幸いです。

発刊にあたり，盛岡市中央公民館の八木光則氏，東北芸術工科大学の村木志伸氏の両氏には，多忙の中，玉稿を賜り感謝に堪えません。また，当博物館の意図するところをお汲み取りいただき発刊にご協力いただきました法政大学国際日本学研究所の皆様に厚く御礼申し上げ挨拶といたします。

平成 16 年 3 月 31 日

陸前高田市立博物館長
本 多　文 人

例　言

・本書は，陸前高田市立博物館紀要第９号「小泉遺跡出土の墨書土器の研究」である。

・本書は，「小泉遺跡と出土遺物」 佐藤正彦（陸前高田市教育委員会生涯学習課），「小泉遺跡出土土器の編年的位置づけ」 八木光則（盛岡市中央公民館），「小泉遺跡の墨書土器」 村木志伸（東北芸術工科大学），「小泉遺跡出土の大型植物遺体」 熊谷賢（陸前高田市立博物館）が担当した（敬称略）。

・図版・写真は，執筆者ごとに番号を付した。

・層序の色相観察の記載については，農林省農林水産技術事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修「新版標準土色帖」に拠った。

・本紀要に掲載する出土遺物は，陸前高田市立博物館（岩手県陸前高田市高田町字砂畑 61－1）において保管する。

・発掘調査ならびに整理作業・編集にあたり次の方々・機関より多大なご指導・ご支援を賜った。記して謝意を表するものである。（敬称略，順不同）
伊藤博幸・佐藤良和（水沢市埋蔵文化財センター），熊谷公男（東北学院大学），菊池賢（大迫町教育委員会），高橋千晶（水沢市教育委員会），高橋信雄（岩手県立博物館），戸根貫之（岩手県教育委員会生涯学習文化課），中野栄夫（法政大学），樋口知志（岩手大学），村木志伸（東北芸術工科大学），八木光則（盛岡市中央公民館），吉田歓（米沢短期大学），渡辺誠（名古屋大学名誉教授），遠藤祐太郎（岩手大学大学院生），佐藤紀夫・千葉美知・千葉香織（岩手大学学生），金澤麻美・渡邊和行・鈴木雄太（東北芸術工科大学大学生），中野渡俊治・鈴木琢郎・油井航（東北大学大学院生），畠山恵美子（法政大学大学院生），遠野いずみ・遠藤勝博・坂本優子（陸前高田市教育委員会），青山道子，菅野美代，佐々木奈穂子，佐藤紀美，佐藤とも子，鈴木キミ子，鈴木初子，戸羽由美，村上典子
法政大学国際日本学研究所，蝦夷研究会

・本書の編集・図版作成等は，陸前高田市立博物館学芸員　熊谷賢が担当し，同館嘱託員　佐々木洋がこれを補佐した。

目　次

ごあいさつ

例　　言

目　　次

小泉遺跡と出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・佐藤　正彦　　1

小泉遺跡出土土器の編年的位置づけ・・・・・・・・・・・・・・・・八木　光則　　３１

小泉遺跡の墨書土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・村木　志伸　　４３

小泉遺跡出土の大型植物遺体・・・・・・・・・・・・・・・・・・・熊谷　　賢　　５９

発掘調査・出土遺物　写真図版・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　　６８

小泉遺跡と出土遺物

佐藤　正彦
（陸前高田市教育委員会生涯学習課）

Ⅰ　調査にいたる経緯及び調査の経過

1 遺跡の発見

昭和 55 年，陸前高田市高田町法量地区で水田の圃場整備が行われた。水路が作られ，その法面の地表下 25～40 cmより多量の土器が出土した。第一発見者は法量地区在住の岡田安夫・敦子親子で，当時小学生であった敦子さんは水路中より土器を採集し，同年 4 月 15 日に陸前高田市立博物館に持ち込んだ。博物館で調査したところ，それらは奈良・平安時代の土師器・須恵器であり，その中には墨書土器が相当数含まれていた。博物館では 4 月 20 日に現地に赴き，土層の状態，遺物の出土状況・数量など調査し，当地点が遺跡（埋蔵文化財包蔵地）であることを確認した。市教育委員会（以下，教育委員会）では，文化財保護法に基づき「遺跡の発見」を県教育委員会に通知し，当地点を「小泉遺跡」（県遺跡コード NF67-1216）と命名した。

2 調査にいたる経緯

平成 10 年 2 月，教育委員会は，市建設課（以下，建設課）より市道中長砂荒沢線の改良工事に伴う周辺地域の埋蔵文化財等の所在について照会を受けた。市道に歩道を新設する計画で，予定地には「小泉遺跡」発見の経緯となった「水路」が含まれていた。このため建設課と教育委員会がその取り扱いを協議し，その結果，平成 11 年 4 月 28 日付けで，文化財保護法 57 条の 3 第 1 項により「市道中長砂荒沢線改良舗装工事の実施に伴う埋蔵文化財発掘の通知について」が建設課より提出され，教育委員会では同年 5 月 7 日付け陸高教社第 27 号で「埋蔵文化財発掘の通知」を文化庁に進達した。同年 5 月 27 日付け教文第 7-28 号で発掘調査の指示の回答がなされ，発掘調査が行なわれることとなった。

3 調査の経過

発掘調査は平成 11 年 11 月 16 日～22 日の 7 日間の日程で行なった。調査面積は約 42 ㎡である。その結果，57×38.5×13 cm大のコンテナで 19 箱分の土師器・須恵器・鉄製品・木片・種子などが出土した。その後，遺物の整理の中で「厨」をはじめ大量の墨書土器が含まれることが判明した。

Ⅱ　遺跡の立地と環境

1 遺跡の位置と環境

小泉遺跡は，岩手県陸前高田市高田町字法量地区にある。JR 大船渡線陸前高田駅からは東北東方向に約 1.7km の地点である（註 1）。陸前高田市は岩手県の東南端にあり，東経 141°44′ ～141°28′ ・北緯 38°56′ ～39°07′ （旧日本測地系に拠る）に位置する。南は宮城県本吉郡唐桑町及び気仙沼市，西は岩手県東磐井郡大東町，北は同気仙郡住田町，東は同大船渡市に隣接し，東南は太平洋に面している。付

近の海岸線は，複雑な鋸歯状のリアス式海岸で，本市の東側の広田半島は南東方向に太平洋へ大きく突き出し，広田湾を形作っている。湾内には住田町の土倉峠に源を発する総延長 40km の気仙川や浜田川などの河川が注ぎ，河口部は，岩手県最大の汽水湖である古川沼や市街地のある沖積層の低地帯となる。北上高地の東南部にあたり，氷上山(874.7m)や箱根山(446.8m)などがそびえる。

遺跡は，氷上山より南にのびた二つの丘陵に挟まれた海抜 10m程の低地帯にあり，近隣には小泉川が流れる。現在はおもに水田となっており，周囲の丘陵は宅地・畑地である。

2 小泉遺跡と周辺の遺跡(図 1〜2・表 1)

陸前高田市は，消滅したものを含め 220 ヶ所を超える遺跡があり，小泉遺跡の周辺(図 1)には，51 ヶ所の遺跡がある。多くは氷上山から南にのびる丘陵の標高約 20〜100mの地点に分布し，標高 20m以下の低地帯には少ない。そのうち，奈良・平安時代の遺構・遺物のある遺跡は 24 ヶ所で，貝畑貝塚(16)と堂の前貝塚(51)で発掘調査が行なわれている。貝畑貝塚は小泉遺跡の西側約 1km の地点にあり，9〜10 世紀の住居跡が 10 基検出され，堂の前貝塚は小泉遺跡の東側約 2 kmの地点にあり，土師器片が 1 点出土している(註2)。

市内の奈良・平安時代の遺跡の立地は，氷上山を中心とした金山との関連が考えられる。氷上山には衣太手(きぬたて)神社・登奈孝志(となこし)神社・理訓許段(りくこた)神社の延喜式内三社が鎮座し，ふもとの高田町西和野には，仮宮の氷上神社がある。このことから氷上山ふもとの奈良・平安時代の遺跡は，本市の成り立ちを考える上で重要である。

さらに，市内にはマガキ主体の貝層がある館貝塚(39)，時期不明ではあるが，アワビ主体の貝層がある岩倉貝塚(広田町)，古代の製塩遺跡の大陽崎遺跡(広田町)など古代の海産資源の利用を推測させる遺跡がある。

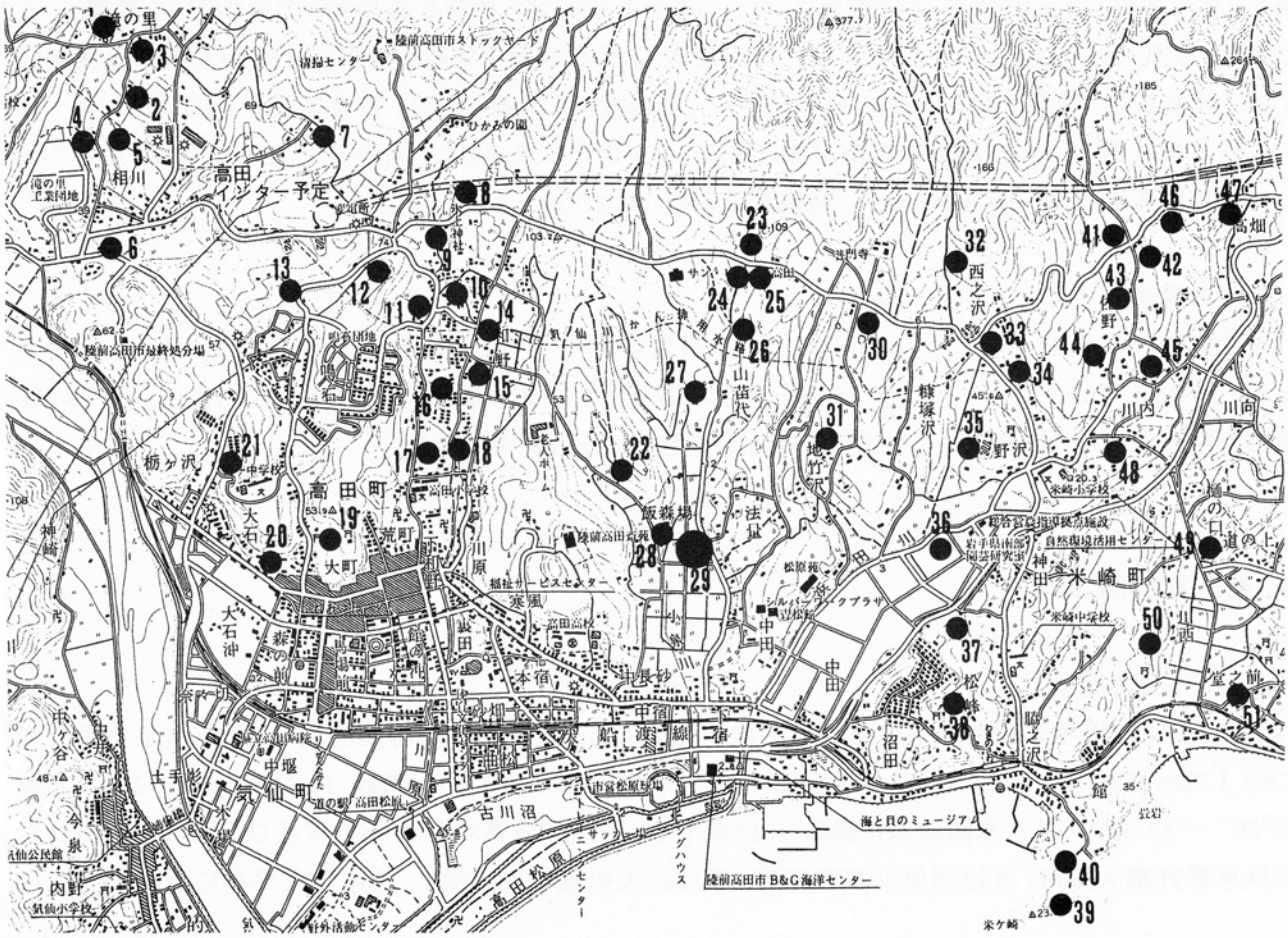


図 1　小泉遺跡とその周辺の遺跡

No.	遺跡名	所在地	遺跡コード	遺構・遺物	備考
1	坊寺遺跡	竹駒町字滝の里	NF57-1067	縄文土器(晩期)・土師器・須恵器	集落跡
2	滝の里Ⅰ遺跡	竹駒町字滝の里	NF57-1087	縄文土器・土師器・須恵器	散布地
3	滝の里Ⅱ遺跡	竹駒町字滝の里	NF57-1077	弥生土器・土師器	散布地
4	下沢Ⅰ遺跡	竹駒町字滝の里	NF57-2014	縄文土器	散布地
5	下沢Ⅱ遺跡	竹駒町字滝の里	NF57-2006	縄文土器	散布地
6	相川Ⅰ遺跡	竹駒町字相川	NF57-2045	縄文土器・須恵器	散布地
7	相川Ⅱ遺跡	竹駒町字相川	NF57-2102	縄文土器	散布地
8	瓜畑遺跡	高田町字中和野	NF57-2241	縄文土器	散布地
9	中和野Ⅰ遺跡	高田町字中和野	NF57-2260	土師器	散布地
10	西和野Ⅱ遺跡	高田町字西和野	NF57-2189	縄文土器・土師器	散布地
11	小森前遺跡	高田町字西和野	NF57-2197	縄文土器	散布地
12	西和野Ⅰ遺跡	高田町字西和野	NF57-2186		散布地
13	鳴石遺跡	高田町字鳴石	NF57-2182	縄文土器	散布地
14	中和野Ⅱ遺跡	高田町字中和野	NF67-0200	縄文土器	散布地
15	中和野Ⅲ遺跡	高田町字中和野	NF67-0230	縄文土器	散布地
16	貝畑貝塚	高田町字中和野	NF67-0147	竪穴住居・縄文土器(中期・後期・晩期)	貝塚
17	西和野遺跡	高田町字西和野	NF67-0155	縄文土器(中期)・土師器・須恵器	集落跡
18	下和野遺跡	高田町字下和野	NF67-0167		集落跡
19	高田城	高田町字本丸	NF67-0172		城館
20	西館	高田町字大石	NF67-0089	土師器・須恵器	散布地
21	栃ヶ沢遺跡	高田町字栃ヶ沢	NF67-0038		散布地
22	太田遺跡	高田町字太田	NF67-0262		散布地
23	大隅Ⅰ遺跡	高田町字大隅	NF57-2392	土師器	散布地
24	荒沢Ⅰ遺跡	高田町字荒沢	NF67-0300	土師器	散布地
25	大隅Ⅱ遺跡	高田町字大隅	NF67-0301	縄文土器・土師器	散布地
26	豆の通遺跡	高田町字荒沢	NF67-0239	縄文土器(後期)・土師器	金吹跡
27	山苗代遺跡	高田町字山苗代	NF67-0258	土師器・須恵器	散布地
28	飯森場遺跡	高田町字飯森場	NF67-0294		城館跡・散布地
29	**小泉遺跡**	**高田町字法量**	**NF67-1216**	**土師器・須恵器**	**散布地**
30	地竹沢Ⅰ遺跡	米崎町字地竹沢	NF67-0335	縄文土器・フレーク	散布地
31	地竹沢Ⅱ遺跡	米崎町字地竹沢	NF67-0382	土師器	散布地
32	野沢Ⅰ遺跡	米崎町字野沢	NF67-0328	土師器・須恵器	散布地
33	野沢Ⅱ遺跡	米崎町字野沢	NF67-0359	縄文土器・土師器	散布地
34	野沢Ⅲ遺跡	米崎町字野沢	NF68-0060		散布地
35	中山館	米崎町字野沢	NF67-0379	空堀	城館
36	川崎遺跡	米崎町字川崎	NF67-1328	縄文土器・土師器	散布地
37	松峰Ⅱ遺跡	米崎町字松峰	NF67-1366		散布地
38	松峰(Ⅰ)遺跡	米崎町字松峰	NF67-2305	土師器	散布地
39	米ヶ崎(館貝塚)	米崎町字館	NF67-2379	土師器	城館及び貝塚
40	米ヶ崎城	米崎町字館	NF68-2050		城館
41	佐野Ⅰ遺跡	米崎町字佐野	NF68-0015	縄文土器	散布地
42	佐野Ⅱ遺跡	米崎町字佐野	NF68-0026		散布地
43	佐野Ⅲ遺跡	米崎町字佐野	NF68-0045	縄文土器(後期・晩期)土師器	散布地
44	佐野Ⅳ遺跡	米崎町字佐野	NF68-0065	土師器	散布地
45	佐野Ⅴ遺跡	米崎町字佐野	NF68-0075		散布地
46	高畑Ⅰ遺跡	米崎町字高畑	NF68-0018	土師器	散布地
47	高畑Ⅱ遺跡	米崎町字高畑	NF68-0120		散布地
48	川内遺跡	米崎町字川内	NF68-0095	縄文土器(中期・後期・晩期)	散布地
49	中島遺跡	米崎町字中島	NF68-1066		散布地
50	川西遺跡	米崎町字川西	NF68-1093	縄文土器	散布地
51	堂の前貝塚	米崎町字堂の前	NF68-2130	縄文土器(中期・後期)	貝塚・集落跡

表1　小泉遺跡とその周辺の遺跡

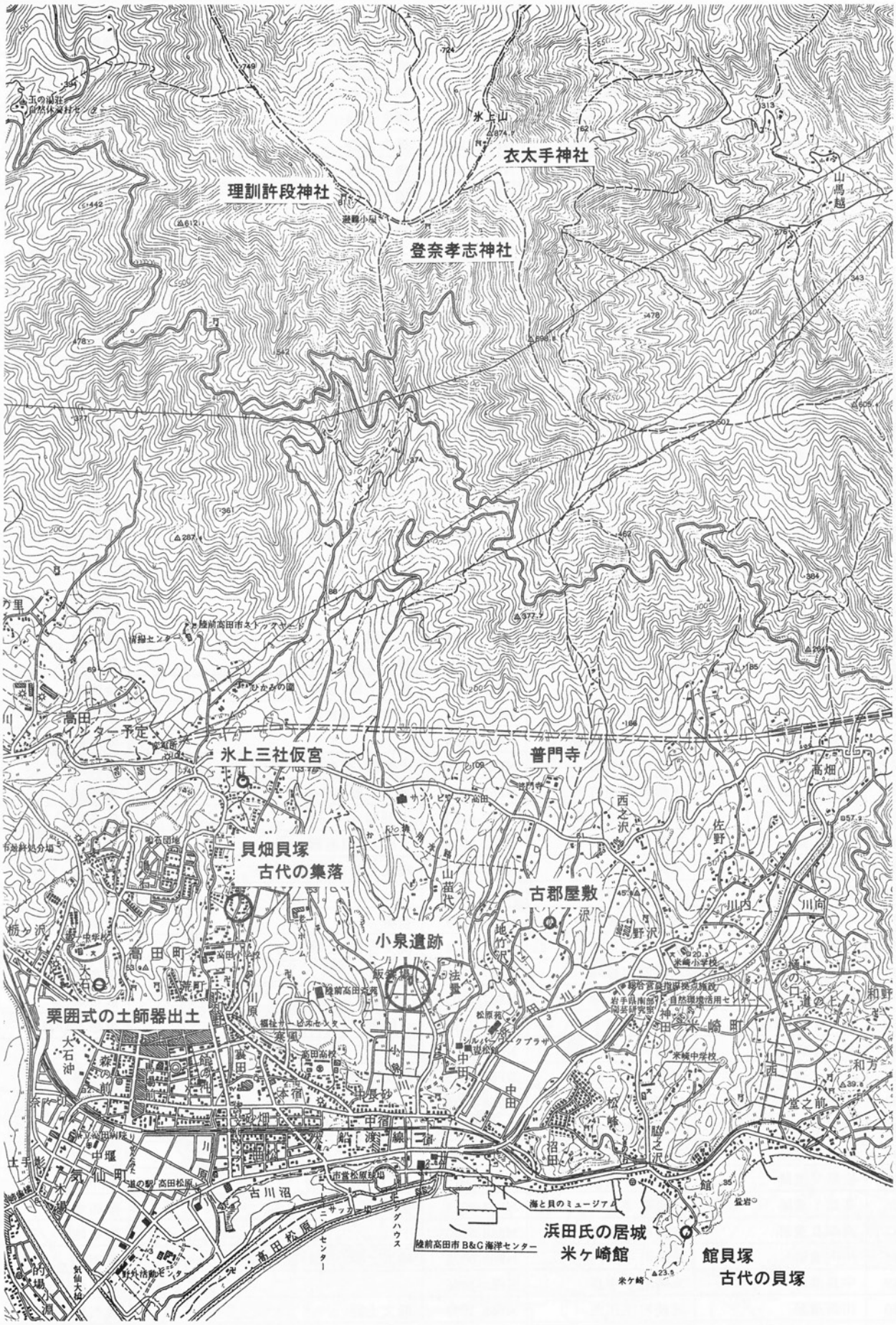

衣太手神社
理訓許段神社
登奈孝志神社
氷上山
氷上三社仮宮
普門寺
貝畑貝塚
古代の集落
古郡屋敷
小泉遺跡
栗囲式の土師器出土
浜田氏の居城
米ヶ崎館
館貝塚
古代の貝塚
高田
高田町
高畑
佐野
川内
川向
和野
大石沖
中宿
中田
古川沼
高田松原
海と貝のミュージアム
陸前高田市B&G海洋センター

図２　小泉遺跡の位置図

Ⅲ 調査の成果

1 調査方法について(図 3)

調査地点は，市道中長砂荒沢線と法量神社に向かう農道の交差点の南側である。市道西側の水田を発掘区とし，交差点より北から南に 5×5m のグリッドを 8 つ設定し A1～A8 とした。その中の幅 1.2m・長さ 39m・面積約 42 ㎡を人力により調査をした。さらに遺跡範囲を確認するため，発掘区より南側を市道に沿い 60m 先と 90m 先の 2 地点を重機で掘り下げたが，これらの地点からは遺構・遺物は検出できなかった。

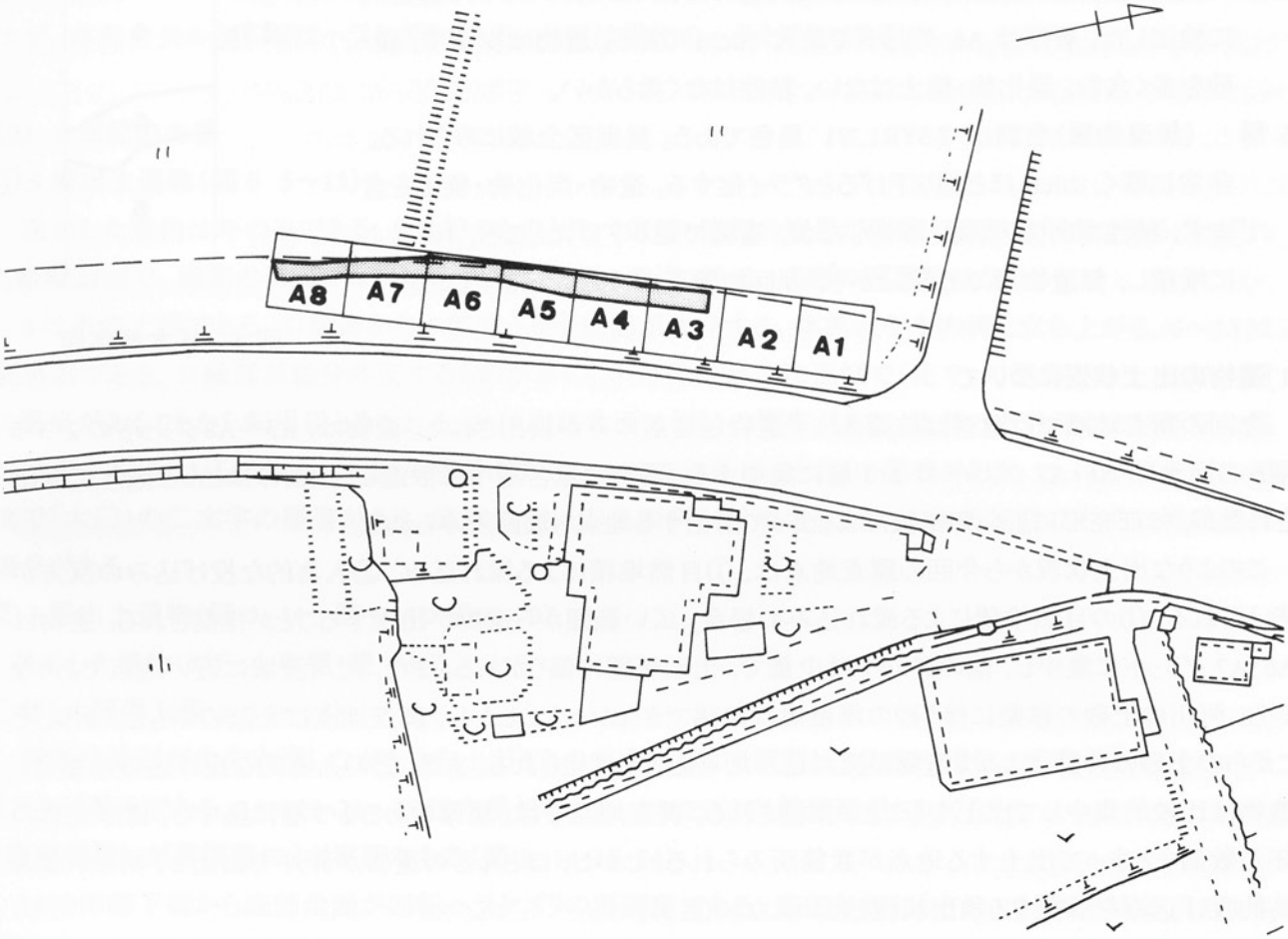
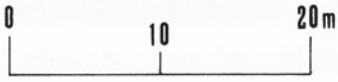


図 3　グリット設定図



2 層序について(図 4)

土層は比較的平坦に堆積する。海抜は各層とも 9m～9.6mの範囲に含まれる。図示した層序は，最も厚い A6 グリッドの西壁を模式化したものである。基本的な区分は以下のとおりである。

1 層　(表土)層厚 10～20 ㎝で撹乱が著しい。色調は 7.5YR4/3 褐色である。遺物・炭化物・焼土・礫は含まれない。真砂を含み粘性はなく柔らかい。

2 層　(遺物包含層)色調は 7.5YR5/ 3 にぶい褐色である。発掘区全面には広がらず，堆積は途切れがちである。西壁セクションでは A3・A4・A6 グリッドのみに堆積する。A2 グリッドでも 2 層とした層があるが，A3 より南側で 2 層としたものと同一か疑問が残る。遺物は多く，炭化物を含む。焼土・礫はない。真砂を含み粘性はなく柔らかい。

3 層　(遺物包含層)色調は 7.5YR2/ 2 黒褐色である。層厚は A6 グリッドで最大 20cm である。北から南にか

けて厚みを増す。A2 グリッドは検出せず，A3・A4 グリッドでは東壁のみに検出する。A5グリッドから層厚を増し A6～7グリッドで厚く堆積する。遺物は多く，炭化物・礫を含む。焼土はない。真砂を若干含み粘性があり固い。

4 層　（無遺物層）色調は 7.5YR1.7/1 黒色である。層厚は A6 グリッドで最大 20cm である。A3～A7 グリッドにみられる。遺物・焼土はなく，炭化物・礫を含む。真砂を若干含み粘性があり，やや柔らかい。

5 層　（遺物包含層）色調は7.5YR6/1 褐灰色である。A5・A6グリッドで部分的に検出した。層厚は A6 グリッドで最大 10cm である。遺物は少量で，礫・砂を多く含む。炭化物・焼土はない。粘性はなく柔らかい。

6 層　（無遺物層）色調は 7.5YR1.7/1 黒色である。発掘区全域にみられる。非常に厚く，20cmほど掘り下げるとグライ化する。遺物・炭化物・焼土を含まず，粘性がありやや柔らかい。なお，重機で掘り下げたところ，1m以上に堆積し，無遺物層であることから，今回の調査では発掘底面とした。

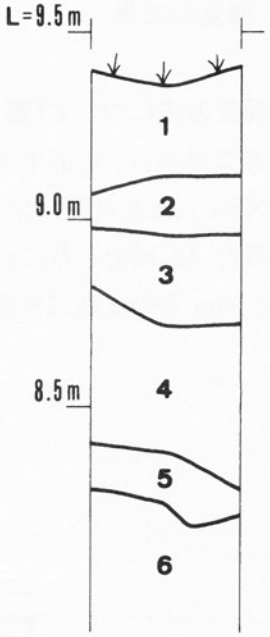


図 4　基本層序図

3 遺物の出土状況について

今回の調査地点では遺構は確認されず遺物包含層のみが検出された。遺物は，A3～A8 グリッドの 2・3・5 層から出土し，A6・A7 グリッドの 2・3 層に集中する。遺物は包含層中に散逸し，土器はほとんど破片で検出されたが，ほぼ完形に近い坏が数点まとまって出土する地点も数箇所みられる。

このような出土状況から今回の調査地点は，①自然堆積による流れ込み，②人為的な投げ込みの双方が考えられる。①の自然堆積による流れ込みの場合，広い範囲から遺物が出土することが推測される。遺物は A6・A7 グリッドに集中し，他のグリッドは少量で，出土範囲に偏りがある。また，河川流域に近い地点でありながら，河川の土砂の移動に伴う砂の堆積層は確認できなかった。しかし，調査地点は丘陵のふもとにあり，そこからの土砂の移動によって遺物が流れ込んだ可能性も考えられる。また，②の人為的な投げ込みの場合，遺物は比較的集中して出土することが推測される。調査地点では，層厚のある 2・3 層に集中し，ほぼ完形の坏が数個まとまって出土する地点が数箇所みられる。しかし，ほとんどの遺物が砕片で出土し，明らかな人為的投げ込みを示唆する検出状況とはいえない(註 3)。

よって，今回の調査地点は，自然堆積による遺物の流れ込みと人為的な投げ込みの両方の可能性が考えられるが，調査面積は狭隘のため，遺跡全体の性格を把握することは現時点では困難である。

4 遺物について（図 5～13）

今回報告する遺物は，昭和 55 年の遺跡発見時に水路中より採集したものと，平成 11 年の市道の改良舗装工事に係る緊急発掘調査により出土したものである。遺物は土器（土師器・須恵器・赤焼土器）・土製品・鉄製品である。昭和 55 年の資料は表面採集のため層位は不明である。平成 11 年の遺物は 2・3・5 層より出土している。土器は 8 世紀・9 世紀のものに大別し，発掘調査で出土したものは，層位ごとに器種および土師器・須恵器等に分類した。墨書土器は，文字が解読可能なものは表記に努めたが，文字不明のものは「□」とした。

土器

(1) 8世紀の土器(図5 1〜4)

図示した遺物は4点でいずれも土師器である。器形は体部が幾分内湾しながら立ち上がり，底部・体部の境界が不明瞭である。有段丸底あるいは丸底風平底の底部で，未轆轤で内黒処理である。

1は小形の坏である。体部が垂直に近い角度に立ち上がる。外面は横位のヘラミガキである。内面は口縁部から体部下半が横位，下端は斜位のヘラミガキである。2は小形の坏である。底部と体部の境に段がつく。内外面ともに横位のヘラミガキである。3 は中形の坏である。体部外面の中央に沈線があり，内外面ともに横位のヘラミガキである。4は中形の坏である。体部外面の中央に沈線があり，外面は口縁から体部中央がヨコナデ，体部中央から下端はヘラケズリである。内面は横位のヘラミガキである。

(2) 9世紀の土器

①5層出土遺物(図5 5〜13)

図示した遺物は坏のみである。8世紀のものと比べ底部・体部の境界が明瞭で底部は平底である。いずれも轆轤調整で，底部の切離しは回転糸切及び回転ヘラ切である。底部の再調整はない。

5は赤焼土器である。口縁部から体部の一部と底部が残存する。体部がやや内湾し立ち上がる。6〜13は須恵器である。口縁部が幾分外反するものが多い。6 は体部外面に正位で「止？」の墨書があり，底部内面に墨痕があることから転用硯とみられる。8 は底部外面に「具」の墨書がある。体部の内外面および断面に煤が付着する。9 は底部外面に「吉」の墨書がある。10 は底部外面に「吉」の墨書がある。11 は体部外面に逆位で「大□」の二文字の墨書があり，底部内面に赤色顔料が付着する。13 は体部外面の中央に焼成前の傷？がある。

②3層出土遺物(図5 14〜図6 48・図8 79)

図示した遺物は坏・小形甕・甕である。

○坏〔土師器〕(図5 14〜28)

器形は体部がやや内湾しながら立ち上がるものが多い。器面調整は，体部が横位，底部が放射状のヘラミガキが基本である。14〜23・26〜28は内黒処理され，24・25は内黒処理がされてない。

・底部切離しが再調整により不明なもの(図5 14・15・24)

14は体部下端から底部全面が回転ヘラケズリの再調整である。底部外面に「吉？」の墨書がある。15は体部下端から底部全面が手持ヘラケズリの再調整である。体部外面に横位で「羽？」の墨書，底部外面にヘラ記号がある。

・底部切離しが回転糸切のもの(図5 16〜23・25)

16 は体部下半が手持ヘラケズリの再調整である。体部外面に「中」の墨書がある。17 は大形である。底部全面が回転ヘラケズリの再調整である。18 は体部下端が手持ヘラケズリの再調整である。体部外面に正位で「木」の墨書がある。19 は底部周縁が回転ヘラケズリの再調整である。口縁部外面のカーボン(煤)の付着から灯明皿とみられる。21 は底部を手持ヘラケズリの再調整である。23 は再調整がなく，底部外面に「吉」の墨書がある。25 は体部周縁が回転ヘラケズリの再調整である。口縁部内面に付着するカーボン(煤)は灯芯痕とみられる。

・底部切り離しが不明のもの(図5 26〜28)

26 は体部外面に正位で「吉？」の墨書がある。27 は体部外面に横位で「吉？」の墨書がある。28 は体部外面に横位で「吉」の墨書がある。

○坏〔須恵器〕(図 6　29〜47)

いずれも切離し後の再調整はなく，器形は体部がやや内湾気味に立ち上がる。口縁部は外反するものが多いが，37・39 は体部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がる。

・底部の切離しが回転ヘラ切によるもの(図 6　30・31)

30 は底部外面に「具」の墨書がある。31 は底部外面に「厨」の墨書がある。

・底部の切り離しが回転糸切によるもの(図 6　29・32〜45)

29 は口縁部の内外面とその断面にカーボン(煤)が付着する。33 は体部外面に逆位で「羽」と正位で「□」の二文字の墨書がある。34 は底部外面に墨痕があり，転用硯とみられる。36 も内面・底部外面に広く墨痕があり転用硯とみられ，また，口縁部内外面にカーボン(煤)が付着することから灯明皿の利用も推測される。40 は底部外面に「生」の墨書がある。41 は底部外面に「土」の墨書がある。42 は底部外面に「吉？」の墨書がある。43 は底部外面に墨書があるが文字不明である。44 は体部下半から底部の一部が残存し，底部外面に「□」の墨書がある。45 は底部が残存し，底部外面に「吉」の墨書がある。

・底部切り離しが不明のもの(図 6　46・47)

46 は底部が欠損する。口縁部から体部内外面に広くカーボンが付着する。47 は体部片である。体部外面に墨書があるが文字不明である。

○小形甕(図 6　48)

赤焼土器である。底部の切離しは回転糸切で，再調整はない。体部の内外面にカーボンが付着する。

○甕(図 8　79)

土師器である。口縁部から体部中央まで残存する。非轆轤で，口縁部が内外ともヨコナデ，体部は外面がヘラミガキ，内面がヘラナデである。内面に巻き上げ痕がある。

③ 2 層出土遺物(図 6　49〜図 7　78・図 8　80〜図 10　115)

図示した遺物は坏・甕・小形甕・長頸瓶・広口壺である。

○坏〔土師器〕(図 7　49〜75)

器形は体部がやや内湾しながら立ち上がり，口縁部は外反するものとそのまま立ち上がるものがある。内面の器面調整は，体部が横位，底部が放射状のヘラミガキが基本である。多くは内黒処理であるが，72・73 は内外とも黒色処理である。

・底部の切り離しが再調整により不明のもの(図 6　49〜図 7　52・56〜58)

49 は体部下端から底部全面が手持ヘラケズリの再調整である。口縁部から体部中央の外面に灯芯痕とみられるカーボン(煤)が付着する。51 は手持ヘラケズリの再調整である。内面は横位のヘラミガキの後，放射状の間隔のあるヘラミガキを施し，下端に深いミガキ状の刻みをつけている。52 は手持ヘラケズリの再調整である。底部外面に墨痕があり転用硯とみられる。56 は体部下端から底部全面が回転ヘラケズリの再調整，底部内面に井桁状のヘラミガキがある。57 は体部下端から底部全面が回転ヘラケズリの再調整である。体部外面に「□」の墨書がある。58 は体部下端から底部全面が回転ヘラケズリの再調整である。底部外面に「一」の墨書がある。

・底部の切り離しが回転糸切によるもの(図 7　53〜55・59〜74)

53は体部下端から底部周縁が手持ヘラケズリの再調整である。底面外面に「千」の墨書がある。54は体部下端から底部周縁が手持ヘラケズリの再調整である。体部外面に正位で「十」の墨書，底部外面は「×」のヘラ記号がある。55 は体部下端から底部周縁が手持ヘラケズリの再調整である。体部側面に「U」の墨書がある。59 は底部周縁が回転ヘラケズリの再調整である。底部外面に墨書があるが文字不明である。60 は底部周縁が回転ヘラケズリの再調整である。体部外面に逆位で「丞？」の墨書がある。61 は底部全面が回転

ヘラケズリの再調整である。62 は再調整がなく，体部外面に正位で「集？」の墨書がある。64 は大形である。再調整はなく，体部外面に正位で「廿」の墨書がある。67 は底部周縁が回転ヘラケズリの再調整である。内面の黒色処理は銀黒色に発色する。71 は大形である。再調整はなく，口縁部外面に一部カーボン（煤）が付着する。72，73 は再調整・器面調整がなく，内外黒色処理である。74 は再調整・器面調整はない。内面に付着するカーボンは黒色処理か煤とみられる。

・破片資料のため底部の切り離しが不明のもの（図 7　75）

75 は体部片で，体部外面に逆位で「羽」の墨書がある。

〔赤焼土器〕（図 7　76・77）

76 は体部がやや直線的に立ち上がる。切離しは回転糸切で，底部の再調整・器面調整はない。体部外面に二文字の墨書があるが文字不明である。77 は体部がやや直線的に立ち上がる。再調整は体部下端から底面全面を手持ヘラケズリである。外面に広く煤が付着する。

〔須恵器〕（図 7　78・図 9　87～図 10　115）

器形は体部から口縁部までやや内湾気味に立ち上がるものが多く，口縁部が外反するものも若干ある。

・底部の切離しが回転ヘラ切によるもの（図 7　78）

78 は底部が残存する。再調整はなく，体部外面に正位で「止」の墨書がある。

・底部の切離しが回転糸切によるもの（図 9　87～100・105～114）

87 は体部下端から底部周縁が手持ヘラケズリの再調整である。88 は底部周縁が手持ヘラケズリの再調整である。底部外面に「力？」の墨書がある。89 は底部外面に「吉」の墨書があり，底部内面の墨痕と摩滅が転用硯とみられる。90 は体部外面に逆位で文字不明の墨書がある。91 は体部外面に文字不明の墨書がある。底部内面の一部にカーボンがあり転用硯とみられる。92 は体部外面に横位で「吉？」の墨書がある。93 は体部外面に逆位で「万？」の墨書がある。94 は体部外面に横位で「吉？」の墨書がある。95 は体部外面に逆位で「吉？」の墨書がある。底部内面が摩滅する。96 は体部外面に横位で「吉？」の墨書がある。97 は外面の口縁部から底部にかけて火襷がある。底部外面に「化」の墨書がある。98 は体部外面に横位で「吉」，底部外面に「主・吉」の三文字の墨書がある。99 はやや大形である。体部外面に横位で「吉」と底部外面に「吉」の二文字の墨書がある。100 は体部外面に正位で「第？」，横位で「丈」の刻書がある。体部中央の内外面に付着するタールは灯芯痕とみられる。105 は底部内面にカーボンが付着する。106 は底部内面に墨痕があり転用硯とみられる。108 は口縁部内外面に灯芯痕がある。

・欠損により底部の切離しが不明のもの（図 9　101～104・図 10　115）

101 は体部外面に逆位で「吉？」の墨書がある。102 は体部外面に逆位で「右」の墨書がある。103 は体部外面に正位で「□」の墨書がある。104 は体部外面に「□」の墨書がある。115 は体部内面に墨痕が広がり転用硯とみられる。

○甕〔土師器〕（図 8　80～81）

80 は口縁部から体部上半まで残存する。非轆轤で，外面は口縁部がヨコナデ，体部はヘラミガキ，内面は口縁部から体部上半がヘラミガキである。外面に巻上痕がある。81 は口縁部から体部下端が残存する。非轆轤で，口縁部は内外面ともヨコナデ，体部は外面がヘラケズリの後ヘラミガキ，内面はヘラミガキで黒色処理される。

〔赤焼土器〕（図 8　83）

口縁部から体部上半の一部が残存する。口縁部の内外にカーボン（煤）が付着する。

〔須恵器〕（図 8　86）

口縁部から体部の一部が残存する。口縁部外面に並行タタキ・体部内面はカキメである。

○**小形甕**（図 8　82）

赤焼土器である。底部のみ残存する。再調整はない。

○**広口壷**（図 8　84）

須恵器である。口縁部から体部下半が残存する。体部中央で最大幅となる。内面下部に部分的にヘラナデがある。

○**長頸壷**（図 8　85）

須恵器である。頸部の上端から体部中央が残存する。頸部と体部のつけ根に角張ったリングがつく。

(3)層位不明のもの（図 10　116～図 13　190）

層位不明のものを一括した。主に昭和 55 年の踏査で採集した資料である。

○**坏〔土師器〕**（図 10　116～140）

器形は，体部がやや内湾しそのまま立ち上がるもの，口縁部が外反するもの，体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がるものなど多様である。内面の器面調整は体部が横位，底部が放射状のヘラミガキが基本である。

・底部の切り離しが再調整により不明のもの（図 10　116～118・120・121）

116 は体部下端から底面全面が手持ヘラケズリの再調整である。底部外面に「吉」の墨書がある。117 は体部下端から底面全面が回転ヘラケズリの再調整である。体部外面に逆位で「主」の墨書がある。118 は体部下端から底部の一部が残存する。体部下端から底部周縁が手持ヘラケズリの再調整である。体部外面に墨書があるが文字不明である。121 は大形である。体部下端から底面全面が手持ヘラケズリの再調整である。

・底部の切り離しが回転糸切によるもの（図 10　119・122～127・129～131）

119 は底部全面が回転ヘラケズリの再調整である。123 は体部下端から底面全面が手持ヘラケズリの再調整，器面調整はなく内外黒色処理である。124 は底部周縁が手持ヘラケズリの再調整である。口縁部の一部に煤が付着する。底部外面に「×」のヘラ記号がある。129 は再調整がない。口縁部から体部下端の外面にカーボンが付着する。底部外面に「下」の墨書がある。130 は再調整がない。体部外面に正位で墨書があるが文字不明である。

・底部の切り離しが静止糸切によるもの（図 10　128）

128 は再調整がなく，内面は口縁部から体部下端が不定，底部が放射状の単位の短いヘラミガキである。

・欠損により底部切り離しが不明のもの（図 10　132～140）

132 は体部外面に正位の墨書があるが文字不明である。133 は体部外面に正位で「浄」と「□」の二文字の墨書がある。134 は体部外面に墨書があるが文字不明である。135 は体部外面に「□」（吉？）の墨書がある。136～140 は体部外面に墨書があるが，文字不明である。

○**〔赤焼土器〕**（図 10　141～143）

141 は体部外面に横位で「羽」の墨書がある。142・143 は体部外面に墨書があるが，文字不明である。いずれも口縁内面に煤が付着する。

○**〔須恵器〕**

・底部の切り離しが調整により不明のもの（図 11　147）

147 は体部下端から底部全面が回転ヘラケズリの再調整である。体部外面に逆位で「羽」の墨書がある。

・底部の切り離しが回転ヘラ切によるもの（図 11　144・145）

144 は底部周縁が回転ヘラケズリの再調整である。内面に墨痕があり転用硯とみられる。145 は再調整がなく，底部外面に墨書があるが文字不明である。口縁部内外面のカーボン（煤）は灯芯痕とみられる。

・底部の切り離しが回転糸切りによるもの（図 11　146・148～165）

いずれも切離し後の調整はない。146 は底部外面に「×」のヘラ記号がある。148 は体部外面に「□」，底部外面に「主」の二文字の墨書がある。149 は底部外面に「集」の墨書と「×」のヘラ記号がある。150 は体部外面に「□」の墨書がある。151 は体部外面に火襷と「千」の墨書がある。152 は体部内外面に火襷がある。153 は底部内面に墨痕が広がり，外面は「□」の墨書がある。154 は内面に朱墨痕，体部外面に火襷がある。口縁部外面に煤が付着する。158 は底部内面に微量のカーボン（墨痕，煤？）が付着する。

・欠損により底部切り離しが不明のもの（図 11　166～175）

166 は体部外面に正位で「吉」の墨書がある。167 は体部外面に逆位で「廿」の墨書がある。168 は体部外面に「□」の墨書がある。169 は体部外面に「□」（吉？）の墨書がある。170 は体部外面に「□」の墨書がある。171 は体部外面に「□」（止？）の墨書がある。172 は体部外面に「□」の墨書がある。173 は体部外面に正位で「□」（吉？）の墨書がある。174 は体部外面に横位で「□」（吉？）の墨書がある。175 は体部外面に「□」の墨書がある。

○甕（図 12　176・177・179・180）

176 は赤焼土器である。口縁部から体部上半が残存する。体部内外面がヘラナデである。体部中央の内外にカーボン（煤）が付着する。177 は赤焼土器である。口縁部から体部上半が残存する。体部外面がヘラケズリで，体部上半の内外に若干カーボン（煤）が付着する。179 は土師器である。口縁部から体部下端が残存する。口縁部内外がヨコナデ，一部ヘラミガキ，体部外面は上半がハケメ，下半がヘラケズリ，内面はヘラナデである。内外面に巻上痕がある。180 は須恵器である。口縁部から体部上半が残存する。体部外面が平行タタキである。

○鉢（図 12　178）

178 は須恵器である。器面は体部外面の一部にタタキ，中央から下端がヘラケズリである。底部内面に指頭圧痕がある。

(4)その他の土器（図 13　181～190）

○坏〔土師器〕（図 13　181～187）

181～187 は非轆轤で 2・3 層出土の轆轤成形土器と器形・器面調整に共通性が認められるものである。

底部は平底で，体部から口縁部はやや内湾しながら立ち上がるものが多い。外面は横位のヘラケズリまたはヘラミガキで，内面は口縁部から体部が横位のヘラミガキ，底部は放射状のヘラケズリが基本である。183 以外は内黒処理で 185 は内外ともに黒色処理される。184～186 は比較的大形の個体である。

184 は底部外面に「□」（吉？）の墨書がある。185 は体部欠損部の断面に灯芯痕とみられるカーボン（煤）が付着することから，破損後に灯明皿に利用されたと推測する。

・九字線刻（図 13　188・189）

188・189 は土師器坏の体部片である。体部外面に九字線刻がある。

・双耳坏（図 13　190）

190 は双耳坏である。口縁部と脚部が欠損する。内黒処理で，再調整は体部下端から底部周縁が手持ヘラケズリ，内面はヘラミガキである。

土製品

いずれも昭和 55 年の踏査時に採集した資料である。

○土錘（図 13　191～193）

191～193 は，いずれも紡錘形である。外面は摩滅しているが，ケズリで整形されている。

○紡錘車（図 13　194）

約半分が残存する。表裏面ともに指頭痕がある。ほぼ中心に穿孔があり，表裏面ともに粘土のはみだしがあることから，焼成前に開けられたものとみられる。

○羽口（図 13　195）

円筒状で先端部から基部側に向けてゆるやかに開く形状である。先端が欠損する。外面は摩滅し，整形は不明である。

鉄製品（図 13　196）

平成 11 年度の調査で出土した。棒状で，頂部は扁平し，ヘラ状で幅広である。中央の断面は隅丸方形状で，先端部は鋭く尖り，断面は円形である。刺突具かヘラとみられるが，器種は不明である。

小泉遺跡からは多数の墨書土器が出土している。中でも「厨」銘の墨書土器は，蝦夷対策を目的とした官衙の存在の可能性を秘めており，官衙の立地は金や海産物等の流通の拠点としての可能性を示唆していると思われ，小泉遺跡の解明と共に，周辺遺跡の詳細についての把握が必要である。

【脚注】

註 1　小泉遺跡は，現在，一部のみ調査が行なわれており，遺跡の正確な範囲は不明である。ここでいう遺跡の地点とは発掘調査を実施し，遺物の包含を確認した範囲をさす。

註 2　堂の前貝塚から検出している遺物は，本報告書では遺物が小片，摩滅が著しいため割愛されている。

註 3　平成 15 年 12 月に，平成 11 年度調査地点の西側を試掘調査したが，2・3 層類似と層の堆積は把握できず，遺物の出土は極少量であった。

【引用参考文献】

陸前高田市　1994『陸前高田市史　第 2 巻　地質・考古編』

陸前高田市教育委員会　1985『貝畑貝塚発掘調査概報』

陸前高田市教育委員会　1997『堂の前貝塚発掘調査報告書 1』

陸前高田市教育委員会　1998『貝畑貝塚発掘調査報告書』

陸前高田市教育委員会　1999『堂の前貝塚発掘調査報告書Ⅱ』

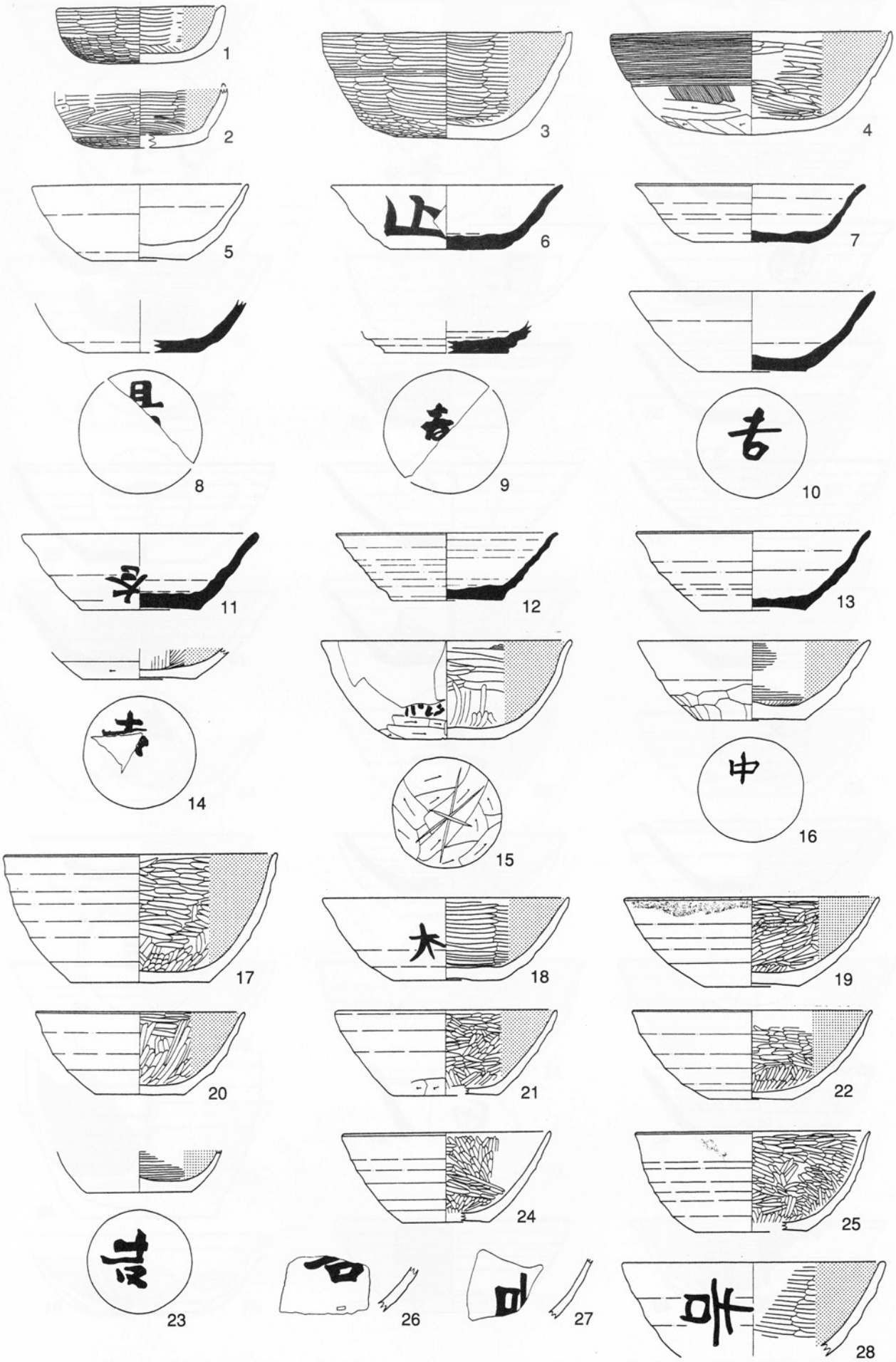


図５　小泉遺跡の出土遺物（1～28）　　(scale 1:3)

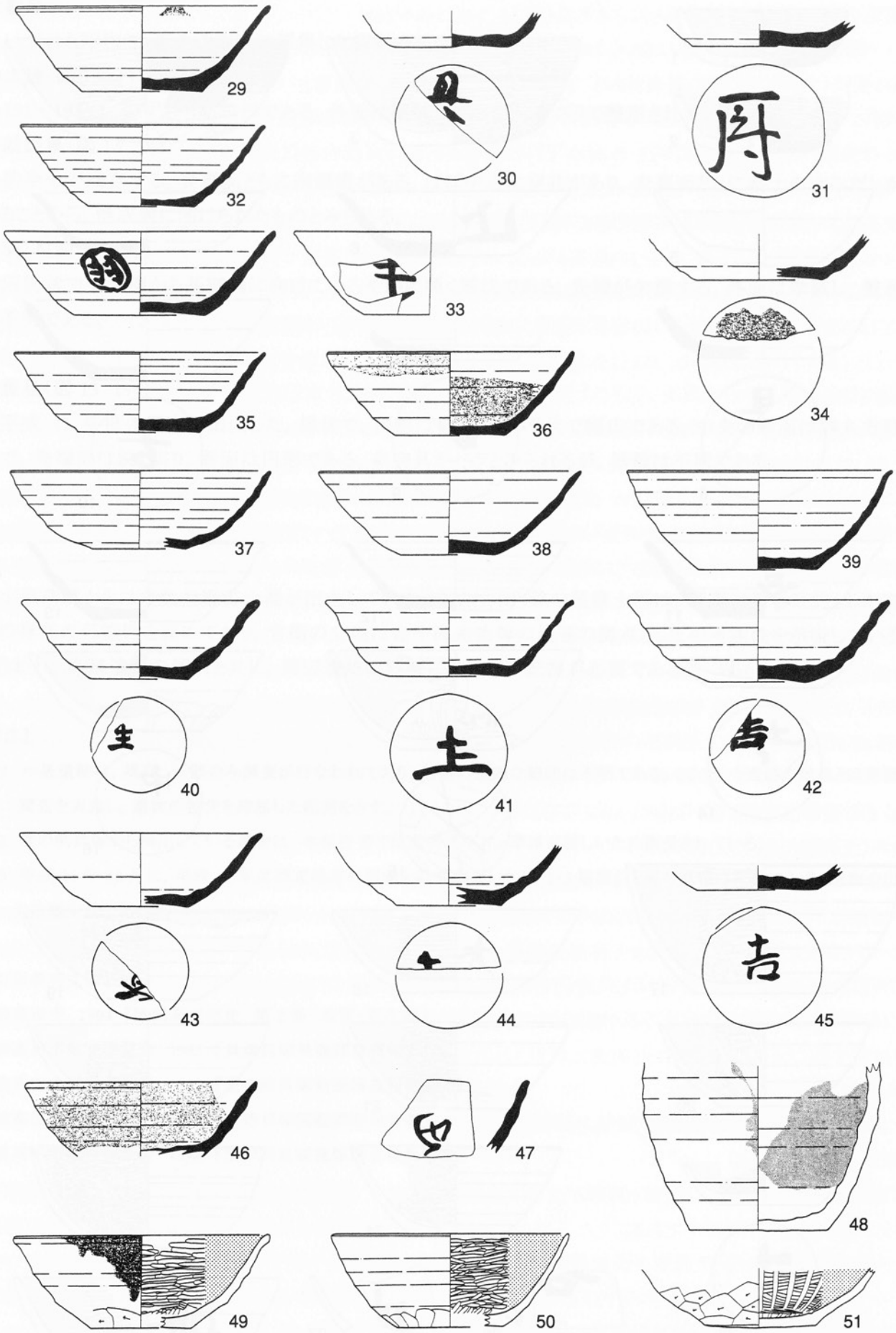


図 6　小泉遺跡の出土遺物（29～51）　(scale 1:3)

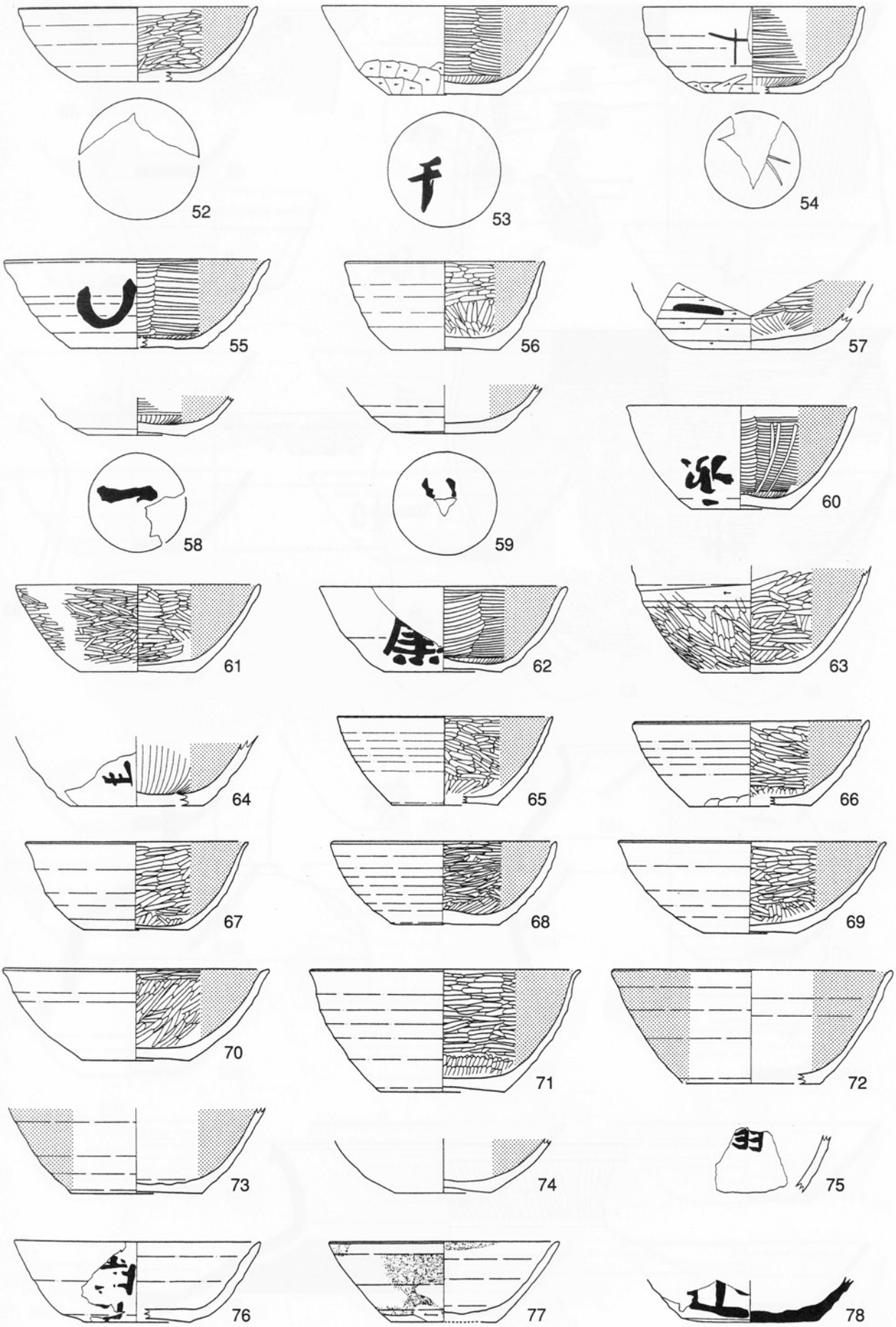


図７　小泉遺跡の出土遺物（52～78）　(scale 1:3)

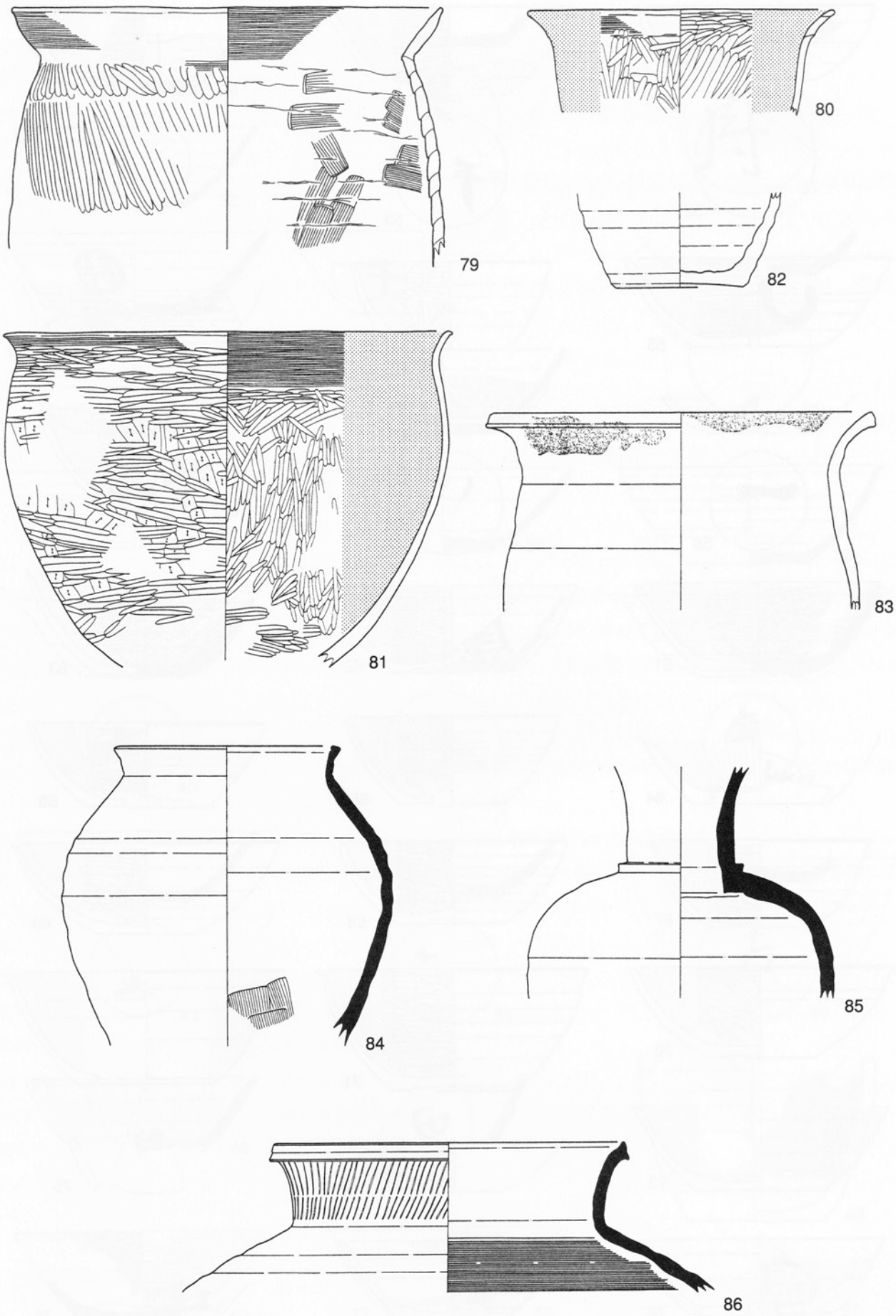


図８　小泉遺跡の出土遺物（79～86）　(scale 1:3)

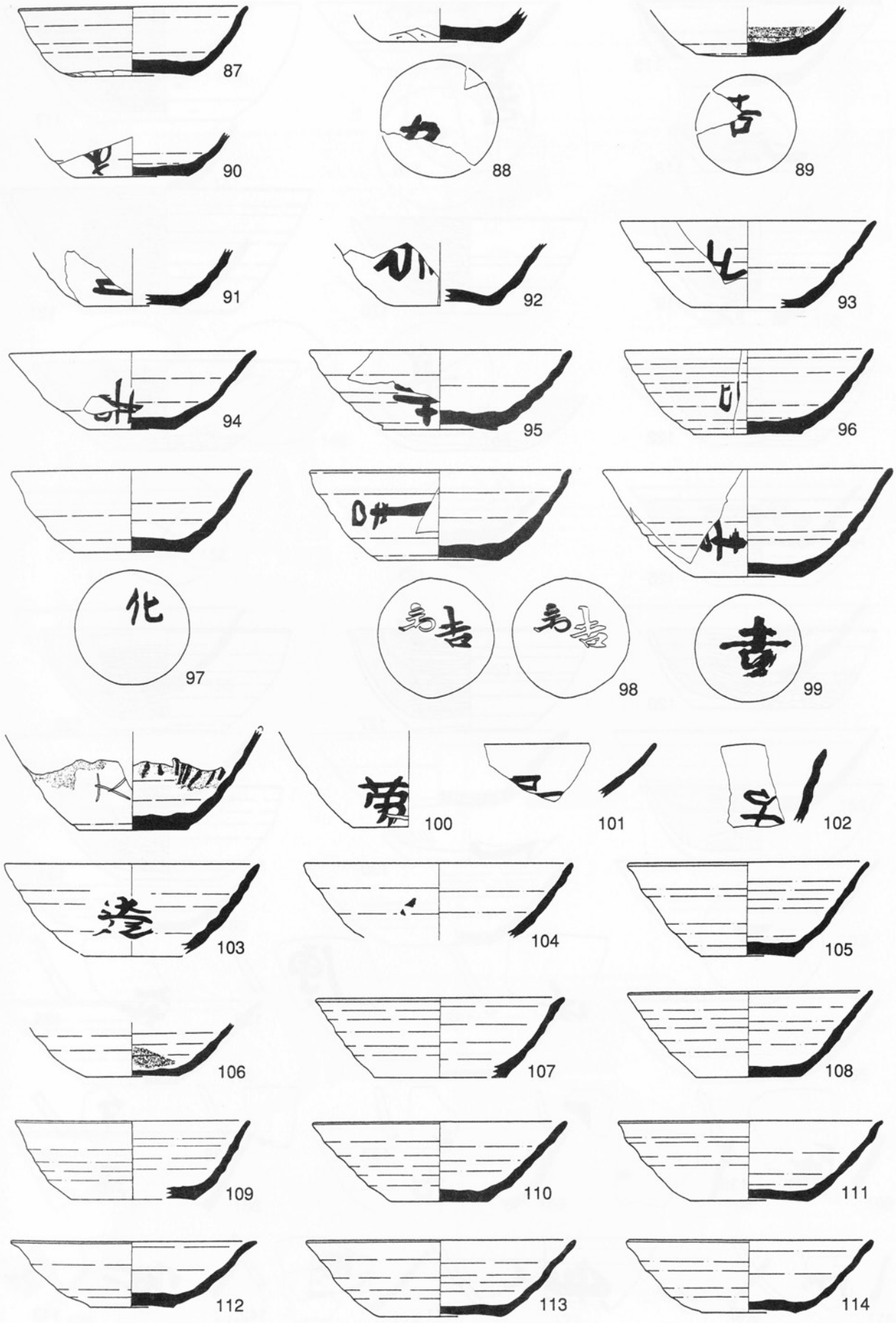


図９　小泉遺跡の出土遺物（87～114）　(scale 1:3)

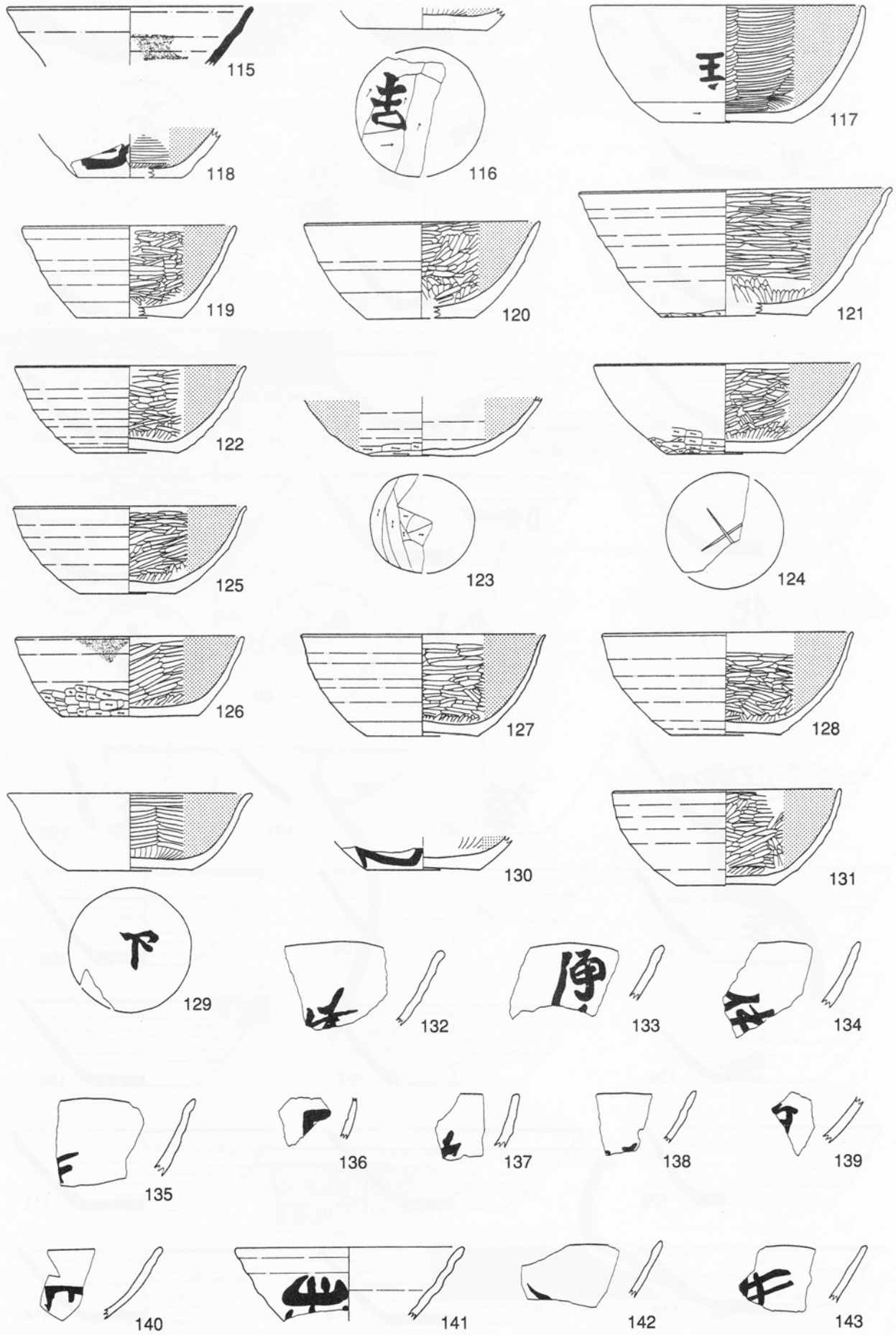


図10　小泉遺跡の出土遺物（115～143）　(scale 1:3)

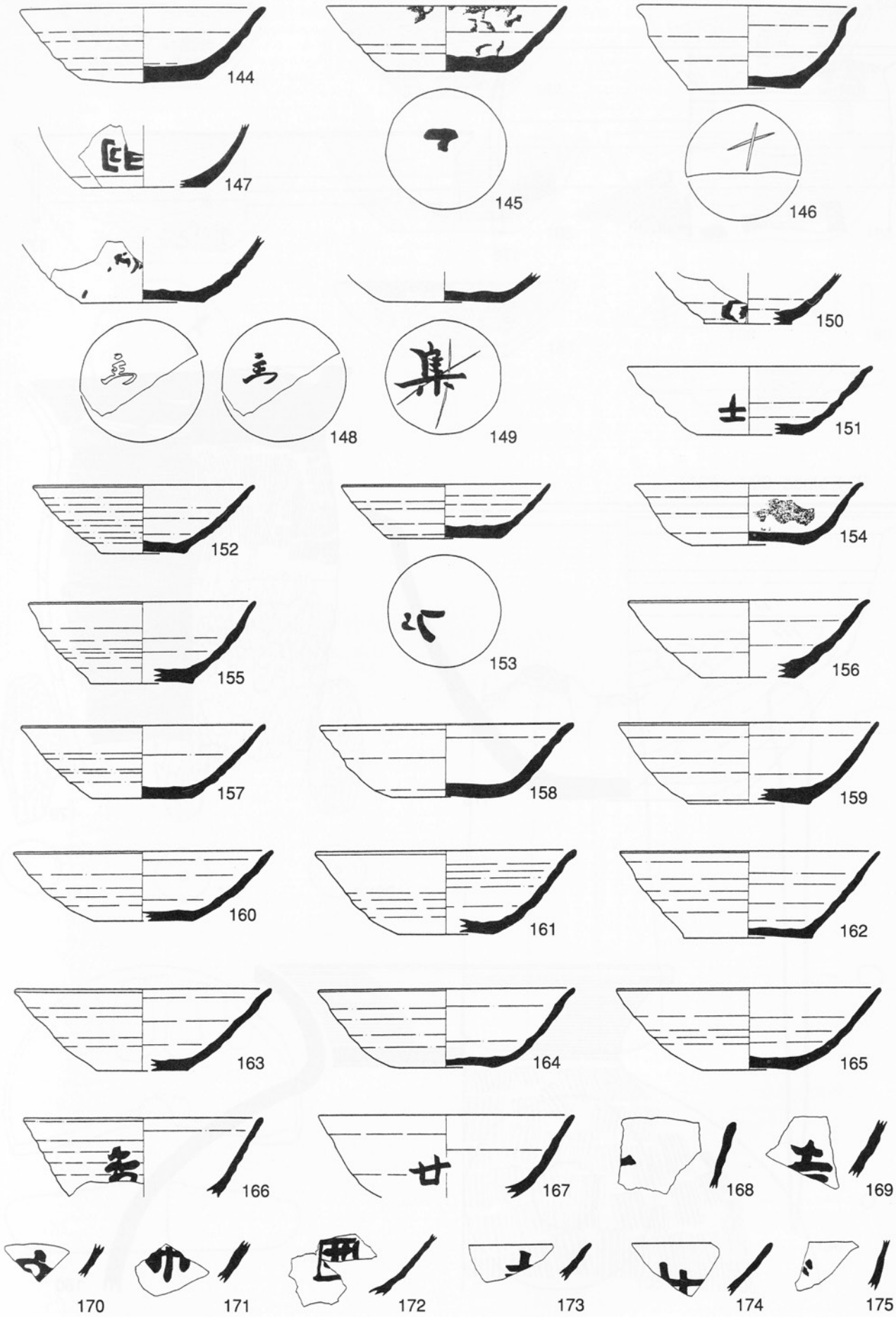


図11　小泉遺跡の出土遺物（144～175）　(scale 1:3)

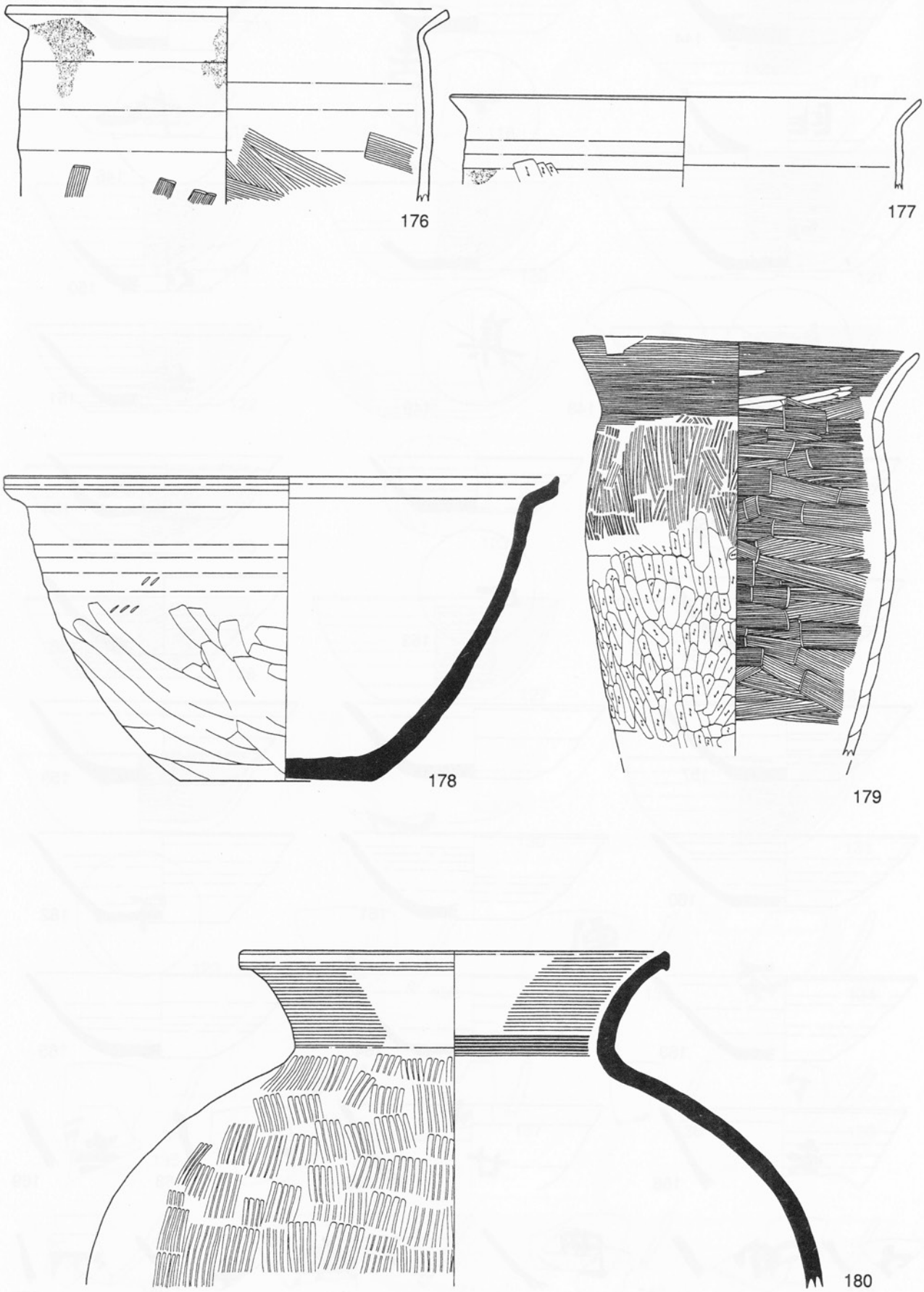
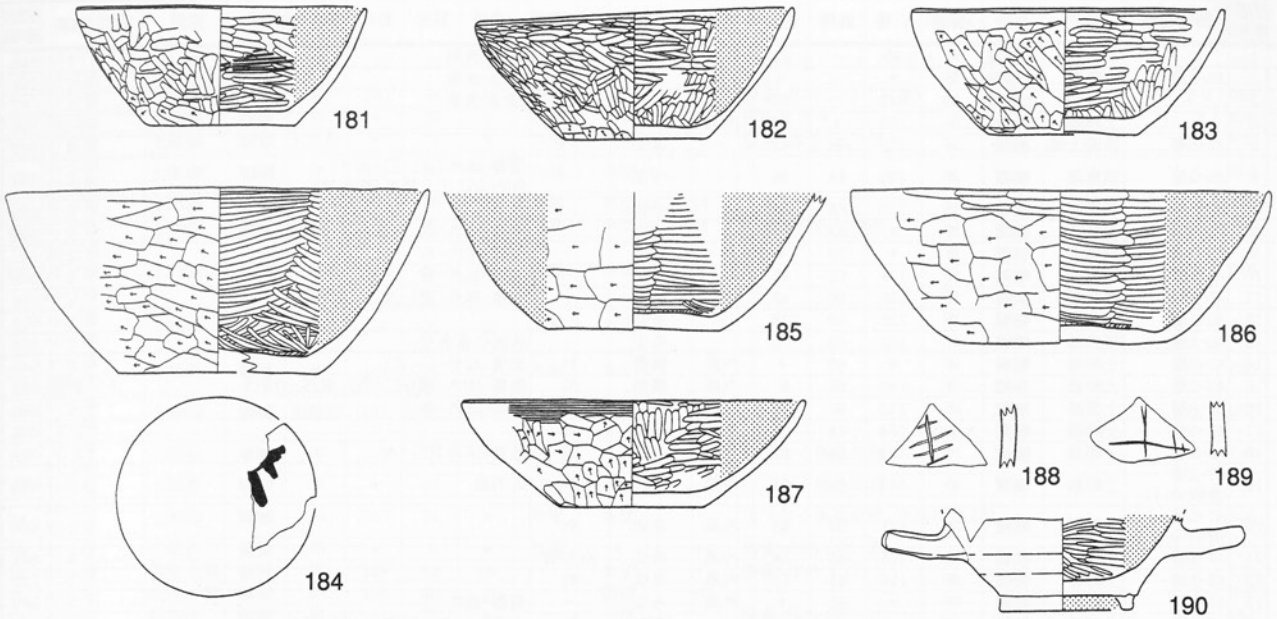


図12　小泉遺跡の出土遺物（176～180）　(scale 1:3)



（181～190 scale 1:3）

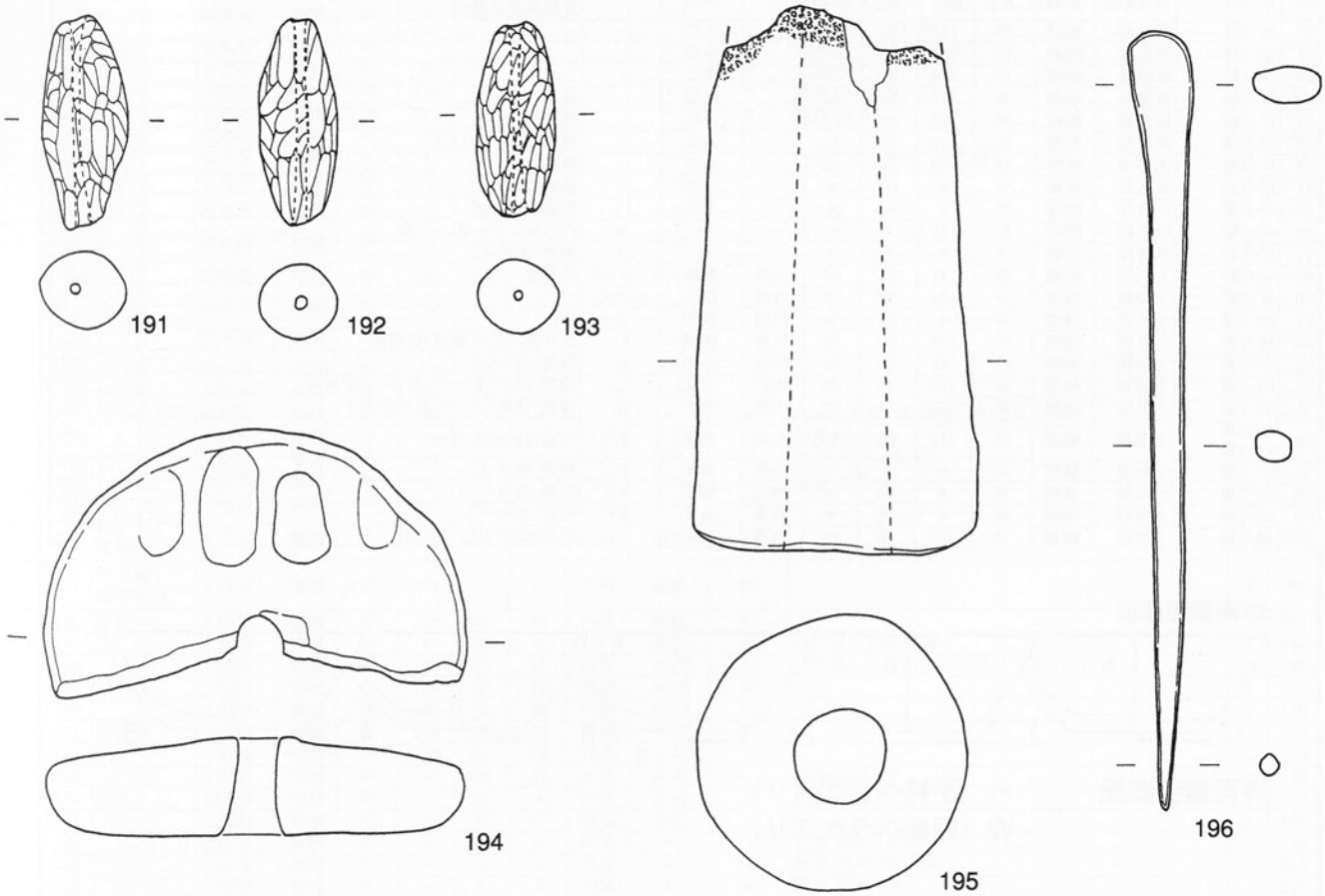
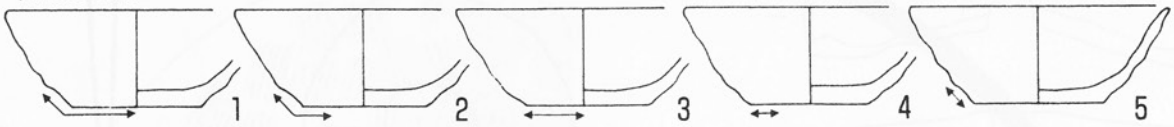


図13　小泉遺跡の出土遺物（土器・土製品・鉄製品）　（191～196 scale 1:2）

表２　小泉遺跡出土の土器観察表（坏）

図版番号	出土位置	種別	成形	器種	口径	底径	器高	黒色	切離	再調整	墨書など	時期	登録番号
1	－	土師器	未轆轤	坏	95	－	32	内黒	－	－	8世紀後葉	1	648
2	A5-5層	土師器	未轆轤	坏	＊	－	＊	内黒	－	－	8世紀後葉	1	649
3	－	土師器	未轆轤	坏	142	－	60	内黒	－	－	8世紀後葉	1	647
4	－	土師器	非轆轤	坏	158	＊	58	内黒	－	－		2-3	196
5	A5-5層	赤焼土器	轆轤	坏	122	54	43	－	糸切	－		3	701
6	A5-5層	須恵器	轆轤	坏	132	64	36	－	ヘラ切	－	墨書-体外(正)-□(止？) 底内面に広く墨痕(転用硯)	2	509
7	A6-5層	須恵器	轆轤	坏	130	65	31	－	ヘラ切	－		2	655
8	A3-5層	須恵器	轆轤	坏	＊	63	＊	－	ヘラ切	－	墨書-底外-具,内外面に煤付着	2	592
9	A6-5層	須恵器	轆轤	坏	＊	70	＊	－	糸切	－	墨書-底外-吉	2	542
10	A6-5層	須恵器	轆轤	坏	139	62	45	－	糸切	－	墨書-底外-吉	2	585
11	A6-5層	須恵器	轆轤	坏	135	66	43	－	糸切	－	墨書-体外(逆)-大□,赤色顔料	2	574
12	A5-5層	須恵器	轆轤	坏	125	62	38	－	糸切	－		2	654
13	A5-5層	須恵器	轆轤	坏	132	60	45	－	糸切	－	体部に傷あり	2	656
14	A5-3層	土師器	轆轤	坏	＊	63	＊	内黒	調整	W1	墨書-底外-□(吉)	2	546
15	A3-3層	土師器	轆轤	坏	140	65	55	内黒	調整	H1	墨書-体外(横)-□(羽),底外-ヘラ記号	2-3	568
16	A6-3層	土師器	轆轤	坏	132	60	45	内黒	糸切	H4	墨書-底外-中	2	564
17	A3-3層	土師器	轆轤	大形坏	154	78	73	内黒	糸切	W3		2-3	695
18	A6-3層	土師器	轆轤	坏	139	64	47	内黒	糸切	H5	墨書-体外(正)-木	2-3	567
19	A7-3層 遺物NO.11	土師器	轆轤	坏	144	52	51	内黒	糸切	W4	灯明皿	3	688
20	A7-3層 遺物NO.9	土師器	轆轤	坏	117	50	46	内黒	糸切	W4		3	685
21	A7-3層	土師器	轆轤	坏	125	60	48	内黒	糸切	H1かH3		2	681
22	A6-3層	土師器	轆轤	坏	136	47	51	内黒	糸切	W1		3	727
23	A7-3層	土師器	轆轤	坏	＊	58	＊	内黒	糸切	－	墨書-底外-吉	3	550
24	A6-3層	土師器	轆轤	坏	＊	64	62	－	調整	W4	内黒なしの土師器、内面ﾐｶﾞｷ	3	700
25	A7-3層	土師器	轆轤	坏	136	64	60	－	糸切	W4	内黒なしの土師器 内面ﾐｶﾞｷ　内面口唇部にカーボン（灯芯痕？）	2-3	699
26	A7-3層	土師器	轆轤	坏	＊	＊	＊	内黒	＊	＊	墨書-体外-□(吉)		540
27	A7-3層	土師器	轆轤	坏	＊	＊	＊	内黒	＊	＊	墨書-体外-□(吉)		535
28	A7-3層	土師器	轆轤	坏	150	＊	＊	内黒	＊	＊	墨書-体外(横)-吉		561
29	A7-3層	須恵器	轆轤	坏	142	68	48	－	糸切	－		2	726
30	A8-3層	須恵器	轆轤	坏	＊	65	＊	－	ヘラ切	－	墨書-底外-具	2	526
31	A6-3層	須恵器	轆轤	坏	＊	74	＊	－	ヘラ切	－	墨書-底外-厨	2	536
32	A7-3層 A6-3層	須恵器	轆轤	坏	136	60	46	－	糸切	－		3	660
33	A7-3層	須恵器	轆轤	坏	150	72	47	－	糸切	－	墨書-体外(正)-羽,体外(正)-□(吉？)	2	559
34	A6-3層	須恵器	轆轤	坏	＊	70	＊	－	糸切	－	底外面に広く墨痕(転用硯)	2	621
35	KZ80	須恵器	轆轤	坏	140	68	45	－	糸切	－		2	1
36	A6-3層	須恵器	轆轤	坏	137	61	47	－	糸切	－	内面に広く墨痕（転用硯、水面見える）　灯芯痕 底部外面に墨痕	3	653
37	A7-3層	須恵器	轆轤	坏	144	52	44	－	糸切	－		3	674
38	A8-3層	須恵器	轆轤	坏	146	54	47	－	糸切	－		3	725
39	A6-3層	須恵器	轆轤	坏	148	66	56	－	糸切	－		2	659
40	A7-3層	須恵器	轆轤	坏	133	54	44	－	糸切	－	墨書-底外-生	3	589
41	A7-3層	須恵器	轆轤	坏	140	66	42	－	糸切	－	墨書-底外-土	2	560
42	A3-3層	須恵器	轆轤	坏	146	53	47	－	糸切	－	墨書-底外-□(吉)	3	572
43	A7-3層	須恵器	轆轤	坏	135	54	41	－	糸切	－	墨書-底外-主	3	586
44	A7-3層	須恵器	轆轤	坏	＊	58	＊	－	糸切	－	墨書-底外-□	3	612
45	A6-3層	須恵器	轆轤	坏	＊	68	＊	－	糸切	－	墨書-底外-吉	2	543
46	A8-3層	須恵器	轆轤	坏	128	＊	＊	－	＊	＊	内外面にカーボン付着		667
47	A7-3層	須恵器	轆轤	坏	＊	＊	＊	－	＊	＊	墨書-体外-□		531
49	A8-2層	土師器	轆轤	坏	141	56	52	内黒	調整	H1かH3	灯芯痕	3	686
50	A7-2層	土師器	轆轤	坏	131	58	53	内黒	調整	H1かH3		2	692
51	A6-2層	土師器	轆轤	坏	＊	62	＊	内黒	調整	H		2	691
52	A6-2層	土師器	轆轤	坏	136	68	42	内黒	調整	H1	底外面に広く墨痕(転用硯)	2	625
53	A8-2層	土師器	轆轤	坏	140	63	50	内黒	糸切	H2	墨書-底外-干	2	563
54	A6-2層	土師器	轆轤	坏	126	54	48	内黒	糸切	H2	墨書-体外(正)-十,底外-ヘラ記号×	3	588
55	A6-2層	土師器	轆轤	坏	150	74	50	内黒	糸切	H2	墨書-体外(正)-U,則天文字？	2	544
56	A6-3層 A2-2層	土師器	轆轤	坏	112	60	50	内黒	調整	W1	内面井桁状ミガキ	2	675
57	A7-2層	土師器	轆轤	坏	＊	＊	＊	内黒	調整	W1	墨書-体外-□		547
58	A6-2層	土師器	轆轤	坏	＊	55	＊	内黒	調整	W1	墨書-底外-一	3	548
59	A3-2層	土師器	轆轤	坏	＊	58	＊	内黒	糸切	W4	墨書-底外-□	3	571
60	A6-2層	土師器	轆轤	坏	130	55	58	内黒	糸切	W4	墨書-体外(逆)-□(丞)	3	552

坏再調整部位



坏再調整表記　　Ｈ（手持ヘラケズリ）
　　Ｗ（回転ヘラケズリ）

（「紫波城跡Ⅰ―太田八方遺跡範囲確認調査報告」1980　盛岡市教育委員会より転載）

図版番号	出土位置	種別	成形	器種	口径	底径	器高	黒色	切離	再調整	墨書など	時期	登録番号
61	A6-ﾍﾞﾙﾄ2層 A5-2層	土師器	轆轤	坏	138	65	50	内黒	糸切	W3	体部外面ミガキ（黒色なし）	2	683
62	A7-2層	土師器	轆轤	坏	140	66	48	内黒	糸切	-	墨書-体外(正)-□(集)	2-3	565
63	A6-2層	土師器	轆轤	坏	*	55	*	内黒	糸切	W4	外面ミガキ	3	698
64	A7-2層	土師器	轆轤	大形坏	*	74	*	内黒	糸切	-	墨書-体外(正)-廿	2	549
65	A6-2層 A6-3層	土師器	轆轤	坏	121	60	50	内黒	糸切	-		2	680
66	A5-2層	土師器	轆轤	坏	132	68	48	内黒	糸切	H4		2	684
67	A7-2層	土師器	轆轤	坏	124	58	50	内黒	糸切	W4	内面銀黒色に発色	2	679
68	A2-2層 A6-3層 A6-2層	土師器	轆轤	坏	126	60	47	内黒	糸切	-		2	676
69	A6-2層 A8-2層	土師器	轆轤	坏	150	51	52	内黒	糸切	-		3	682
70	A8-2層 遺物NO.2	土師器	轆轤	坏	148	60	52	内黒	糸切	-		3	696
71	A7-2層 A7-3層	土師器	轆轤	大形坏	152	70	69	内黒	糸切	-		2	697
72	A3-2層 A4-2層	土師器	轆轤	坏	158	78	64	内外黒	糸切	-	ﾐｶﾞｷなく黒色処理	2	643
73	A3-2層	土師器	轆轤	坏	*	74	*	内外黒	糸切	-	ﾐｶﾞｷなく黒色処理	2	645
74	A8-2層 A6-3層	土師器	轆轤	坏	*	54	*	内黒	糸切	-	ﾐｶﾞｷなく黒色処理,内面に煤か?	3	646
75	A2-2層	土師器	轆轤	坏	*	*	*	内黒	*	*	墨書-体外(逆)-羽		525
76	A8-2層	赤焼土器	轆轤	坏	139	58	45	-	糸切	-	墨書-体外-□□	3	538
77	A4-2層	赤焼土器	轆轤	坏	130	60	45	-	調整	H1		2	650
78	A6-2層	須恵器	轆轤	坏	*	78	*	-	ﾍﾗ切	-	墨書-体外(正)-止	2	587
87	A6-3層 A4-2層	須恵器	轆轤	坏	129	66	39	-	糸切	H2		2	651
88	KZ80	須恵器	轆轤	坏	*	67	*	-	糸切	H4	墨書-底外-□(力)	2	511
89	A6-2層	須恵器	轆轤	坏	*	56	*	-	糸切	-	墨書-底外-吉,底内面に墨痕と摩滅(転用硯)	3	541
90	A6-2層	須恵器	轆轤	坏	*	63	*	-	糸切	-	墨書-体外(逆)-□	2-3	580
91	A3-2層	須恵器	轆轤	坏	*	54	*	-	糸切	-	墨書-体外-□,転用硯？	3	613
92	A6-2層	須恵器	轆轤	坏	*	55	*	-	糸切	-	墨書-体外(横)-□(吉)	3	537
93	A7-2層	須恵器	轆轤	坏	144	64	48	-	糸切	-	墨書-体外(逆)-□(万)	2	590
94	A6-2層	須恵器	轆轤	坏	139	49	44	-	糸切	-	墨書-体外(横)-□(吉),正しく書けない	3	545
95	A7-2層	須恵器	轆轤	坏	147	64	45	-	糸切	-	墨書-体外(逆)-□(吉),底内面摩滅	3	573
96	A7-2層	須恵器	轆轤	坏	138	60	48	-	糸切	-	墨書-体外(横)-□(吉)	3	581
97	A6-2層	須恵器	轆轤	坏	136	65	46	-	糸切	-	墨書-底外-化	2	566
98	A7-2層	須恵器	轆轤	坏	146	68	51	-	糸切	-	墨書-体外(横)-吉,底外-主,底外-吉,主は二書き	2	579
99	A7-2層	須恵器	轆轤	坏	163	60	61	-	糸切	-	墨書-体外(横)-吉,底外-吉	3	575
100	A4-2層	須恵器	轆轤	坏	*	61	*	-	糸切	-	墨書-体外(正)-□(第),体外(横)-丈［刻書］ 灯心痕タール付着	3	562
101	A6-2層	須恵器	轆轤	坏	*	*	*	-	*	*	墨書-体外(逆)-□(吉)		539
102	A5-2層	須恵器	轆轤	坏	*	*	*	-	*	*	墨書-体外(逆)-右		527
103	A7-2層	須恵器	轆轤	坏	144	*	*	-	*	*	墨書-体外(正)-□		569
104	A6-2層	須恵器	轆轤	坏	151	*	*	-	*	*	墨書-体外-□		593
105	A7-2層	須恵器	轆轤	坏	134	52	53	-	糸切	-		3	665
106	A2-2層	須恵器	轆轤	坏	*	51	*	-	糸切	-	内面に広く墨痕（転用硯）	3	664
107	A6-2層	須恵器	轆轤	坏	139	74	45	-	糸切	-		2	669
108	A3-2層 A3-3層	須恵器	轆轤	坏	136	58	48	-	糸切	-	灯芯痕	3	657
109	A8-2層	須恵器	轆轤	坏	132	70	44	-	糸切	-		2	658
110	A6-3層 A7-2層	須恵器	轆轤	坏	142	54	45	-	糸切	-		3	652
111	A8-2層	須恵器	轆轤	坏	147	66	45	-	糸切	-		2	668
112	A7-2層 A8-3層	須恵器	轆轤	坏	137	47	37	-	糸切	-		3	662
113	A8-2層	須恵器	轆轤	坏	150	68	43	-	糸切	-		2	666
114	A6-2層	須恵器	轆轤	坏	138	52	41	-	糸切	-		3	663
115	A2-2層	須恵器	轆轤	坏	138	*	*	-	*	*	内面に墨痕（転用硯、水面見える）		671
116	-	土師器	轆轤	坏	*	72	*	内黒	調整	H1	墨書-底外-吉	2	523
117	KZ80	土師器	轆轤	坏	154	68	62	内黒	調整	W1	墨書-体外(逆)-主	2	582
118	-	土師器	轆轤	坏	*	58	*	内黒	調整	H2	墨書-体外-□	3	528
119	-	土師器	轆轤	坏	120	59	51	内黒	糸切	W3		2	729
120	A6 遺物NO.5-B	土師器	轆轤	坏	132	60	54	内黒	調整	W1		2	689
121	A7-2層 遺物NO.4	土師器	轆轤	大形坏	174	82	71	内黒	調整	H1		2	693
122	KZ80	土師器	轆轤	坏	126	55	49	内黒	糸切	W4		3	641
123	-	土師器	轆轤	坏	*	58	*	内外黒	糸切	H1	ﾐｶﾞｷなく黒色処理	2	644
124	-	土師器	轆轤	坏	148	65	51	内黒	糸切	H4	ﾍﾗ記号，口縁部にカーボン（煤）が付着	2	149
125	-	土師器	轆轤	坏	129	53	49	内黒	糸切	W4		3	730
126	-	土師器	轆轤	坏	128	78	45	内黒	糸切	H1		2	198
127	A7-2層	土師器	轆轤	坏	136	63	57	内黒	糸切	W4		2-3	728
128	-	土師器	轆轤	坏	140	61	58	内黒	静止糸切	-		3	115
129	-	土師器	轆轤	坏	137	68	43	内黒	糸切	-	墨書-底外-下	2	519
130	KZ80	土師器	轆轤	坏	*	63	*	内黒	糸切	-	墨書-体外(正)-□	2	583
131	-	土師器	轆轤	坏	127	55	47	内黒	糸切	-		3	687
132	-	土師器	轆轤	坏	*	*	*	内黒	*	*	墨書-体外(正)-□		520
133	-	土師器	轆轤	坏	*	*	*	内黒	*	*	墨書-体外(正)-淨□		515
134	-	土師器	轆轤	坏	*	*	*	内黒	*	*	墨書-体外-□		578
135	KZ80	土師器	轆轤	坏	*	*	*	内黒	*	*	墨書-体外(逆)-□(吉？)		522
136	-	土師器	轆轤	坏	*	*	*	内黒	*	*	墨書-体外-□		557
137	-	土師器	轆轤	坏	*	*	*	内黒	*	*	墨書-体外(正)-□		518

図版番号	出土位置	種別	成形	器種	口径	底径	器高	黒色	切離	再調整	墨書など	時期	登録番号
138	－	土師器	轆轤	坏	＊	＊	＊	内黒	＊	＊	墨書-体外-□		521
139	－	土師器	轆轤	坏	＊	＊	＊	内黒	＊	＊	墨書-体外-□		524
140	－	土師器	轆轤	坏	＊	＊	＊	内黒	＊	＊	墨書-体外-□		533
141	－	赤焼土器	轆轤	坏	129	＊	＊	－	＊	＊	墨書-体外(横)-羽		514
142	－	赤焼土器	轆轤	坏	＊	＊	＊	－	＊	＊	墨書-体外-□,煤付着		615
143	－	赤焼土器	轆轤	坏	＊	＊	＊	－	＊	＊	墨書-体外-□,煤付着		614
144	－	須恵器	轆轤	坏	140	70	43	－	ヘラ切	－	転用硯	2	117
145	KZ80	須恵器	轆轤	坏	137	68	37	－	ヘラ切	－	墨書-底外-□,灯芯痕	2	594
146	－	須恵器	轆轤	坏	120	64	45	－	糸切	－	ヘラ記号	2	201
147	－	須恵器	轆轤	坏	＊	70	＊	－	調整	W1	墨書-体外(逆)-羽	2	517
148	KZ80	須恵器	轆轤	坏	＊	70	＊	－	糸切	－	墨書-体外-□,底外-主	2	510
149	－	須恵器	轆轤	坏	＊	66	＊	－	糸切	－	墨書-底外-集,底外-ヘラ記号×	2	508
150	KZ80	須恵器	轆轤	坏	＊	50	＊	－	糸切	－	墨書-体外-□	3	507
151	－	須恵器	轆轤	坏	140	60	39	－	糸切	－	墨書-体外(逆)-干,火襷	3	584
152	－	須恵器	轆轤	坏	126	47	39	－	糸切	－	火襷	3	150
153	－	須恵器	轆轤	坏	118	64	31	－	糸切	－	内面墨痕、墨書-底部-□	2-3	741
154	－	須恵器	轆轤	坏	130	64	35	－	糸切	－	朱墨か?, 火襷, 口縁部に煤	2	642
155	－	須恵器	轆轤	坏	129	58	47	－	糸切	－		2	199
156	KZ99?	須恵器	轆轤	坏	138	48	44	－	糸切	－		3	672
157	KZ80	須恵器	轆轤	坏	140	50	47	－	糸切	－		3	640
158	KZ80	須恵器	轆轤	坏	144	60	41	－	糸切	－		3	732
159	－	須恵器	轆轤	坏	148	70	46	－	糸切	－		2	148
160	－	須恵器	轆轤	坏	148	56	40	－	糸切	－		3	731
161	－	須恵器	轆轤	坏	148	54	48	－	糸切	－		3	197
162	－	須恵器	轆轤	坏	147	74	50	－	糸切	－		2	661
163	KZ80	須恵器	轆轤	坏	146	50	47	－	糸切	－		3	639
164	－	須恵器	轆轤	坏	146	52	45	－	糸切	－		3	124
165	KZ80	須恵器	轆轤	坏	150	52	47	－	糸切	－		3	638
166	KZ80	須恵器	轆轤	坏	137	＊	＊	－	＊	＊	墨書-体外(正)-吉		512
167	－	須恵器	轆轤	坏	146	＊	＊	－	＊	＊	墨書-体外-廿		591
168	－	須恵器	轆轤	坏	＊	＊	＊	－	＊	＊	墨書-体外(正)-□		555
169	KZ80	須恵器	轆轤	坏	＊	＊	＊	－	＊	＊	墨書-体外-□(吉)		516
170	－	須恵器	轆轤	坏	＊	＊	＊	－	＊	＊	墨書-体外-□		558
171	－	須恵器	轆轤	坏	＊	＊	＊	－	＊	＊	墨書-体外(正)-□(止？)		532
172	－	須恵器	轆轤	坏	＊	＊	＊	－	＊	＊	墨書-体外-□		513
173	KZ99	須恵器	轆轤	坏	＊	＊	＊	－	＊	＊	墨書-体外(正)-□(吉？)		530
174	－	須恵器	轆轤	坏	＊	＊	＊	－	＊	＊	墨書-体外(横)-□(吉？)		534
175	－	須恵器	轆轤	坏	＊	＊	＊	－	＊	＊	墨書-体外-□		556
181	－	土師器	非轆轤	坏	117	59	49	内黒	－	－		2-3	195
182	A6-3層 A6-ベルト2層 A7-2層	土師器	非轆轤	坏	128	57	50	内黒	－	－	体部～底部までケズリ→ミガキ 内面ミガキ不定方向	2-3	678
183	－	土師器	非轆轤	坏	125	59	51	－	－	－		2-3	200
184	A6-3層	土師器	非轆轤	大形坏	172	80	75	内黒	－	－	墨書-底外-□(吉？)	2-3	570
185	A6-5層 A7-3層	土師器	非轆轤	大形坏	＊	69	＊	内外黒	－	－	破損後、灯芯痕	2-3	690
186	A6-5層 A6-ベルト3層	土師器	非轆轤	大形坏	170	85	61	内黒	－	－		2-3	694
187	A7-2層	土師器	非轆轤	坏	138	58	43	内黒	－	－	体部～底部までケズリ、内面ミガキ不定方向	2-3	677
188	A7-2層	土師器	轆轤	坏	＊	＊	＊	内黒	＊	＊	九字線刻		622
189	－	土師器	轆轤	坏	＊	＊	＊	内黒	(摩滅)		九字線刻		623
190	KZ80	土師器	轆轤	双耳坏	＊	＊	＊	内黒	調整	H2	高台部欠損		738
	－	須恵器	轆轤	坏	＊	62	＊	－	糸切	－	火襷	2-3	2
	－	須恵器	轆轤	坏	＊	＊	＊	－	＊	＊	墨書-体外-□		513
	A6-2層	土師器	轆轤	坏	＊	＊	＊	内黒	糸切	H5	墨書-底外-□		529
	A6-2層	土師器	轆轤	坏	＊	＊	＊	内黒	糸切	体外面ミガキ	墨書-体外-□		551
	A6-2層	須恵器	轆轤	坏	＊	＊	＊	－	糸切	－	墨書-体外-□,体外-□,ヘラ記号×		553
	A6-2層	須恵器	轆轤	坏	＊	＊	＊	－	＊	＊	墨書-体外(正)-□		553
	－	須恵器	轆轤	坏	＊	＊	＊	－	＊	＊	墨書-体外-□		576
	－	須恵器	轆轤	坏	＊	＊	＊	－	＊	＊	墨書-体外-□		577
	KZ99	須恵器	轆轤	坏	＊	＊	＊	－	＊	＊	墨書-体外-□		595
	A4-2層	須恵器	轆轤	坏	＊	＊	＊	－	＊	＊	墨書-体外-□		596
	KZ80	須恵器	轆轤	坏	＊	＊	＊	－	ヘラ切	－	墨書-底外-□		597
	A6-2層	土師器	轆轤	坏	＊	＊	＊	内黒	糸切	W3	墨書-体外-□,底外-一		598
	A6-2層	土師器	轆轤	坏	＊	＊	＊	内黒	糸切	－	墨書-底外-□,底外-ヘラ記号		599
	－	赤焼土器	轆轤	坏	＊	＊	＊	－	＊	＊	墨書-体外-□		600
	A7-2層	土師器	轆轤	坏	＊	＊	＊	内黒	＊	＊	墨書-体外-□		601
	A2-2層	土師器	轆轤	坏	＊	＊	＊	内黒	糸切	－	墨書-体外-□		602
	A6-3層	土師器	轆轤	坏	＊	＊	＊	内黒	調整	H1	墨書-体外-□		603
	KZ80	赤焼土器	轆轤	坏	＊	＊	＊	－	＊	＊	墨書-体外-□		604
	A5-2層	土師器	轆轤	坏	＊	＊	＊	内黒	糸切	－	墨書-体外-□		605
	－	土師器	轆轤	坏	＊	＊	＊	内黒	＊	＊	墨書-体外-□		606
	－	土師器	轆轤	坏	＊	＊	＊	内黒	＊	＊	墨書-体外-□		607
	－	土師器	轆轤	坏	＊	＊	＊	内黒	＊	＊	墨書-体外-□		608
	－	土師器	轆轤	坏	＊	＊	＊	内黒	＊	＊	墨書-体外-□		609
	－	土師器	轆轤	坏	＊	＊	＊	内黒	＊	＊	墨書-底外-□		610
	－	須恵器	轆轤	坏	＊	＊	＊	－	＊	＊	墨書-体外-□		611
	A2-2層	須恵器	轆轤	坏				－	糸切	－	火襷		616
	A7-2層	須恵器	轆轤	坏				－	糸切	－	ヘラ記号		617
	A4-2層	須恵器	轆轤	坏				－	ヘラ切	－	底内外面に広く墨痕(転用硯)		618
	－	須恵器	轆轤	坏				－	(摩滅)		火襷		619
	－	須恵器	轆轤	坏				－	糸切	－	火襷		620
	－	須恵器	轆轤	坏	＊	＊	49	－	＊	＊	ヘラ記号		624
	A7-2層	須恵器	轆轤	坏	＊	50	＊	－	糸切	－	墨書-体部-□	3	630

図版番号	出土位置	種別	成形	器種	口径	底径	器高	黒色	切離	再調整	墨書など	時期	登録番号
	－	須恵器	轆轤	坏	＊	＊	＊	－	＊	＊	墨書-体外-□		631
	－	須恵器	轆轤	坏	＊	72	＊	－	ヘラ切	＊	墨書-体外-□	2	632
	－	須恵器	轆轤	坏	＊	＊	＊	－	＊	＊	墨書-体部-□　火襷		633
	KZ80	土師器	轆轤	坏	160	＊	＊	内黒	＊	＊	墨書-体部-吉カ（正位）		634
	－	土師器	轆轤	坏	126	＊	＊	内黒	＊	＊	墨書-体部-□　火襷		635
	A4-2層	土師器	轆轤	坏	＊	＊	＊	内黒	調整	H2	ヘラ記号		636
	A7-2層	須恵器	轆轤	坏	＊	＊	＊	－	＊	＊	墨書-体外-□		637
	A4-2層 A5-2層	須恵器	轆轤	坏	＊	＊	46	－	糸切	－			670
	A4-5層	須恵器	轆轤	坏	＊	＊	＊	－	＊	＊	灯芯痕（内外）		673
	－	須恵器	轆轤	鉢	303	116	176	－		－			705
	KZ80	土師器	轆轤	高台坏	＊	＊	＊	内黒	糸切	－	低い高台　10世紀中頃		718
	KZ80	須恵器	轆轤	坏	136	58	45	－	糸切	W5		3	739
	KZ80	須恵器	轆轤	坏	142	74	40	－	糸切	－		2	740
	KZ80	須恵器	轆轤	坏	150	76	46	－	調整	W2		2	742
	KZ80	土師器	轆轤	坏	134	54	50	内黒	摩滅	摩滅		3	743
	KZ80	土師器	轆轤	大形坏	174	86	68	内黒	調整	H2			744
	KZ80	赤焼土器	轆轤	坏	＊	60	＊	－	糸切	W4		2-3	748
	KZ80	赤焼土器	轆轤	坏	＊	64	＊	－	糸切	摩滅		2-3	749
	KZ80	赤焼土器	轆轤	坏	＊	44	＊	－	糸切	－	内面にスス付着	3	750
	KZ80	赤焼土器	轆轤	坏	＊	58	＊	－	糸切	W4		3	751
	KZ80	赤焼土器	轆轤	坏	＊	54	＊	－	糸切	H4		3	752
	KZ80	須恵器	轆轤	坏	126	＊	＊	－	＊	＊			753
	KZ80	赤焼土器	轆轤	坏	126	60	37	－	調整	H1		2-3	754
	KZ80	赤焼土器	轆轤	坏	＊	70	＊	－	＊	H2		2	755
	KZ80	赤焼土器	轆轤	坏	＊	58	＊	－	糸切	H4		3	756
	KZ80	須恵器	轆轤	坏	140	＊	＊	－	＊	＊			757
	KZ80	赤焼土器	轆轤	坏	130	＊	＊	－	＊	＊			758
	KZ80	土師器	轆轤	坏	130	＊	＊	内黒	＊	＊			759
	KZ80	土師器	轆轤	坏	＊	56	＊	内黒	糸切	W3		3	760
	KZ80	土師器	轆轤	坏	＊	60	＊	内黒	調整	H1		2-3	761
	KZ80	土師器	轆轤	坏	＊	58	＊	内黒	調整	W1		3	762
	KZ80	土師器	轆轤	坏	＊	64	＊	内黒	調整	H1		2-3	763
	KZ80	土師器	轆轤	坏	＊	66	＊	内黒	糸切	H4		2	764
	KZ80	土師器	轆轤	坏	＊	68	＊	内黒	調整	W1		2	765
	KZ80	赤焼土器	轆轤	坏	160	＊	＊	－	＊	＊			766
	KZ80	土師器	轆轤	坏	＊	60	＊	内黒	糸切	－		2-3	767
	KZ80	須恵器	轆轤	坏	＊	66	＊	－	糸切	－		2	768
	KZ80	須恵器	轆轤	坏	＊	64	＊	－	糸切	－		2-3	769
	KZ80	須恵器	轆轤	坏	140	58	45	－	糸切	－		3	770
	KZ80	須恵器	轆轤	坏	150	48	40	－	糸切	－		3	771
	KZ80	須恵器	轆轤	坏	＊	66	＊	－	ヘラ切	－		2	772
	A6-3層	須恵器	轆轤	坏	＊	54	＊	－	糸切	－		3	774
	A4-2層	須恵器	轆轤	坏	＊	57	＊	－	糸切	－		3	775
	KZ80	須恵器	轆轤	坏	150	＊	＊	－	＊	＊			776
	A7-2層	須恵器	轆轤	坏	136	＊	＊	－	＊	＊			777
	A7-3層	須恵器	轆轤	坏	138	＊	＊	－	＊	＊			778
	KZ80	須恵器	轆轤	坏	＊	＊	＊	－	＊	＊			779
	A6-3層	須恵器	轆轤	坏	138	＊	＊	－	＊	＊			780
	A7-3層	須恵器	轆轤	坏	152	＊	＊	－	＊	＊			781
	A5-3層	須恵器	轆轤	坏	150	＊	＊	－	＊	＊	灯芯痕（内外）		782
	A6-3層	須恵器	轆轤	坏	148	＊	＊	－	＊	＊			783
	A6-3層	須恵器	轆轤	坏	150	＊	＊	－	＊	＊			784
	A5-3層	須恵器	轆轤	坏	＊	＊	＊	－	＊	＊			785
	KZ80	須恵器	轆轤	坏	＊	＊	＊	－	＊	＊	灯芯痕　内面に墨書（パレット？）		786
	A6-2層	須恵器	轆轤	坏	136	＊	＊	－	＊	＊			787
	A2-2層	須恵器	轆轤	坏	156	＊	＊	－	＊	＊			788
	KZ80	須恵器	轆轤	坏	150	＊	＊	－	＊	＊	火襷		789
	－	須恵器	轆轤	坏	＊	＊	＊	－	＊	＊			790
	A3-3層	須恵器	轆轤	坏	142	＊	＊	－	＊	＊			791
	A7-3層	須恵器	轆轤	坏	156	＊	＊	－	＊	＊			792
	－	須恵器	轆轤	坏	＊	＊	＊	－	＊	＊	火襷		793
	A6-2層	須恵器	轆轤	坏	136	＊	＊	－	＊	＊	内面ミガキ		794
	A6-3層	須恵器	轆轤	坏	156	＊	＊	－	＊	＊			795
	A8-3層	須恵器	轆轤	坏	＊	＊	＊	－	＊	＊			796
	KZ80	須恵器	轆轤	坏	＊	＊	＊	－	＊	＊			797
	A8-2層	須恵器	轆轤	坏	142	＊	＊	－	＊	＊			798
	－	須恵器	轆轤	坏	＊	＊	＊	－	＊	＊			799
	A7-2層 A2-2層	須恵器	轆轤	坏	138	＊	＊	－	＊	＊			800
	A7-2層	須恵器	轆轤	坏	134	＊	＊	－	＊	＊			801
	A6-2層	須恵器	轆轤	坏	＊	＊	＊	－	＊	＊			802
	－	須恵器	轆轤	坏	＊	＊	＊	－	＊	＊	火襷		803
	－	須恵器	轆轤	坏	＊	＊	＊	－	＊	＊	火襷（内外）		804
	A2-2層 A5-2層	須恵器	轆轤	坏	＊	＊	＊	－	＊	＊	火襷（内面）		805
	－	須恵器	轆轤	坏	＊	＊	＊	－	＊	＊	灯心痕か?		806
	A6-2層	須恵器	轆轤	坏	＊	＊	＊	－	＊	＊	内面口縁部に墨書か?		807
	－	須恵器	轆轤	坏	＊	＊	＊	－	＊	＊			808
	KZ80	須恵器	轆轤	坏	＊	＊	＊	－	＊	＊	墨痕か?		809
	A6-2層	須恵器	轆轤	坏	128	＊	＊	－	＊	＊			810
	A8-2層	須恵器	轆轤	坏	＊	＊	＊	－	＊	＊			811
	－	須恵器	轆轤	坏	＊	＊	＊	－	＊	＊	灯芯痕		812
	KZ80	須恵器	轆轤	坏	＊	＊	＊	－	＊	＊	灯芯痕（内外）		813

図版番号	出土位置	種別	成形	器種	口径	底径	器高	黒色	切離	再調整	墨書など	時期	登録番号
	－	赤焼土器	轆轤	坏	＊	＊	＊	－	＊	＊	灯芯痕（内外）		814
	－	赤焼土器	轆轤	坏	＊	＊	＊	－	＊	＊	灯芯痕（内外）		815
	－	須恵器	轆轤	坏	＊	＊	＊	－	＊	＊			816
	A2-2層	須恵器	轆轤	坏	＊	＊	＊	－	＊	＊			817
	A5-5層	須恵器	轆轤	坏	＊	＊	＊	－	＊	＊	カーボン付着（内外）		818
	－	須恵器	轆轤	坏	120	＊	＊	－	＊	＊	灯芯痕		819
	A6-3層	赤焼土器	轆轤	坏	＊	60	＊	－	糸切	W4	内面にカーボン	2-3	820
	KZ80	赤焼土器	轆轤	坏	＊	68	＊	－	糸切	H4		2	821
	A4-2層	赤焼土器	轆轤	坏	＊	68	＊	－	糸切	＊	静止糸切	2	822
	KZ80	赤焼土器	轆轤	坏	＊	60	＊	－	糸切	W4		2-3	823
	KZ80	須恵器	轆轤	坏	＊	77	＊	－	糸切	W2		2	824
	KZ80	赤焼土器	轆轤	坏	＊	＊	＊	－	調整	H1			825
	－	赤焼土器	轆轤	坏	＊	62	＊	－	調整	H1		2-3	826
	A7-2層	赤焼土器	轆轤	坏	＊	56	＊	－	調整	H1		3	827
	KZ80	赤焼土器	轆轤	坏	＊	72	＊	－	調整	H2		2	828
	－	須恵器	轆轤	坏	＊	70	＊	－	ヘラ切	－		2	829
	－	須恵器	轆轤	坏	＊	58	＊	－	ヘラ切	－		2	830
	－	赤焼土器	轆轤	坏	＊	＊	＊	－	ヘラ切	－			831
	KZ80	須恵器	轆轤	坏	＊	74	＊	－	ヘラ切	－	火襷	2	832
	－	須恵器	轆轤	坏	＊	＊	＊	－	糸切	＊	摩滅		833
	A3-2層	赤焼土器	轆轤	坏	＊	56	＊	－	＊	＊	摩滅	3	834
	A3-2層	赤焼土器	轆轤	坏	130	＊	＊	－	＊	＊			835
	A6-3層	須恵器	轆轤	坏	＊	60	＊	－	糸切	－		2-3	836
	KZ80	須恵器	轆轤	坏	＊	＊	＊	－	糸切	W4			837
	A7-3層	須恵器	轆轤	坏	＊	＊	＊	－	糸切	－			838
	A6-3層	赤焼土器	轆轤	坏	＊	56	＊	－	糸切	－		3	839
	A6-3層	須恵器	轆轤	坏	＊	48	＊	－	糸切	－		3	840
	KZ80	赤焼土器	轆轤	坏	＊	42	＊	－	糸切	－	底面にカーボン	3	841
	KZ80	須恵器	轆轤	坏	＊	74	＊	－	糸切	－		2	842
	A2-2層	須恵器	轆轤	坏	＊	62	＊	－	糸切	－		2-3	843
	A2-2層	須恵器	轆轤	坏	＊	52	＊	－	糸切	－		3	844
	－	赤焼土器	轆轤	坏	＊	65	＊	－	糸切	－		2	845
	A5-2層	須恵器	轆轤	坏	＊	60	＊	－	糸切	－		2-3	846
	KZ80	須恵器	轆轤	坏	＊	60	＊	－	糸切	－		2-3	847
	KZ80	須恵器	轆轤	坏	＊	＊	＊	－	糸切	－			848
	A6-3層	赤焼土器	轆轤	坏	＊	62	＊	－	糸切	－		2-3	849
	KZ80	須恵器	轆轤	坏	＊	56	＊	－	糸切	－		3	850
	KZ80	須恵器	轆轤	坏	＊	＊	＊	－	調整	H2			851
	KZ80	須恵器	轆轤	坏	＊	52	＊	－	糸切	－		3	852
	－	赤焼土器	轆轤	坏	＊	52	＊	－	糸切	－		3	853
	A2-2層	須恵器	轆轤	坏	＊	60	＊	－	糸切	－		2-3	854
	A3-2層	赤焼土器	轆轤	坏	＊	56	＊	－	糸切	－	内面にカーボン	3	856
	KZ80	須恵器	轆轤	坏	＊	58	＊	－	糸切	－		3	857
	A8-2層	須恵器	轆轤	坏	＊	60	＊	－	糸切	－		2-3	858
	－	須恵器	轆轤	坏	＊	58	＊	－	糸切	－	外面にカーボン	3	859
	A4-2層	赤焼土器	轆轤	坏	＊	58	＊	－	糸切	－		2-3	860
	－	須恵器	轆轤	坏	＊	58	＊	－	糸切	－		3	861
	KZ80	赤焼土器	轆轤	坏	＊	64	＊	－	糸切	－		2-3	862
	A3-2層	須恵器	轆轤	坏	＊	58	＊	－	糸切	－		3	863
	A8-3層	須恵器	轆轤	坏	＊	＊	＊	－	糸切	－			864
	A6-2層	赤焼土器	轆轤	坏	＊	＊	＊	－	糸切	－			865
	A7-3層	須恵器	轆轤	坏	＊	56	＊	－	糸切	－	底部内面滑らか（転用硯？）墨付着無し	3	866
	A4-3層	須恵器	轆轤	坏	＊	58	＊	－	糸切	－		3	867
	A6-2層	赤焼土器	轆轤	坏	＊	60	＊	－	糸切	－		2-3	868
	－	須恵器	轆轤	坏	＊	70	＊	－	糸切	－		2	869
	A2-2層	須恵器	轆轤	坏	＊	60	＊	－	糸切	－		2-3	870
	A4-2層	赤焼土器	轆轤	坏	＊	62	＊	－	糸切	－		2-3	871
	KZ80	須恵器	轆轤	坏	＊	70	＊	－	糸切	H4		2	872
	KZ80	須恵器	轆轤	坏	＊	60	＊	－	糸切	－		2-3	873
	A6-2層	須恵器	轆轤	坏	＊	60	＊	－	糸切	－		2-3	874
	－	須恵器	轆轤	坏	＊	70	＊	－	糸切	－		2	875
	－	須恵器	轆轤	坏	＊	56	＊	－	糸切	－		3	876
	A6-2層	須恵器	轆轤	坏	＊	64	＊	－	糸切	－		2-3	877
	KZ80	赤焼土器	轆轤	坏	＊	54	＊	－	糸切	H4		3	878
	－	須恵器	轆轤	坏	＊	＊	＊	－	糸切	－			879
	KZ80	須恵器	轆轤	坏	＊	＊	＊	－	糸切	－			880
	KZ80	赤焼土器	轆轤	坏	＊	＊	＊	－	糸切	－			881
	KZ80	須恵器	轆轤	坏	＊	70	＊	－	糸切	－		2	882
	KZ80	須恵器	轆轤	坏	＊	70	＊	－	ヘラ切	－		2	883
	KZ80	須恵器	轆轤	坏	＊	62	＊	－	糸切	－		2-3	884
	－	須恵器	轆轤	坏	＊	60	＊	－	摩滅	摩滅		2-3	885
	A6-3層	土師器	轆轤	坏	＊	72	＊	内黒	調整	H1		2	886
	A6-2層 遺物NO.5-B	土師器	轆轤	坏	＊	60	＊	内黒	糸切	W4		3	887
	A2-2層	土師器	轆轤	坏	＊	64	＊	内黒	糸切	H4	大形坏	3	888
	A6-ﾍﾞﾙﾄ2層	土師器	轆轤	坏	＊	64	＊	内黒	糸切	H5		3	889
	A6-2層	土師器	轆轤	坏	＊	58	＊	内黒	糸切	H3		3	890
	A3-2層	土師器	轆轤	坏	＊	65	＊	内黒	糸切	H3		2-3	891
	A7-2層 遺物NO.1	土師器	轆轤	坏	＊	76	＊	内黒	調整	H1		2	892
	A7-3層	土師器	轆轤	坏	＊	62	＊	内黒	糸切	－		3	893
	A3-2層	土師器	轆轤	坏	＊	62	＊	内黒	糸切	－		3	894
	A6-2層	土師器	轆轤	坏	＊	62	＊	内黒	調整	W1		2	895
	A7-3層	土師器	轆轤	坏	132	＊	＊	内黒	＊	＊	灯芯痕		896

図版番号	出土位置	種別	成形	器種	口径	底径	器高	黒色	切離	再調整	墨書など	時期	登録番号
	－	土師器	轆轤	坏	*	*	*	内黒	*	*			897
	A2-2層	土師器	轆轤	坏	*	64	*	内黒	調整	W1		2	898
	A4-2層	土師器	轆轤	坏	*	55	*	内黒	調整	W1		3	899
	A5-2層試掘	土師器	轆轤	坏	*	60	*	内黒	糸切	W3		2-3	900
	A6-3層	土師器	轆轤	坏	130	*	*	内黒	*	*	外面ミガキ		901
	A6-2層	土師器	轆轤	坏	152	*	*	内黒	*	*			902
	A7-3層	土師器	轆轤	坏	124	*	*	内黒	*	*			903
	A6-2層	土師器	轆轤	坏	140	*	*	内黒	*	*			904
	－	土師器	轆轤	坏	138	*	*	内黒	*	*			905
	A7-3層	土師器	轆轤	坏	147	*	*	内黒	*	*			906
	A7-3層	土師器	轆轤	坏	126	*	*	内黒	*	*			907
	A8-2層	土師器	轆轤	坏	142	*	*	内黒	*	*			908
	－	土師器	轆轤	坏	136	*	*	内黒	*	*			909
	A5-3層	須恵器	轆轤	坏	136	*	*	－	*	*	灯芯痕、油煙内面全面に付着		910
	KZ80	土師器	轆轤	坏	138	*	*	内黒	*	*			911
	A7-3層	土師器	轆轤	坏	170	*	*	内黒	*	*			912
	－	土師器	轆轤	坏	132	*	*	内黒	*	*			913
	－	土師器	轆轤	坏	138	*	*	内黒	*	*			914
	A2-2層	土師器	轆轤	坏	142	*	*	内黒	*	*			915
	A2-2層	土師器	轆轤	坏	138	*	*	内黒	*	*			916
	A6-3層	土師器	轆轤	坏	170	*	*	内黒	*	*			917
	A3-2層	土師器	轆轤	坏	*	*	*	内黒	*	*			918
	A7-3層	土師器	轆轤	坏	120	*	*	内黒	*	*			919
	A3-2層	土師器	轆轤	坏	136	*	*	内黒	*	*			920
	A7-3層	土師器	轆轤	坏	126	*	*	内黒	*	*			921
	A2-2層	土師器	轆轤	坏	*	*	*	内黒	*	*			922
	A6-ﾍﾞﾙﾄ2層	土師器	轆轤	坏	*	*	*	内黒	*	*			923
	KZ80	土師器	轆轤	坏	138	*	*	内黒	*	*			924
	－	土師器	轆轤	坏	120	*	*	内黒	*	*			925
	A3-2層	土師器	轆轤	坏	140	*	*	内黒	*	*			926
	A7-2層	土師器	轆轤	坏	156	*	*	内黒	*	*			927
	—	土師器	轆轤	坏	*	*	*	内黒	*	*	体部下半ケズリ		928
	A3-2層 遺物NO.2	土師器	轆轤	坏	*	*	*	内黒	*	*			929
	A2-2層	土師器	轆轤	坏	*	*	*	内黒	*	*			930
	－	土師器	轆轤	坏	*	*	*	内黒	糸切	H3			931
	KZ80	土師器	轆轤	坏	*	70	*	内黒	調整	HI		2	932
	A6ﾍﾞﾙﾄ2層	土師器	轆轤	坏	*	56	*	内黒	糸切	H4		3	933
	A6-2層	土師器	轆轤	坏	*	56	*	内黒	糸切	－		3	934
	A7-2層	土師器	轆轤	坏	*	72	*	内黒	糸切	－	内外面ミガキなし	2	935
	A8-3層	土師器	轆轤	坏	*	68	*	内黒	調整	H1		2	936
	A6-2層	土師器	轆轤	坏	*	56	*	内黒	調整	H1		3	937
	KZ80	土師器	轆轤	坏	*	68	*	内黒	調整	H2		2	938
	－	土師器	轆轤	坏	*	60	*	内黒	糸切	－		3	939
	－	土師器	轆轤	坏	*	60	*	内黒	調整	H1		2-3	940
	－	赤焼土器	轆轤	坏	*	60	*	－	糸切	－		2-3	941
	KZ80	土師器	轆轤	坏	*	62	*	内黒	糸切	H3		2-3	942
	－	土師器	轆轤	坏	*	68	*	内黒	調整	W1		2	943
	A6-3層	土師器	轆轤	坏	*	66	*	内黒	調整	H1		2	944
	A5-2層	土師器	轆轤	坏	*	72	*	内黒	糸切	－		2	945
	KZ80	土師器	轆轤	坏	*	60	*	内黒	調整	W1		2-3	946
	A3-2層	土師器	轆轤	坏	*	58	*	内黒	糸切	H1		3	947
	A4-2層	土師器	轆轤	坏	*	66	*	内黒	糸切	H2		2	948
	A2-2層	土師器	轆轤	坏	*	58	*	内黒	調整	H1		3	949
	－	土師器	轆轤	坏	*	52	*	内黒	糸切	H4		3	950
	A6-2層	土師器	轆轤	坏	*	50	*	内黒	糸切	－		3	951
	A6-5層	土師器	轆轤	坏	*	60	*	内黒	調整	H1		2-3	952
	－	土師器	轆轤	坏	*	56	*	－	調整	H1	内面ミガキ（内黒とぶ？）	3	953
	A5-2層	土師器	轆轤	坏	*	56	*	内外黒	調整	H2	内外面ミガキ	3	954
	A3-2層	土師器	轆轤	坏	*	66	*	内黒	調整	H1		2	955
	A6-2層	土師器	轆轤	坏	*	56	*	内黒	糸切	H1		3	956
	－	土師器	轆轤	坏	*	62	*	内黒	糸切	W3		2-3	957
	A6-3層	土師器	轆轤	坏	*	52	*	内黒	糸切	H3		3	958
	KZ80	土師器	轆轤	坏	*	*	*	内黒	調整	W1			959
	－	土師器	轆轤	坏	*	58	*	内黒	糸切	H3		3	960
	－	土師器	轆轤	坏	*	74	*	内黒	糸切	－		2	961
	－	土師器	轆轤	坏	*	*	*	内黒	摩滅	H3?			962
	－	土師器	轆轤	坏	*	*	*	内黒	調整	H1?	内面に樹脂状付着物		963
	－	土師器	轆轤	坏	*	*	*	内黒	調整	H1?			964
	A3-2層	土師器	轆轤	坏	*	68	*	内黒	調整	H1		2	965
	A4-2層	土師器	轆轤	坏	*	60	*	内黒	糸切	H5		2-3	966
	－	土師器	轆轤	坏	*	60	*	内黒	糸切	－		2-3	967
	A7-3層	土師器	轆轤	坏	*	64	*	内黒	糸切	H4		2	968
	A3-2層	土師器	轆轤	坏	*	*	*	内黒	摩滅	摩滅			969
	－	土師器	轆轤	坏	*	60	*	内黒	糸切	H5		2-3	970
	－	土師器	轆轤	坏	*	60	*	内黒	糸切	－		2-3	971
	－	土師器	轆轤	坏	*	60	*	内黒	調整	H1		2-3	972
	－	土師器	轆轤	坏	*	62	*	内黒	糸切	－		2-3	973
	－	土師器	轆轤	坏	*	58	*	内黒	糸切	H4		3	974
	－	土師器	轆轤	坏	*	*	*	内黒	調整	H2			975
	KZ80	土師器	轆轤	坏	*	*	*	内黒	糸切	H4			976
	KZ80	土師器	轆轤	坏	*	64	*	内黒	調整	H2		2	977
	KZ80	土師器	轆轤	坏	*	58	*	内黒	糸切	H4		3	978
	KZ80	土師器	轆轤	坏	*	74	*	内黒	調整	H2		2	979

図版番号	出土位置	種別	成形	器種	口径	底径	器高	黒色	切離	再調整	墨書など	時期	登録番号
	A5-2層	土師器	轆轤	坏	*	60	*	内黒	糸切	W4		2-3	980
	A8-2層	土師器	轆轤	坏	*	60	*	内黒	糸切	-		2-3	981
	-	土師器	轆轤	坏	*	72	*	内黒	調整	W1		2	982
	A5-2層	土師器	轆轤	坏	*	68	*	内黒	調整	H1		2	983
	A4-2層	土師器	轆轤	坏	128	*	*	内黒	*	*	灯芯痕		984
	-	土師器	轆轤	坏	140	*	*	内黒	*	*			985
	A5-2層	土師器	轆轤	坏	140	*	*	内黒	*	*			986
	A7-2層	土師器	轆轤	坏	126	*	*	内黒	*	W1かW4	体部下半回転ケズリ		987
	A6-3層	土師器	轆轤	坏	138	*	*	内黒	*	*			988
	-	土師器	轆轤	坏	126	*	*	内黒	*	*			989
	A2-2層	土師器	轆轤	坏	124	*	*	内黒	*	*			990
	-	土師器	轆轤	坏	136	*	*	内黒	*	*	銀ねず　光沢あり		991
	-	土師器	轆轤	坏	128	*	*	内黒	*	*			992
	-	土師器	轆轤	坏	132	*	*	内黒	*	*			993
	KZ80	土師器	轆轤	坏	130	*	*	内黒	*	*			994
	A7-2層	土師器	轆轤	坏	140	*	*	内黒	*	*			995
	KZ80	土師器	轆轤	坏	138	*	*	内黒	*	*			996
	-	土師器	轆轤	坏	132	*	*	内黒	*	*	内面に樹脂状付着物		997
	A4-3層	土師器	轆轤	坏	130	*	*	内黒	*	*			998
	-	土師器	轆轤	坏	128	*	*	内黒	*	H1かH4	体部下半手持ケズリ		999
	A8-3層	赤焼土器	轆轤	坏	124	*	*	-	*	*	内外面にカーボン付着		1000
	A8-2層	土師器	轆轤	坏	134	*	*	内黒	*	*			1001
	-	土師器	轆轤	坏	138	*	*	内黒	*	*			1002
	-	土師器	非轆轤	坏	142	*	*	内黒	-	-	外面ナデ		1003
	A3-3層	赤焼土器	轆轤	坏	124	*	*	-	*	*			1004
	A6-3層	土師器	非轆轤	坏	124	*	*	内黒	-	-			1005
	-	土師器	轆轤	坏	124	*	*	内黒	*	*			1006
	-	土師器	轆轤	坏	122	*	*	内黒	*	*			1007
	-	土師器	轆轤	坏	120	*	*	内黒	*	*			1008
	KZ80	土師器	非轆轤	坏	140	*	*	内黒	-	-	外面ナデ		1009
	-	土師器	非轆轤	坏	122	*	*	内黒	-	-	外面ケズリ（346と同一個体か）		1010
	A6ﾍﾞﾙﾄ2層	土師器	轆轤	坏	144	*	*	内黒	*	*			1011
	-	土師器	轆轤	坏	124	*	*	内黒	*	*			1012
	A6-2層	土師器	轆轤	坏	130	*	*	内黒	*	*			1013
	A5-2層	土師器	轆轤	坏	138	*	*	内黒	*	*			1014
	-	土師器	轆轤	坏	124	*	*	内黒	*	*			1015
	KZ80	土師器	轆轤	坏	150	*	*	内黒	*	*			1016
	-	土師器	轆轤	坏	140	*	*	内黒	*	*			1017
	A2-2層	土師器	轆轤	坏	180	*	*	内黒	*	*			1018
	-	赤焼土器	轆轤	坏	144	*	*	-	*	*			1019
	KZ80	土師器	轆轤	坏	130	*	*	内黒	*	*			1020
	-	土師器	轆轤	坏	160	*	*	内黒	*	*			1021
	-	赤焼土器	轆轤	坏	160	*	*	-	*	*	360と同一個体か		1022
	A4-2層	土師器	轆轤	坏	*	54	*	内黒	糸切	H4		3	1023
	-	土師器	轆轤	坏	*	58	*	内黒	糸切	-		3	1024
	KZ80	土師器	轆轤	坏	*	62	*	内黒	調整	H1		2-3	1025
	A4-2層	土師器	轆轤	坏	*	56	*	内黒	調整	H1		3	1026
	KZ80	土師器	轆轤	坏	*	64	*	内黒	調整	H1		2	1027
	-	土師器	轆轤	坏	*	56	*	内黒	調整	H1		3	1028
	A3-2層	土師器	轆轤	坏	*	*	*	内黒	調整	H1			1029
	A7-2層	土師器	轆轤	坏	*	60	*	内黒	糸切	-		2-3	1030
	A7-2層	土師器	非轆轤	坏	*	66	*	内黒	-	-		2-3	1031
	KZ80	土師器	轆轤	坏	*	56	*	内黒	糸切	-		3	1032
	A5-2層	土師器	轆轤	坏	*	68	*	内黒	糸切	H1		2	1033
	A6-3層	土師器	轆轤	坏	*	58	*	内黒	糸切	H4		3	1034
	A4-2層	土師器	轆轤	坏	*	54	*	内黒	糸切	H4		3	1035
	A6-3層	土師器	轆轤	坏	*	76	*	内黒	糸切	H1		2	1036
	A6-3層	土師器	轆轤	坏	*	66	*	内黒	糸切	W1		2	1037
	KZ80	土師器	轆轤	坏	*	62	*	内黒	糸切	H1		2-3	1038
	-	土師器	轆轤	坏	*	50	*	内黒	糸切	H4	内面ミガキなし	3	1039
	KZ80	土師器	轆轤	坏	*	56	*	内黒	調整	H1		3	1040
	-	土師器	轆轤	坏	*	64	*	内黒	調整	W1		2	1041
	A4-3層	土師器	轆轤	坏	*	60	*	内黒	調整	H1		2-3	1042
	A6-2層	土師器	非轆轤	坏	*	50	*	内黒	-	-		2-3	1043
	KZ80	土師器	轆轤	坏	*	60	*	内黒	糸切	-		2-3	1044
	A3-2層	土師器	轆轤	坏	*	60	*	内黒	糸切	W1		2-3	1045
	-	土師器	轆轤	坏	*	70	*	内黒	糸切	-		2	1046
	A5-5層	土師器	轆轤	坏	*	68	*	内黒	調整	W1		2	1047
	-	土師器	轆轤	坏	*	72	*	内黒	調整	H1?		2	1048
	A6-2層	土師器	轆轤	坏	*	66	*	内黒	調整	W1		2	1049
	KZ80	土師器	非轆轤	坏	*	56	*	内黒	-	摩滅		2-3	1050
	A6-2層	土師器	轆轤	坏	*	74	*	内外黒	糸切	W3		2	1051
	-	土師器	轆轤	坏	*	60	*	内黒	糸切	W3		2-3	1052
	A4-2層	土師器	轆轤	坏	*	56	*	内黒	調整	W1		3	1053
	A5-2層	土師器	轆轤	坏	*	70	*	内黒	摩滅	摩滅		2	1054
	-	土師器	轆轤	坏	*	58	*	内黒	糸切	-		3	1055
	A4-2層	土師器	轆轤	坏	*	64	*	内黒	糸切	-		2	1056
	A4-2層	土師器	轆轤	坏	*	60	*	内外黒	糸切	-	内外面ミガキなし	2-3	1057
	A4-2層	土師器	轆轤	坏	*	56	*	内黒	糸切	-		3	1058
	A3-2層	赤焼土器	轆轤	坏	*	70	*	-	糸切	H4	内面カーボン付着、ヘラ記号「×」か?	2	1059
	A6-3層	土師器	轆轤	坏	*	68	*	内黒	摩滅	摩滅		2	1060
	A5-2層	土師器	轆轤	坏	*	66	*	内黒	調整	W1		2	1061
	A4-2層 A5-2層	土師器	轆轤	坏	*	56	*	内黒	調整	W1		3	1062

図版番号	出土位置	種別	成形	器種	口径	底径	器高	黒色	切離	再調整	墨書など	時期	登録番号
	A3-2層 A4-2層	土師器	轆轤	坏	*	56	*	内黒	糸切	-		3	1063
	KZ80	土師器	轆轤	坏	*	60	*	内黒	糸切	-		2-3	1064
	-	土師器	轆轤	坏	*	56	*	内黒	調整	H1		3	1065
	A6-2層	土師器	轆轤	坏	*	52	*	内黒	糸切	W3?		3	1066
	A5-2層	土師器	轆轤	坏	*	56	*	内黒	調整	H2		3	1067
	A4-2層	土師器	轆轤	坏	*	58	*	内黒	調整	H2		3	1068
	A6-2層	土師器	轆轤	坏	*	56	*	内黒	調整	H1		3	1069
	A4-2層	土師器	轆轤	坏	*	72	*	内黒	調整	H1		2	1070
	-	土師器	轆轤	坏	*	56	*	内黒	調整	W1		3	1071
	-	土師器	轆轤	坏	*	60	*	内黒	調整	W1		2-3	1072
	-	土師器	轆轤	坏	*	64	*	内黒	調整	H2		2	1073
	KZ80	土師器	轆轤	坏	*	60	*	内黒	糸切	W3		2-3	1074
	-	土師器	轆轤	坏	160	*	*	内黒	*	*	外面カーボン付着		1075
	A7-3層	土師器	轆轤	坏	150	*	*	内黒	*	*			1076
	A6-2層	土師器	轆轤	坏	*	66	*	-	調整	H2	内黒なしの土師器、内面ﾐｶﾞｷ	2	1077
	A6-2層	土師器	轆轤	坏	*	74	*	-	糸切	H4	内黒なしの土師器	2	1078
	-	土師器	轆轤	坏	*	78	*	-	糸切	-	内黒なしの土師器、内面ﾐｶﾞｷ	2	1079
	KZ80	赤焼土器	轆轤	坏	*	60	*	-	調整	H1		2-3	1080
	KZ80	赤焼土器	轆轤	坏	*	60	*	-	糸切	-		2-3	1081
	-	赤焼土器	轆轤	坏	*	56	*	-	糸切	W4		3	1082
	KZ80	赤焼土器	轆轤	坏	*	58	*	-	調整	H2		3	1083
	-	赤焼土器	轆轤	坏	130	*	*	-	*	*			1084
	-	赤焼土器	轆轤	坏	130	*	*	-	*	*			1085
	-	赤焼土器	轆轤	坏	120	*	*	-	*	*			1086
	KZ80	赤焼土器	轆轤	坏	140	*	*	-	*	*			1087
	-	赤焼土器	轆轤	坏	*	70	*	-	調整	H1		2	1088
	-	赤焼土器	轆轤	坏	*	68	*	-	糸切	-		2	1089
	-	赤焼土器	轆轤	坏	*	66	*	-	調整	H1		2	1090
	A6-2層	赤焼土器	轆轤	坏	*	70	*	-	調整	H2	外面カーボン付着	2	1091
	KZ80	赤焼土器	轆轤	坏	*	64	*	-	糸切	H4		2-3	1092
	KZ80	赤焼土器	轆轤	坏	*	70	*	-	糸切	H4		2	1093
	A6-2層	赤焼土器	轆轤	坏	*	68	*	-	調整	H1		2	1094
	A6-2層	赤焼土器	轆轤	坏	*	62	*	-	調整	H2		2-3	1095
	A6-2層	赤焼土器	轆轤	坏	*	52	*	-	調整	H2		3	1096
	A6-2層	赤焼土器	轆轤	坏	*	64	*	-	糸切	-		2-3	1097
	A4-2層	赤焼土器	轆轤	坏	*	56	*	-	糸切	-		3	1098
	A2-2層	赤焼土器	轆轤	坏	*	60	*	-	糸切	W4		3	1099
	A2-2層	赤焼土器	轆轤	坏	*	57	*	-	糸切	-		3	1100
	A6-2層	赤焼土器	轆轤	坏	*	64	*	-	糸切	H4		2-3	1101
	A2-2層	赤焼土器	轆轤	坏	*	56	*	-	糸切	W4		3	1102
	A6-3層	赤焼土器	轆轤	坏	*	70	*	-	摩滅	摩滅		2	1103
	-	赤焼土器	轆轤	坏	*	53	*	-	糸切	-		3	1104
	KZ80	須恵器	轆轤	坏	122	62	47	-	ﾍﾗ切	-		2-3	1105
	A2 2層 A6-2層 A6 3層	土師器	轆轤	坏	164	*	*	内黒	*	*			1106
	A4-2層	土師器	轆轤	坏	*	*	*	内黒	*	*			1107
	-	土師器	轆轤	坏	*	*	*	内黒	*	*			1108

表３　小泉遺跡出土の土器観察表（壺・甕）

図版番号	出土位置	種別	成形	器種	口径	底径	器高	体径	口縁部調整	体部調整	底部調整	備考	登録番号
48	A8-3層	赤焼土器	轆轤	小形甕	*	80	*	*	轆轤	轆轤	糸切		714
79	A8-3層	土師器	非轆轤	甕	206	*	*	*	ﾖｺﾅﾃﾞ	外ﾐｶﾞｷ内ﾍﾗﾅﾃﾞ	*	内面巻上痕	717
80	A4-2層A5-2層	土師器	非轆轤	甕	172	*	*	*	ﾖｺﾅﾃﾞ/ ﾐｶﾞｷ	ﾐｶﾞｷ	*	外面巻上痕	720
81	A6-2層	土師器	非轆轤	甕	250	*	*	*	ﾖｺﾅﾃﾞ/ ﾐｶﾞｷ	外ｹｽﾞﾘ→ﾐｶﾞｷ 内ﾐｶﾞｷ	*		721
82	A7-2層	赤焼土器	轆轤	小型甕	*	70	*	*	轆轤	轆轤	糸切		747
83	A6-2層	赤焼土器	轆轤	甕	220	*	*	201	轆轤	轆轤	*		706
84	A7-2層	須恵器	轆轤	広口壷	128	*	*	186	轆轤	内面下部ﾍﾗﾅﾃﾞ	*		704
85	A7-2層A8-2層	須恵器	轆轤	長頸瓶	*	*	*	174	轆轤	轆轤	*		703
86	A4-2層	須恵器	轆轤	甕	194	*	45	－	平行ﾀﾀｷ	内面ｶｷﾒ	*		702
176	－	赤焼土器	轆轤	甕	243	*	*	*	*	外ﾍﾗﾅﾃﾞ 内ﾍﾗﾅﾃﾞ	*		746
177	KZ80	赤焼土器	轆轤	甕	260	*	*	*	*	外ｹｽﾞﾘ	*		745
178		須恵器	轆轤	鉢	360	117	175	－	轆轤	外ﾀﾀｷ・ﾍﾗｹｽﾞﾘ	内指頭圧痕		705
179	－	土師器	非轆轤	甕	191	*	*	177	ﾖｺﾅﾃﾞ内一部ﾍﾗﾐｶﾞｷ	外ﾊｹﾒ・ﾍﾗｹｽﾞﾘ 内ﾍﾗﾅﾃﾞ	*	内外面巻上痕	733
180	－	須恵器	轆轤	甕	117	*	*	407	ﾖｺﾅﾃﾞ	外平行ﾀﾀｷ	*		734
	A6-2層	赤焼土器	轆轤	甕	*	*	*	*	轆轤	轆轤	ﾍﾗﾅﾃﾞ？	坏?	707
	A6-2層	赤焼土器	轆轤	小形甕	*	*	*	*	轆轤	轆轤	ﾅﾃﾞ？		708
	A6-2層	赤焼土器	轆轤	甕	*	*	*	*	轆轤	轆轤	*		709
	A6-2層	赤焼土器	轆轤	甕	192	*	*	*	轆轤	轆轤	*	内黒	710
	－	赤焼土器	轆轤	甕	170	*	*	*	轆轤	外ｹｽﾞﾘ内ﾅﾃﾞ	*		711
	A6-2層	赤焼土器	轆轤	甕	170	*	*	*	轆轤	轆轤	*	内黒か	712
	A6-3層	赤焼土器	轆轤	甕	170	*	*	*	轆轤	轆轤	*		713
	A6-2層	土師器	非轆轤	甕	243	*	*	245	ﾖｺﾅﾃﾞ	外ﾐｶﾞｷ内ﾍﾗ無調整	*	内面巻上痕顕著	715
	A6-2層	土師器	非轆轤	甕	*	126	*	*	*	内ﾍﾗﾅﾃﾞ	*		716
	－	土師器	非轆轤	甕	190	*	*	*	ﾖｺﾅﾃﾞ	外ｹｽﾞﾘ内ﾍﾗﾅﾃﾞ	*		722
	A5-2層	土師器	非轆轤	甕	*	78	*	*	*	外ｹｽﾞﾘ内ﾍﾗﾅﾃﾞ	*		723
	A5-5層	土師器	非轆轤	甕	*	84	*	*	*	外ﾍﾗﾅﾃﾞ	*		724
	KZ80	土師器	非轆轤	小形甕	*	64	*	*	*	ハケ目	ハケ目		773
	A6-2層	土師器	非轆轤	甕	*	70	*	*	－	木葉	－		719
	－	赤焼土器	轆轤	小型甕	*	68	*	－	糸切	H4			855

表４　小泉遺跡出土の土製品観察表

図版番号	出土位置	種別	法量(cm)・(g)			特　　徴	時期	登録番号
			長	幅	重			
191	KZ80	土錘	5.7	2.35	22.2	孔径0.11cm　表面はケズリ整形であるが，摩滅する。		3
192	KZ80	土錘	5.5	2.1	21.5	孔径0.22cm　表面はケズリ整形であるが，摩滅する。		4
193	KZ80	土錘	5.2	2.2	20.4	孔径0.12cm　表面はケズリ整形であるが，摩滅する。		1630
194	KZ80	紡錘車	11.2	—	191.1	厚さ2.65cm　約半分が残存。表裏に指頭痕が8～10点がある。		1631
195	KZ80	羽口	(14.5)	—	700	外径7.3cm　内径2.5cm　全体が被熱し，特に先端部はスラブが付着する。		1632

表５　小泉遺跡出土の鉄製品観察表

図版番号	出土位置	種別	法量(cm)・(g)			特　　徴	時期	登録番号
			長	幅	重			
196	A8-3層	不明	20.6	1.8	72.4	頂部は，扁平し幅広。端部は，先が鋭く尖る。		

小泉遺跡出土土器の編年的位置づけ

八木　光則
（盛岡市中央公民館）

1　小泉遺跡出土土器の特徴

小泉遺跡から出土した土器片数は坏類と甕類の比率が 5.5:4.5 と，坏類がやや多い。また口径や底径を計測できるものは 20:1と坏類が圧倒的に多くなっている。

土師器・赤焼土器・須恵器の種別でみると，土師器は坏類の 50%，甕類の 89%と多数を占め，須恵器は坏類 32%，甕類 6%と坏類の比率が高くなっている。

第 1 表　出土土器の数量

種別	坏類		甕類	
土師器	1,840	49.9%	2,679	88.8%
赤焼土器	657	17.8%	155	5.1%
須恵器	1,187	32.2%	183	6.1%
計	3,684		3,017	

赤焼土器は酸化焔焼成で，坏類は轆轤成形でミガキなどの内面調整や黒色処理をしないもの，甕類は轆轤成形のものをあてた。坏類は 18%，甕類は 5%と少ないが，須恵器坏類との区分が明確でないものがあり，また，口縁部が轆轤成形で体部下半がケズリ調整などをしているものは土師器との区別が容易でないため，実数が異なることが予想される。事実，土師器甕と赤焼土器甕の口縁部だけの比較でみると，およそ 4:1 であることから赤焼土器甕の割合は第 1 表より高いとみられる。

坏類には一般的に坏・椀・高台付坏・蓋などがあるが，本遺跡では坏以外の器種は，大形坏がみられるにすぎない。甕類は須恵器では大甕・甕・鉢・短頸壺・長頸瓶の器種があり，そのうち甕が大半を占める。土師器は長胴甕以外に小形甕が数片みられるだけである。赤焼土器は長胴甕と小形甕とがほぼ同数の破片数となっている。

このように小泉遺跡出土土器の特徴は，坏類が多いが甕類も少なくないこと，坏類では半数強を土師器が，1/3 を須恵器が占めること，甕類では轆轤成形をしない土師器甕が主体を占め，須恵器は坏類の割合より大きく下回ることなどがあげられる。

時期については坏を中心に次項で検討するが，明らかに 8 世紀代のものが数点みられるほかはすべて 9 世紀代であり，上述の特徴は本遺跡の性格を考える上で大きなてがかりとなるものである。

2　出土土器の検討

(1)　轆轤未（非）使用の土師器坏

坏類は轆轤を用いないで成形したものと轆轤成形の 2 種類が認められる。また前者は丸底風平底と，明らかに平底としたものに分類される。

丸底風平底は，内外がヘラミガキ調整と内黒処理が施されている。体部外面に沈線や稜をもつもの，体部下半からミガキ調整の単位が短くなるものがある。これらは轆轤未使用段階の国分寺下層式に比定され，墨書は認められない。

平底のものは内面底面を放射状ミガキ，体部を横方向のミガキの後黒色処理を施し，外面体部～底面を手持ちヘラケズリするもので，一部にナデ調整もみられる。器形は全体にやや内湾気味に外傾する体部をもち，底部への移行は明瞭となっている。口径 170mm 底径 80mm 前後の大形坏が 3 点認められている。墨書や灯芯痕をもつものがあり，次に述べる轆轤成形の土師器に内面調整とともに共通性が認められることから，

この轆轤非使用の坏類は轆轤成形の土器組成の一部を形成すると考えられる。

(2) 轆轤成形の坏

轆轤成形の坏は，本遺跡出土土器の中でも器形がわかるものが多い。細かな検討の前に出土層位を確認しておくと，土器が出土する層は下から 5・3・2 層で，5 層上の 4 層は無遺物層となっている。出土状況を重視すると，5 層出土土器が後からの混在が少なく，古い様相を示すという仮説が成り立つ。

5 層からは，須恵器はヘラ切と糸切無調整が，土師器は再調整（切離し不明）が，赤焼土器は糸切無調整が出土している。第 2 表に示されているように，上層の 2・3 層は糸切無調整の割合が 5 層よりはっきりと高くなっており，本遺跡出土資料が単期の遺物群ではないことが確認される。底部切り離しがヘラ切りから糸切りへ，また底部再調整が多い段階から消滅する段階へ移行することが，先学により明らかにされているが，本遺跡においてもそれを裏付けることができ，また 5 層が古相を示すことも確認された。ただし 2・3 層がすべて新相を呈するのではなく，古相もかなり混在していることもうかがうことができる。

底径をみてみると，5 層はほぼ 60～70mm におさまるが，2・3 層は 47～78mm と幅が大きく，複数の時期の混在によるものと考えられる。また底部切離し・再調整と底径の関係は，ヘラ切無調整が 58～78mm，ヘラ切再調整は 1 点のみ，底面全面の再調整（切離し不明）が 52～76mm，糸切再調整が 47～78mm，糸切無調整が 42～78mm となっている。

第 2 表　層位と底部切離し・再調整の関係

種別	層	ヘラ切無調整	ヘラ切再調整	再調整	糸切再調整	糸切無調整	総計
須恵器	2 層	2			1	37	40
	3 層	2				20	22
	5 層	3				5	8
	計	7	0	0	1	62	70
赤焼土器	2 層			6	4	10	20
	3 層				1	3	4
	5 層					1	1
	計	0		6	5	14	25
土師器	2 層			30	31	24	85
	3 層			8	13	2	23
	5 層			2			2
	計	0	0	40	44	26	110
総計		7	0	46	50	102	205

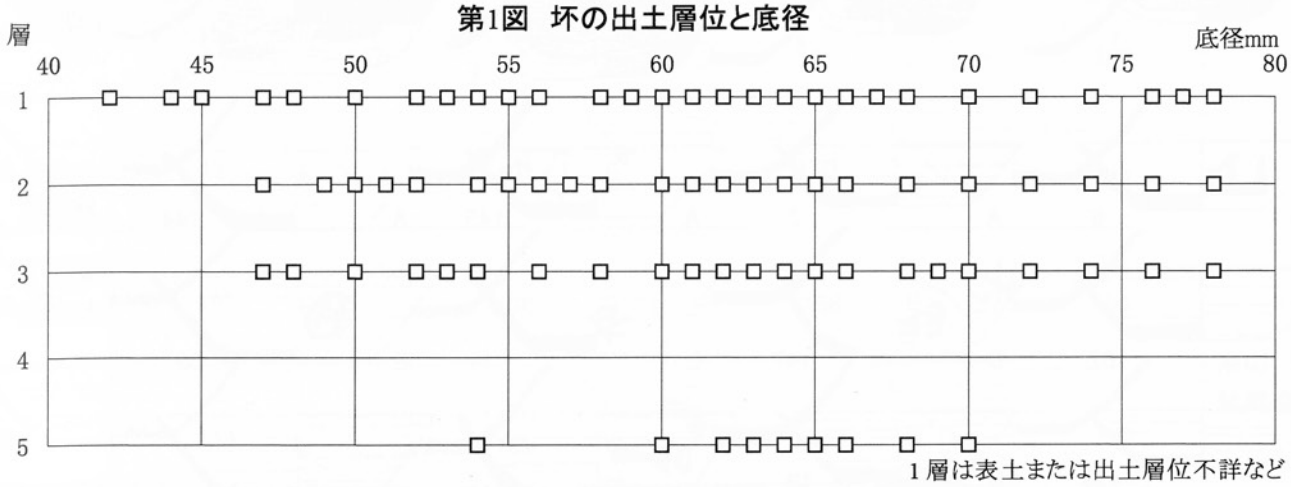
表土出土及び出土層位不明の資料は除いた。

第 3 表　底径及び口径/底径の変遷

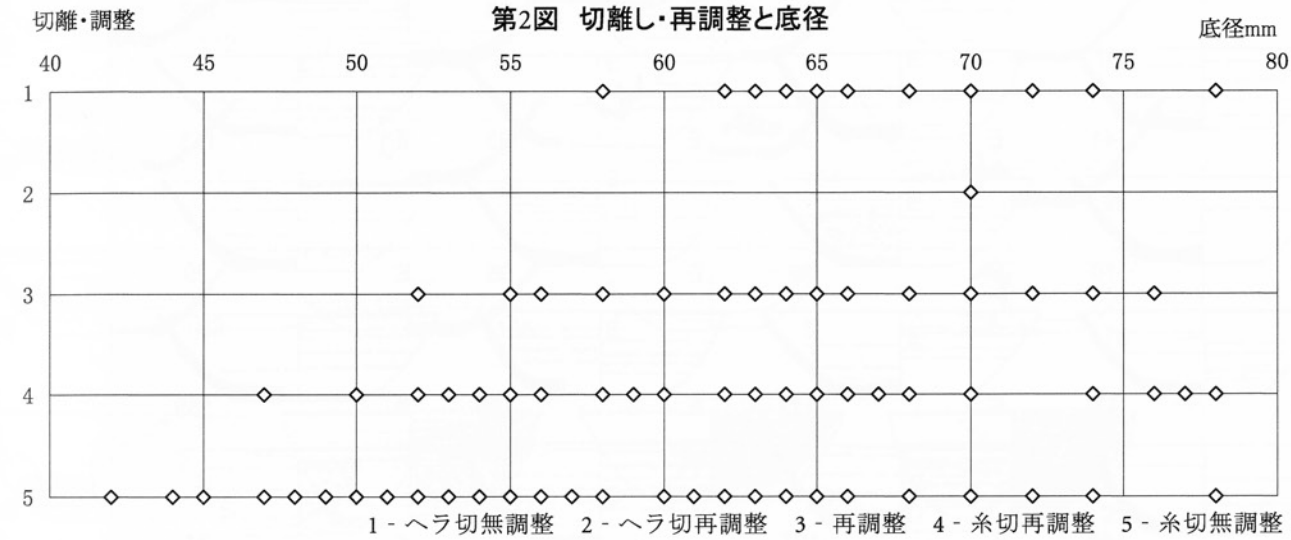
		須恵器	土師器	赤焼土器	全体
底径	2 期	60～78mm (68.2mm)	60～82mm (67.5mm)	60～72mm (68.2mm)	60～82mm (67.9mm)
	3 期	47～64mm (54.7mm)	45～64mm (56.0mm)	42～60mm (54.6mm)	47～64mm (55.3mm)
口径/底径	2 期	1.88～2.25 (2.07)	1.56～2.27 (2.08)	2.09～2.17 (2.13)	1.56～2.27 (2.08)
	3 期	2.25～3.13 (2.62)	2.30～2.94 (2.50)	2.26～2.40 (2.33)	2.25～3.13 (2.57)

(　)内は平均値

第1図　坏の出土層位と底径



第2図　切離し・再調整と底径

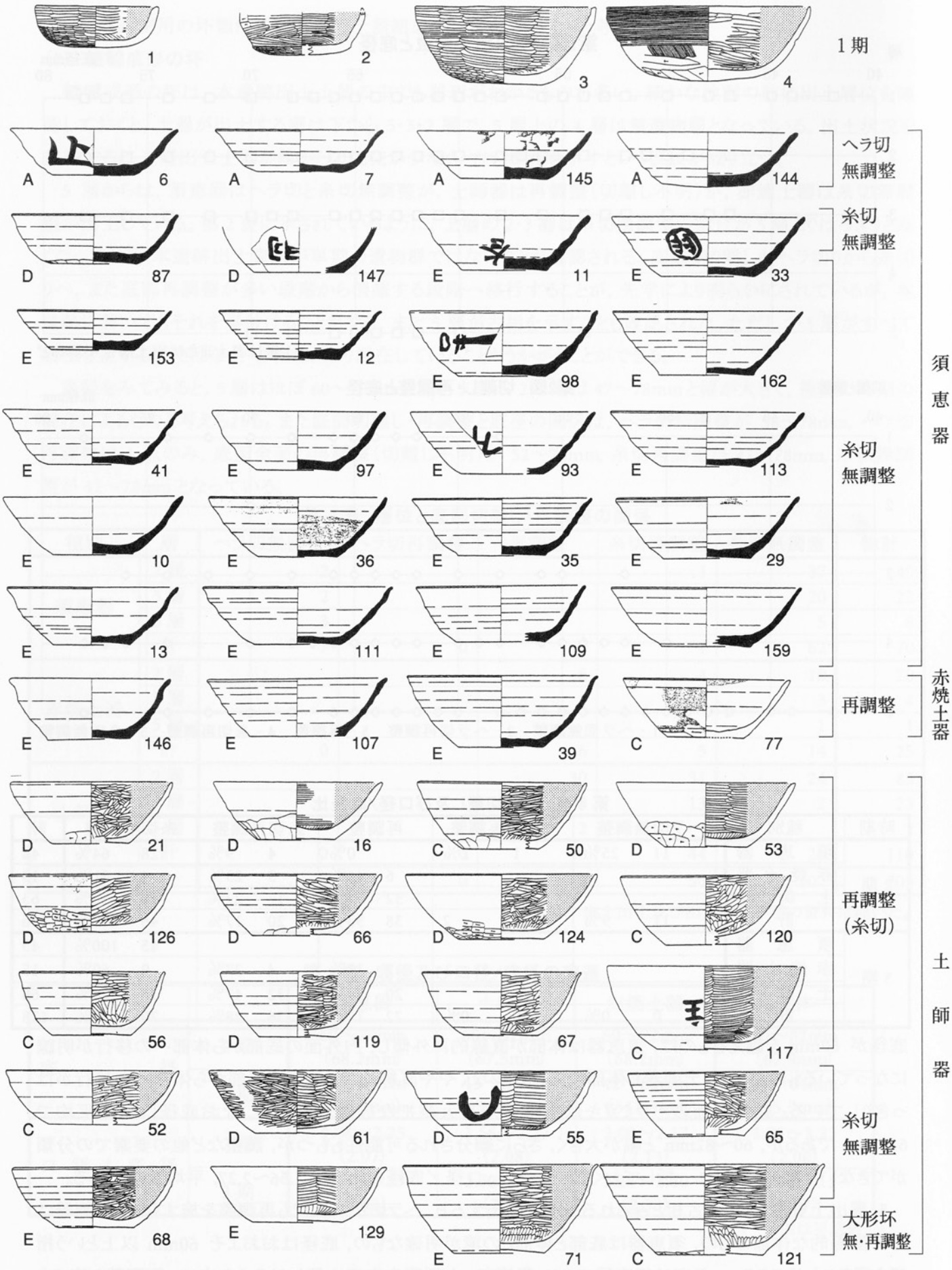


第 4 表　底部切離し及び口径/底径比

時期	種別	ヘラ切無調整		ヘラ切再調整		再調整		糸切再調整		糸切無調整		計
2 期	須恵器	11	25%	1	2%		0%	4	9%	28	64%	44
	赤焼土器					6	46%	3	23%	4	31%	13
	土師器					32	51%	17	27%	14	22%	63
	計	11	9%	1	2	38	33%	20	17%	46	40%	116
3 期	須恵器									45	100%	45
	赤焼土器					2	13%	4	27%	9	60%	15
	土師器					20	29%	32	47%	16	24%	68
	計	0	0%	0	0%	22	17%	36	28%	70	55%	128

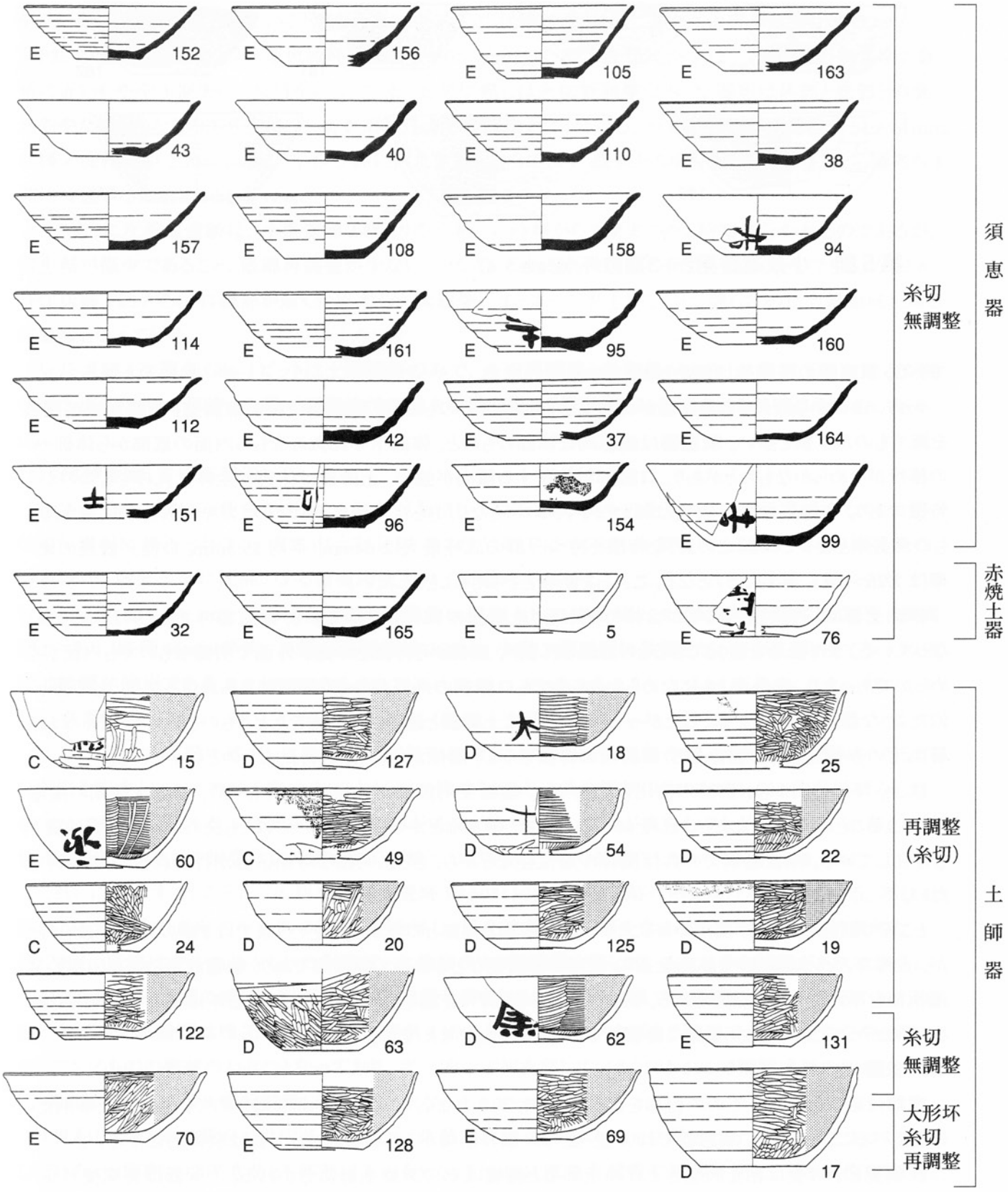
底径が 60mm を越えるものは，須恵器は体部が直線的に外傾し，内外面の底部から体部への移行が明瞭になっているものが多く，土師器も体部の丸みが少なくやや直線的で，外面の底部から体部への移行がはっきりしている。底部内面のヘラミガキは不定方向や大雑把な放射状が多い。なお底径は全体平均で 67.9mm であるが，60～82mm と幅が大きく，さらに細分される可能性ももつが，調整など他の要素での分類ができないため，それぞれ一括しておくこととしたい。口径／底径の比率は 1.56～2.27，平均 2.08 である。

5 層出土資料をもとに古相とみられる一群を抽出すると，ヘラ切か糸切でも再調整を施すもの，土師器はやや直線的な体部のもの，須恵器は底部と体部との境が明確なもの，底径はおおよそ 60mm 以上という指標を得ることができる。ヘラ切は須恵器で 1/4 程度で，土師器や赤焼土器にはみられない。再調整を施すものは土師器や赤焼土器で 7 割を超え，体部下端の再調整は回転ケズリか大きな単位の手持ケズリが一般的



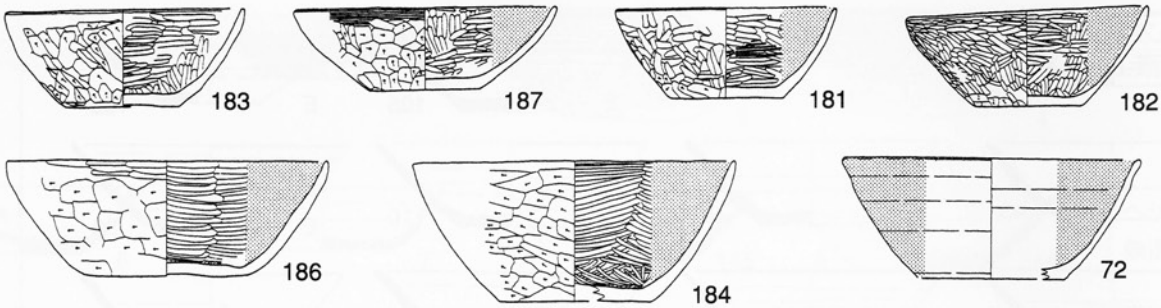
A-ヘラ切無調整　B-ヘラ切再調整　C-再調整（切離不明）　D-糸切再調整　E-糸切無調整

第３図　小泉遺跡第1・2期の坏（scale 1:4）



A-ヘラ切無調整　B-ヘラ切再調整　C-再調整（切離不明）　D-糸切再調整　E-糸切無調整

第４図　小泉遺跡第３期の坏(scale 1:4)



第5図　小泉遺跡第2～3期の坏(scale 1:4)

である。須恵器の再調整は僅かとなっている。

一方，古相から除外される底径がおおよそ60mm以下のものは，須恵器は糸切無調整，土師器は再調整を施すものが7割と多い。須恵器は直線的な体部のものと，体部下半に丸みをもち内面の底部から体部への移行がなめらかなものとがあり，口縁部が外反する傾向が強い。土師器は体部が全体に丸みをもつのが特徴であり，体部下端の再調整は細かな手持ケズリとなり，さらに内面底部のヘラミガキが放射状に施されるものが主体となっている。このような特徴を持つ一群の底径最大は64mm，平均55.3mm，口径／底径の比率は2.25～3.13，平均2.57となる。これらを新相ととらえることとしたい。

赤焼土器は，再調整の比率が全体で55%と，土師器の76%に次いで多く，須恵器の7%よりはるかに多くなっている。また器形を復元できるものは限られるが，底部から体部との境が外面で明確なものでも内面がなめらかであったり，内外面ともになめらかなものでも口縁部の外反がなく直線的にたちあがるなど，土師器と似たような器形となっている。したがって赤焼土器は土師器と連動した変遷をたどるものと考えられる。なお5層出土の赤焼土器(図版番号5)は新相の特徴を示し，層位からみると例外的なものとなっている。

以上，坏の検討から，轆轤未使用段階(1期)，轆轤使用段階で古(2期)・新(3期)，都合3時期の変遷をとらえることができる。ただし，底径60～64mmで，器形などからも2・3期いずれとも決めかねる中間的資料も存在している。今後遺構での共伴関係や層位差などから，さらに明確な時期区分が行われることを期待したい。

ところで前述の轆轤非使用の坏については，底部と体部との境が明瞭という点では2期の坏の特徴をもつが，大形坏といった器形や外面全面のヘラケズリ調整などきわめて特徴的であり，轆轤成形の坏と同様の変遷指標を準用できるか疑問である。また内面にヘラミガキを施さずに黒色処理される坏についても同様である。したがってここでは2～3期に継続して共存することを考えておきたい。

(3) 甕類

甕類は破片数が多いものの器形を復元できるものは少なく，時期区分も行えないので，特徴的な事柄だけを述べることとしたい。須恵器では大甕・甕・鉢・瓶の器種がみられるが，出土量は全体的に少ない。

長胴甕と小形甕は粘土紐巻き上げの土師器と轆轤成形の赤焼土器に分かれる。土師器は長胴甕が圧倒的に多く，僅かに小形甕がみられる程度であるが，赤焼土器は小形甕の比率が高くなっている。

3 他地域との対比

(1) 気仙地方

陸前高田市など気仙地域での古代遺跡の調査はまだそれほど多くはない。そういった中で6棟の竪穴住居跡が調査されている陸前高田市友沼Ⅲ遺跡の3・4・6号住居跡を取り上げたい。6号住居跡は5号住居

跡と重複し，遺物が混在しているとみられるので，6 号住居跡は P25 出土遺物に限定することとする。

P25 の土師器・赤焼土器・須恵器坏は底径が 60～70mm，口径／底径比が 2.12～2.40 と，小泉 2 期の数値に近いもやや 3 期寄りの数値を示している。底部切離しは糸切無調整のみで，器形は体部と底部との境がややなめらかなものが含まれ，小泉 2 期よりも新しい傾向となっている。3・4 号住居跡は底径が 51～61mm，口径／底径比が 2.20～3.06 と，小泉 3 期に似た数値となっており，底部との境もなめらかに移行し，器形も 3 期に共通する(陸前高田市教委 1990)。

このように友沼Ⅲ遺跡は，小泉遺跡 2 期よりやや新しい時期から 3 期までの 2 時期に分かれるのであるが，須恵器が僅少であること，底部再調整が少ないことなど，それぞれの遺跡の個性をみることもできる。なお 6 号住居跡 P25 からは口縁部が短く外反する土師器甕がまとまって出土しており，甕も含めた土器組成を知る好資料となっている。

貝畑遺跡 4 次調査 G06-1 ピットは土師器坏のみで，糸切再調整と無調整が共存し，体部下半の丸みが強く，また底径 59mm 平均，口径／底径比は 2.64 と小泉 3 期よりやや新しい傾向を示している(陸前高田市教委 1998)。

(2) 閉伊地域(宮古市周辺)

近年，三陸道関係の調査が進展し，資料が蓄積しつつあるが，個々の住居からの出土量は少なく，良好な編年資料は意外と少ない。宮古市上村貝塚 N-2 住居跡ではヘラ切り再調整の土師器と糸切り再調整の須恵器坏，体部上半に沈線のある轆轤未使用の土師器坏が共伴しているが，これらは小泉 2 期に先行するものであろう(岩手県埋文センター1991)。宮古市磯鶏館山遺跡 HH20 住居跡出土土師器坏は糸切再調整と無調整とがあり，底径 66mm 平均，口径／底径比は 2.15 と，小泉 2 期に近い数値となっている。共伴する土師器甕は轆轤非使用である(宮古市教委 1995)。

(3) 久慈地方

小泉 1 期は丸底風平底で，口縁部が内湾気味に開き，体部外面に沈線や稜，体部下半に短いヘラミガキ調整を施すといった特徴を有する。これに近い例は久慈市中長内遺跡 RA507・522・526 住居跡にみられる。526 では土師器坏の口縁部が直口で体部が直線的なものや，器高が高いものなどがみられ，小泉とは地域差が認められる。長胴甕は口縁部が長く外傾し，球胴甕はかなり長胴化している(久慈市教委 1988)。

これらに先行するものとして久慈市平沢Ⅰ遺跡 RA503・506・507 住居跡の例を挙げることができる。坏は口縁部から底部まで直線的で小形の擂り鉢形を呈し，段や沈線をもつ坏を含まない点できわめて特徴的な一群である。底部はやや丸みをもった平底で，木葉底やケズリ調整を施している。大小の器種があり，これらが小泉 2・3 期の非轆轤の坏につながっていくことが予想されるが，閉伊地域で非轆轤の坏が未確認であり，系譜や伝播などに課題は残されている。なお平沢Ⅰの長胴甕は底部がすぼまる器形で，球胴甕もやや長胴化しているものの組成のひとつとなっており，北方的な古相を残している。503・506 で轆轤成形の坏が出ており，共伴するとすれば 9 世紀初頭以降の年代となろう(久慈市教委 2002)。

9 世紀中葉以降の資料では中長内 RA516，久慈市源道遺跡 L17・L28 住居跡出土土器がまとまって出土している。土師器坏は両遺跡とも体部に丸みをもち，L17 は底部の再調整や体部外面にミガキ調整が施され，底径はややばらつきがあるが平均 62mm，口径／底径比 2.14 を示す。RA516 は再調整がなく，底径平均 61mm，口径／底径比 2.56 とやや新しい様相を示し，小泉遺跡 3 期に近い資料群である。甕は轆轤成形のものは僅かで，轆轤非使用の土師器甕が主体となっている。口縁部は短く強く外反し，体部は外面がヘラケズリ，内面がヘラナデとなるものがほとんどである(岩手県埋文センター1989)。

(4) 爾薩体地方

小泉 1 期は，爾薩体地域(二戸周辺)の筆者編年 D 期にほぼ相当しよう。土師器坏の外面が沈線または

無段で，平底主体の特徴を有する。ただし例示した一戸町上野遺跡 BA09 住居跡・北館 A-AJ50 住居跡には轆轤成形の土師器坏を明らかに模した資料が含まれており，小泉は両遺跡より古く位置づけられ，轆轤成形が導入される 9 世紀前葉より古くなる(八木 1992)。

小泉 2 期は，ヘラ切無調整や糸切再調整で，底部と体部との境が明確なものが多く，おおよそ 60mm 以上の底径となる一群である。爾薩体 E 期が非轆轤成形の平底と轆轤成形とが共伴する一群なので，これには該当せず，土師器が卓越し，糸切で再調整が多く，体部が直線的～下半に丸みをもつF期に相当する。小泉ではヘラ切が須恵器の 3 割にみられ，下半の丸みが小さいことから，F期の中でも古く位置づけられよう。F 期の底径平均が 64mm，口径／底径比が 2.20 と小泉遺跡より新しい傾向を示していることもそれを裏付けている。

G期は底部と体部の境がなめらかで再調整が多く，小泉 3 期はこの時期に比定される。小泉では須恵器が 3 割以上を依然として占め，爾薩体では土師器が主体で須恵器が僅少となっており，須恵器の供給量には明らかな差が認められる。

(5) 斯波地域(盛岡市周辺)

斯波地域(盛岡周辺)では，紫波町稲村遺跡 E-6 住居跡では丸みのある平底で沈線が体部上半にある坏がみられ，小泉 1 期との共通性を指摘することができる。

小泉 2 期は斯波編年の中では，体部が直線的で糸切がヘラ切より多く，底径平均が 70mm 以下，口径／底径比が 2.1 程度となる I b～c 期に比定される(盛岡市教委 1989)。斯波では土師器が須恵器の 1 割程度と須恵器の圧倒的多数であるのに対し，小泉では土師器が全体の半数を占め，須恵器が 1／3 と少なく，比率は大きく異なっている。これは須恵器の供給量の問題であり，小泉での須恵器の量は爾薩体と斯波地域の中間ほどの量となっている。

小泉 3 期はヘラ切がなくなり，須恵器は糸切無調整，土師器は再調整を施すものが多く，ともに内面の底部から体部への移行がなめらかとなり，底径はおおよそ 60mm 以下，平均で 55.5mm，口径／底径比が 2.26 以上，平均の 2.5 一群である。斯波では底部と体部との境がなめらかになり，土師器の半数以上が再調整されるⅡa～b 期の資料がこれに近い特徴を有する。底径平均が 62～60mm，口径／底径比が 2.3～2.4 となる斯波に比べ，底径平均が小さく，それにより口径／底径比も大きくなっており，小泉遺跡はより新しい要素がみられる。

(6) 胆沢地域(水沢市周辺)

胆沢編年では小泉 1 期はg期にあたる。7～8 世紀の坏は内外面の稜や段が体部の中程から底部に下がる流れがあるが，それらとは別にf～g期頃に，平底に近いなめらかな丸底の中に体部上半や中位に沈線を施すものがみられるようになる。この特徴をもつものは北海道江別市のいわゆる末期古墳(町村農場)などからも出土している(旭川市立博物館所蔵資料)。g期は 8 世紀中葉から第 3 四半期に位置づけられている(伊藤 1998)。

小泉 2 期は体部との境の特徴から胆沢城創建期i期より新しいj期に比定される。例示されているj期の水沢市妻根 6 号土壙は体部が鋭く直線的なものが多く，小泉例は中陣場 SI03 住居跡のやや丸みのある器形に近似している。また両遺跡の底径平均が 66.5mm，口径／底径比が 2.02 と数値的にも近似値をとる。ただし両遺跡ともヘラ切りが主体を占めており，小泉遺跡に先行するものとみられる。9 世紀代第 2 四半期である。

3 期は胆沢編年ではk期にほぼ相当しよう。体部から底部への移行がなめらかで，再調整が施され，また口縁部端部が外反する特徴も共通する。底径平均 59mm と胆沢の方が大きいが，口径／底径比 2.48 はほぼ同じ数値となっている。胆沢で底径平均が 55mm 前後となるのは 10 世紀半ばごろとなっており，地域差が

認められる。胆沢の1期になると再調整がほとんどみられなくなり，小泉3期の特徴から離れてしまう。k期は9世紀第3四半期とされている。

(7) 多賀城編年

多賀城編年では胆沢j期に相当するのが，多賀城跡60次SE2101B井戸跡Ⅲ層・62次SK2167土壙出土土器である。SE2101Bは土師器坏が糸切で再調整されるものが多く，須恵器はヘラ切無調整がほとんどで，SK2167は土師器が回転ヘラケズリによる再調整されるものが多く，須恵器はヘラ切と糸切が混在している。底径平均は両者とも69.5mm，口径／底径比は1.96～2.02となり，胆沢j期などと比較すると底径がやや大きい。SE2101Bからは天長7(832)年の紀年名をもつ漆紙文書が出土している(柳沢1994)。小泉2期はヘラ切と糸切の割合からSK2167により近い内容である。

60次SE2102井戸跡は土師器が手持ちヘラケズリ調整もしくは糸切無調整，須恵器が糸切無調整で，底径平均は61.8mm，口径／底径比2.31になり，底部の小径化が進む。61次鴻の池地区10層出土土器は土師器坏の体部下半の丸みが増し，再調整は手持ちヘラケズリとなり，土師器の底径平均は61.9mm，口径／底径比2.36と，法量的にはSE2102とほとんど同じである。ここで最も異なるのは須恵器にかわり須恵系土器が登場してくることである。底径平均は58.2mm，口径／底径比2.52と土師器より底径が小さくなっている。SE2102は9世紀代3四半期，鴻の池10層は第4四半期に位置づけられている。

小泉3期との比較では体部の形状は一部鴻の池10層に近いものもみられるが，体部下半の丸みが少ない点でSE02に近い。底径が他地域より小泉遺跡が小さいのは地域差であろう。

以上，各地の編年と比較してきたが，小泉1期は8世紀後葉，2期は9世紀第2四半期，多賀城の漆紙文書紀年からすると第2四半期でもやや新しい方に位置づけられよう。また3期は9世紀第3四半期を中心とする時期に比定されよう。

4 出土土器からみた小泉遺跡の性格

(1) 地域的特徴

小泉遺跡出土の土器を概観すると，甕類では轆轤成形をしない土師器甕が圧倒的多数を占めることが大きな特徴となっている。この中には轆轤未使用段階の1期の資料も入っているとみられるが，坏の出土量からその量は僅かであろう。また須恵器の甕類は土師器に比し破片数が少なく，坏類の須恵器が占める割合からみると極端に少ない。轆轤成形の赤焼土器の比率はさらに低い。

9世紀になると，東北地方では長胴甕は轆轤成形の甕が急激に普及する。9世紀前半はタタキ成形を轆轤成形と整形の間にはさんで，体部下半をヘラケズリする平底のもので，9世紀後半にはタタキ成形が省略されるようなる。これらは陸奥型甕と呼ばれ，東北地方や北海道でもみられるが，その主体は秋田～盛岡までの範囲である。9世紀初頭までに城柵が造営され，土器の生産体制も広域的な交流がおこなわれ，急激に転換したものとみられる。日本海側や太平洋側北部では，内面にアテ工具，外面にタタキ目をもつ丸底の北陸・出羽型甕も一定量出土している。

これらとは別に轆轤を用いない長胴甕(北奥型甕と仮称)が東北北部に分布する。土師器甕は元来轆轤を用いず粘土紐巻き上げの成形技法をとってきたが，9世紀になり東北南部では轆轤成形に転換し，その結果南北差が明瞭になる。北奥型甕は基本的には城柵の設置されない地域や郡制が施行されない地域に分布するが，盛岡～北上市あたりの斯波～和我郡域までは陸奥型甕が主体となる集落と北奥型甕が主体となる集落がモザイク状に分布している。斯波～和賀郡の郡制のあり方を示唆するものであろう。

小泉遺跡周辺の9世紀集落はまだ十分に把握されていないので，斯波郡周辺のあり方と共通するか，そ

の北の様相に類似するのかはっきりしないが，友沼Ⅲ遺跡とも考えあわせると，少なくとも胆沢郡以南のような陸奥型甕が圧倒的多数を占める状況でないことは明らかである。甕類は坏類に比し型式変化が小さく，また前代の要素を継承する保守的な器種である。これらのことから小泉遺跡の属する気仙郡は郡制施行前と大きく変化したものとは考えにくく，北部社会的要素を色濃く残していた地域といえそうである。

(2) 小泉遺跡の性格

小泉遺跡 1 期は遺物量が僅少で，また墨書土器もみられず，その性格については今後の課題である。

次の，2・3 期の坏類をみると土師器が半数であるが，須恵器が全体の 1/3 を占めている。近くの友沼Ⅲ遺跡では須恵器が少ないので，地域的特徴というより遺跡の性格が反映しているものとみられる。

一般論として，須恵器が相当量供給されるためには，近くに築窯されるか遠隔地から供給されなければならない。城柵設置地域は窯がつくられて出土量も多いが，それより北の地域では交易などによって須恵器を入手しなければならず，したがって出土量も少なくなる傾向にある。爾薩体や久慈地域でも須恵器の占める割合は小さく，特に爾薩体はかなり限られている。小泉遺跡の須恵器の量はそれらの地域と比較すると数倍の量に達する。

その一方で，小泉では坏類の器種が坏と大型坏に限定されているという特徴もある。坏のほかに蓋・高台付坏は城柵や周辺集落では通有の器種であり，硯が加わることもあるが，これらが小泉ではみられないのである。硯は坏を転用したため不要だったとも考えられるが，大量の墨書土器があって専用の硯がみられないのは不自然である。

このように，小泉遺跡は墨書土器が多量で，轆轤非使用の土師器甕主体，須恵器坏類が多く，にもかかわらず坏類の器種が単調という特徴を有している。ここで類似する遺跡として猿ヶ石川流域の遠野市高瀬Ⅰ・Ⅱ遺跡を取り上げたい。両遺跡は幅 20～30m の小河道をはさんで東西に隣接する 8～9 世紀の集落遺跡である。8 世紀にはいわゆる末期古墳の高瀬古墳群も営まれている。竪穴住居跡が西のⅡ遺跡から 14 棟，東のⅠ遺跡から 25 棟，掘立柱建物跡がⅡ遺跡から 21 棟，Ⅰ遺跡から 4 棟が検出されている。時期は 9 世紀第 1～4 半期である。このほかⅠ遺跡の西縁を区切るような溝なども確認されている。地区によっては計画的配置をうかがわせるところもあるが，規模の大小差をもつ竪穴住居の構成は一般集落と大きな相違はみられない。掘立柱建物は 1×2 間や 2×2 間総柱が多く，集落内の倉庫とみられる。これ以外に 2×3 間や大きな掘方で縁をもつ建物など，一般集落にはあまり例をみないものもあるが，官衙建物とするなら小規模ではある。

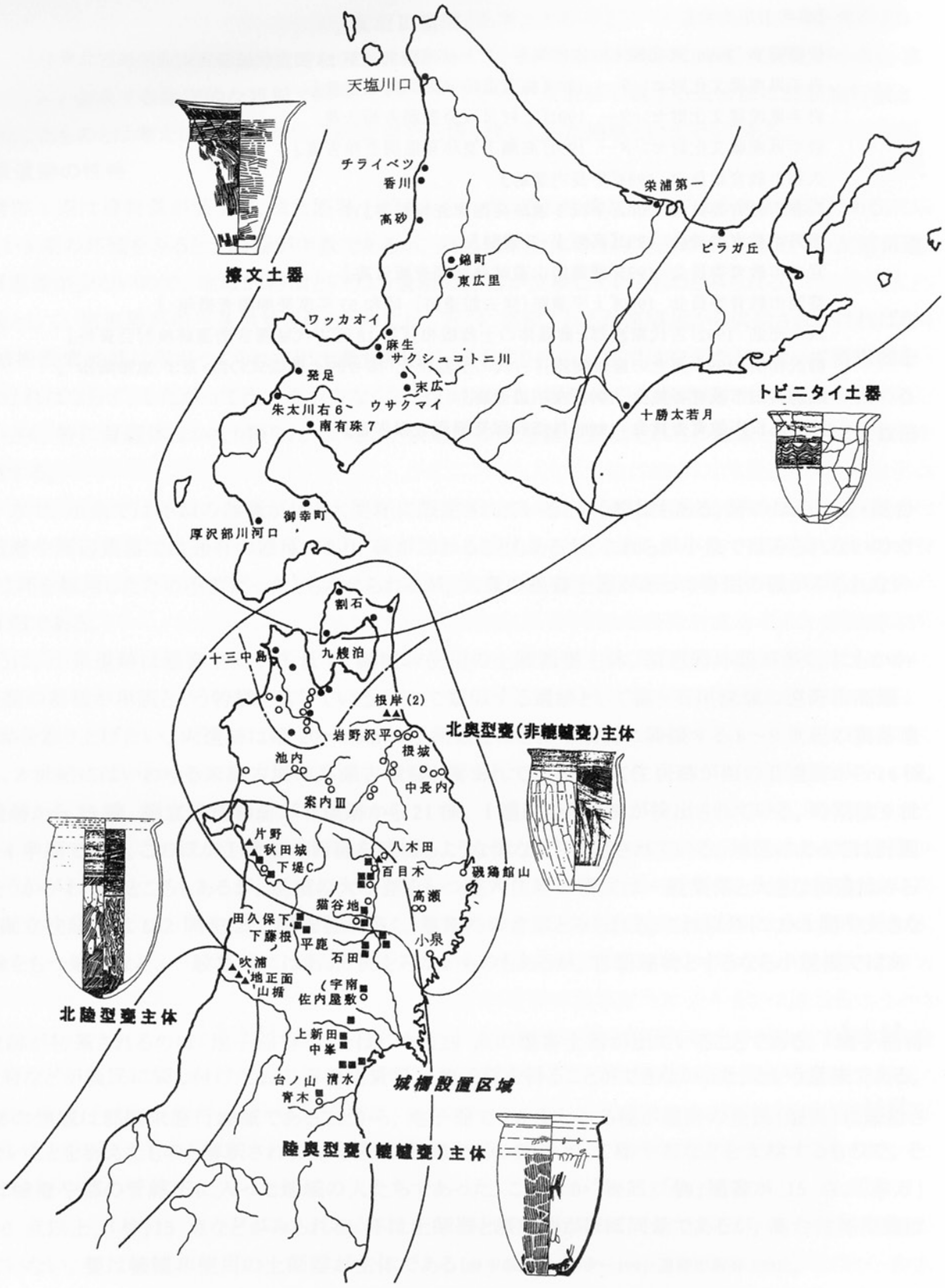
この遺跡が特筆されるのは「地子稲得不」をはじめ 129 点の墨書土器が出ていることである。「地子稲得不」は国府などが農民に貸し付けた公の田の賃貸料＝地子稲を得ることができなかった，という意味である。高瀬遺跡の地域は郡制未施行地域であることから，地子稲でまかなわれる稲が遠野の住民（蝦夷）に賑給されていないことを訴えたものと解釈されよう。賑給は飢饉などの救済として稲や布などを支給するもので，その対象は城柵や郡の管轄下に入った地域の人たちであった。このほか「物部」「物」墨書が 15 点，「本万」「上万」10 点以上，「林」15 点などがみられる。坏は土師器と須恵器がほぼ同量であるが，高台付坏や蓋は出土していない。甕は轆轤非使用の土師器が主体である（岩手県埋文センター1991・遠野市教委 1992）。

土師器甕が在地性を，須恵器坏や多量の墨書土器が賑給など城柵との関わりを示すものと考えるならば，高瀬Ⅰ・Ⅱ遺跡は，胆沢城などの城柵と朝貢や賑給の関係にあった猿ヶ石川流域の物部姓を名乗る在地有力者の集落とみることができよう。

小泉遺跡は気仙郡の下にあり，高瀬と同等に扱うことには無理があるが，在地有力者の集落も視野に入れてもいいのではないだろうか。もちろん「厨」墨書から何らかの官衙関連遺跡の可能性が高いことはいうまでもない。

【参考引用文献】

伊藤博幸　1998「東北地方の古代集落　北上盆地南部」『第24回古代城柵官衙遺跡検討会資料』
岩手県埋蔵文化財センター　1989『源道遺跡発掘調査報告書』
岩手県埋蔵文化財センター　1991『上村貝塚発掘調査報告書』
岩手県埋蔵文化財センター　1991『高瀬Ⅰ遺跡発掘調査報告書』
久慈市教育委員会　1988『中長内遺跡』
久慈市教育委員会　2002『平沢Ⅰ遺跡発掘調査報告書』Ⅵ
遠野市教育委員会　1992『高瀬Ⅰ・Ⅱ遺跡』
宮古市教育委員会　1995『磯鶏館山遺跡発掘調査報告書』
盛岡市教育委員会　1989『上平遺跡（猪去館遺跡）-昭和63年度発掘調査概報-』
八木光則　1992「古代斯波郡と爾薩体の土器様相」『第18回古代城柵官衙遺跡検討会資料』
柳沢和明　1994「東北の施釉陶器」『古代の土器研究-律令的土器様式の西・東3　施釉陶器-』
陸前高田市教育委員会　1990『友沼Ⅲ遺跡』
陸前高田市教育委員会　1998『貝畑貝塚発掘調査報告書』



●	トビニタイ土器
●	擦文土器（中期）
○	北奥型甕（非轆轤）主体
■	陸奥型甕（轆轤甕）主体
▲	北陸型甕（丸底甕）主体

第６図　土師器甕の地域差（9～10世紀）

小泉遺跡の墨書土器

村木　志伸
（東北芸術工科大学）

1 はじめに

小泉遺跡は遺構が不明瞭で，その出土遺構なども明らかではない(註 1)。遺物の性格を解釈する上で必要な情報が欠如した状態であり，本来，遺物の解釈は困難な状況である。こうした状況をふまえ，以下，現段階で遺物観察のみから把握できる墨書土器の特徴について述べてみたい。

2 出土土器の傾向

気仙地方の当該時期の資料が少ないこともあり，その年代確定は難しいが，ほぼ 9 世紀代におさまる資料群と考えられる。須恵器の出土量が比較的多く，供膳形態がそのほとんどを占める。こうした傾向は，遺跡の性格を反映しているものと考えられる。須恵器の生産地は 4，5 のグループにわかれると推定され(註 2)，胎土分析等の検討をしていないものの内陸部（水沢市・瀬谷子窯など）や海岸ルート（矢本町・須江窯跡など）の可能性が指摘されている。

出土遺構・状況は把握できていないものの，土器の総量に占める墨書・刻書の率が高いことから，調査地点が墨書土器群の使用・廃棄された地点に近接していた可能性がある。

3 墨書土器について

土器上の墨痕の有無及びその内容について赤外線カメラシステムを使用し，筆者ほか数名で解読・検討した。その結果，墨書土器(註 3)112 点，刻書土器(註 4)10 点（墨書と重複：5 点），線刻土器(註 5)2 点が確認できた。以下，その内容について述べていきたい。

① 墨書の種類

明確に解読できた墨書の種類として「吉」（10 点）「羽？」（4 点）「主」（3 点）「具」「千ヵ（干？）」「廿」（2 点）「厨」「下」「中」「化」「集」「木」「一」「止」「生」「土」（1 点）がある（【表 1】）。1 点の土器に，同一文字を複数部位記す場合や，いくつか異なる種類の文字を複数記したものがある。文字の種類が多岐にわたり，筆致も様々であることが全体の特徴と言えよう（【図 1】）。

遺跡の性格にかかわる内容について述べてみたい。「厨」は，小泉遺跡が官衙など公的機能に関連する可能性を示す墨書内容として注目される。特に，東北地方の「厨」墨書土器は，そのほとんどが城柵などの官衙関連遺跡からの出土であり注目される(註 6)。ただし，総数 110 点のうちの 1 点であるという点は考慮すべきである(註 7)。底部調整がヘラ切で径も大きいなど，墨書土器のなかでは古い段階に属するものと考えられる。「下」「中」は，他の遺跡の事例では特定の空間内での位置関係等を示す場合があるが，遺構が不明瞭な段階での判断は難しい(註 8)。いずれも土器底部に記され，達筆である。

最も出土点数の多い「吉」は，東国出土の墨書土器によくみられるとされる文字の一つである。〝良好な状態を示す〟ものと指摘され(註 9)，近年では，祭祀の場面のみならず儀礼飲食行為に関わるとの見解がある(註 10)。墨書部分の残存度が低いがおそらく「吉」と推定される 17 点を加えると 27 点にのぼる。このほか，「集」「主」「木」「千ヵ」「生」も東国文字群である(註 11)。

「羽」は全国的にみても出土例が少ない。本遺跡の文字は稚拙な印象を受ける。あるいは別の文字，もし

くは記号化している可能性もある。なお○で囲んでいるものがある。「具」「千ヵ」(筆の流れからは干の可能性もある)は筆致から同筆の可能性が高いが，墨書部位は異なる。

解読上，多少迷いが生じる文字としては以下のものがある。「∪」は「○」(則天文字「星」【図 2】)の可能性もあるが，その筆致も稚拙であることから判断することは難しい。「止」は，書き損じとも考えられるが千葉県市原市の稲荷台遺跡出土「土」墨書土器(註 12)(【図 3】)などの類例からおそらく「土」であろう。

刻書(線刻)土器であるが，本遺跡では墨書行為と刻書(線刻)行為が同じ土器にみられる場合が高い。内容では「丈」(「大」の可能性もある)「×」「一」等がある。「丈」であるとすれば東国地方にみられるウジ名〝丈部〟の可能性が指摘される。

線刻土器は「丰」「□(丰?)」の 2 点がある。水沢市林前南館跡(註 13)の例(【図 4】)から，卅(九字:魔よけ記号)の字形変化の事例と照合すると，同様の内容と理解できるだろう。なお，いずれも線刻しやすい土師器である。

全体的には東国の集落・官衙関連遺跡にみえる墨書土器と共通する文字が多い。しかし「吉」を除き，それぞれが 1，2 点の出土と少量であることが指摘できる。また，神仏に直接的にかかわるような内容がみられないことも示唆的な事実である。

② 字形

最も出土点数の多い「吉」の字形について述べておく。その墨書部位は様々で，字形も異なっている。今回はその特徴から四分類した(【図 5】)。

分類の基準としては，まず，2 画目の縦画が 3 画目の横画を越えるか否かで，A 類と B・C 類に分類した。さらに A 類は〝口〟部分の表現について方形を意識する場合を A1 類，2・3 画が連結して〝マ〟と特徴的に記すものを A2 類とした。B 類は 2 画目縦画が 3 画目横画を貫き〝口〟部分を方形に意識して書く意識が存在しているもの，C 類は，2 画目縦画が 3 画目横画を貫き〝口〟部分も方形に書く意識がなく，正しい書順も失われてしまっているものとした。

文字を正しく「吉」を書ける A 類から C 類に変容した仮定すると，問題となるのが「主(底部外面)・吉(底部外面)・吉(体部外面(横位))」(№.37)墨書土器である。A2 類とした底部外面「吉」と，C 類とした体部外面(横位)「吉」の墨書の濃淡を比較すると，後者の方が圧倒的に薄い。なお，この墨書土器については底部外面の「主」も二度書きされており(【図 1】「主」参照)その解釈，使用過程の推定が難しい。

字形の違いは，遺跡内で「吉」が継続的に使用される間に変化していったか，その書き手や使用目的が異なるなどの可能性が指摘できる。土器の年代幅がそれ程長くないため，書き手の違いを想定するのが自然かもしれない。なお，記号「ヰ」(№.54)は「吉」の変容したパターンの一つととらえるべきであろうか。

③ 器種と墨書部位

墨書土器の種別は，須恵器 60 点，土師器 52 点(内黒土器 46 点，赤焼き土器 6 点)となった。器種は土師器鉢の例が 1 点存在するほかは，すべて須恵器・土師器とも杯である。

墨書部位(註 14)では，底部外面 36 点，体部外面 82 点となる。内面に墨書されたものはない。この事実からしても，土器の通常使用される状態を想定した墨書行為がうかがえる。体部墨書に関して文字方向(註 15)が判明するものの内訳は，正位 22 点，横位 10 点，逆位 12 点である。これを器種別にみると，須恵器の墨書部位は底部外面 21 点，体部外面が 42 点(正位 12 点，横位 7 点，逆位 8 点)となり，土師器の墨書部位は底部外面 15 点，体部外面が 40 点(正位 10 点，横位 3 点，逆位 4 点)となる。

ところで，体部に墨書された場合では土器を通常の状態に設置したときに墨書部分がみえるが，逆位に記される事例は，通常の状態で土器を使用する場面(食器利用)が想定されないとされている。本遺跡の逆位の文字内容には「羽」「主」「□(吉)」「干」がある。ただし土器のこうした内面を観察すると表面上にスレ・ア

タリ等の使用痕跡が認められ，注意を要すべきだろう。

④ 土器上にみえる諸特徴

墨書土器の使用方法を検討する上で，土器上にみえる様々な特徴を観察する必要がある(註 16)。以下，土器表面の観察における所見を述べてみたい。

(1) 付着物について

油煙や煤が付着しているものが 10 点ある。「□(第)□(丈)[刻書]」と「□」は油煙付着状況と灯芯痕跡から，灯明皿として使用されたものと判断できる。このような特徴は寺院跡や集落内などの祭祀行為の周辺で確認される場合がある。しかし，本遺跡の墨書土器全体の割合からすると非常に少ないため，主体的な使用形態とは考えにくい。

墨書以外の墨痕が付着したものが墨書土器中に 5 点存在する。付着部位はすべて底部内面である。ただし，顕著な磨耗が認められるものは少ない。したがって，恒常的に使用した硯としては想定しにくい。また「大□」墨書土器には，器の内面全面にわたり赤色顔料の付着が認められる。ベンガラ系の色調で底部内面には磨った痕跡があり，朱墨用の硯や塗料容器等の可能性があろうか。なお，墨の付着は非墨書土器にも認められる。

(2) 土器表面にみえる使用痕跡について

土器内面を観察すると，口縁内部や底部内面にスレ・アタリなどの使用痕跡がみられる。また，墨等の付着物が確認できないが土器内面の磨耗が顕著なものがある。なお，「厨」墨書土器もその一つである。また，先述のように体部外面に逆位に記されるものにも確認される。こうしたアタリ・スレ等による磨耗度は顕著でなく，頻繁に使い続けられるような使用方法は想定できないものの，本遺跡の墨書土器の使用方法は〝墨書行為(逆位も含む)＝祭祀目的〟という単純な図式で解釈しないことが重要であろう。

土器の残存率を観察すると，土師器の方が破片資料である率が高い。一方，故意に破砕したような形跡がみられる資料はほとんどなかった。

なお，小泉遺跡の墨書土器群は，すべてが一度に使用されたのではないようである。墨書土器を含む何らかの活動は，数回にわたり行われた可能性があるとみるべきであろう。

4 立地からみた遺跡の性格

本遺跡のように墨書土器が出土し，その立地・環境から類似している遺跡をあげ，小泉遺跡の性格について予察したい。

まず参考にしたいのが，福島県いわき市の荒田目条里遺跡(註 17)(【図 6】)である。近接する丘陵上に位置する根岸遺跡は郡庁・正倉域が検出され，磐城郡家の中心部と考えられている。その根岸遺跡と密接な関係を有すると考えられる荒田目条里遺跡の古代の河川跡からは，絵馬や木簡，祭祀具，農耕具等の木製品や大量の土器等，膨大な遺物が出土した。墨書土器も人面墨書土器をはじめとして「子成」「丈部」「山寺」「明殿」「東殿」など 287 点がある。なお，遺跡周辺の字名には〝礼堂〟が残る。

小泉遺跡には，近接して法量神社が存在し，東側丘陵上には屋号として古郡屋敷の名称も残るなど，周辺状況が類似することが指摘できる。また，式内社である氷上神社も西側の低丘陵を越えた位置にあり，他地域の郡家の立地と共通する点がある。

ただし，2 つの遺跡を比較すると多少異なる部分もある。小泉遺跡は氷上山を背に広田湾を眼下に望む景勝の地であり，饗宴・共食の場となる空間にふさわしい。荒田目条里遺跡が谷部の奥に入る地点で周辺への見通しに優れていない点は小泉遺跡と異なる。

また，小泉遺跡の出土遺物のなかに神仏にかかわるようなものや，直接的に祭祀的な内容を示す遺物を示すものがみえないことも見逃せない。先述したように，墨書土器については灯明皿として使用される率も非常に低く，何らかの祭祀行為あるいは仏教儀式などに関わるものとはとらえられない。シンポジウムで寺院あるいは神社等に関わる墨書土器群であるとの指摘(註 18)も受けたが，墨書土器のみからでの判断は難しいと思われる。

以上のことから，小泉遺跡は何らかの官衙的機能に関わる場としてとらえることが現段階では自然であろう。なお，遺跡周辺において器を使用する場面で墨書行為が存在し「厨」の内容を含むことは，少なくとも官人層などの識字層が絡んでいる時空間であったことは確実であろう。小泉遺跡が海道地方における水陸交通上の結節点である立地を呈し，南北双方からの文化圏の交差点としても位置付けられることが指摘されている(註 19)。そこに集う人々がどのような人々であったのか，限られた資料で語ることは難しいが，少なくてもその所産が墨書土器であり，辺境における古代律令制の一端を解明する資料として重要であることは間違いない。

5 今後の課題 ー小泉遺跡の性格解明に向けてー

墨書土器群とその内容，考古学的観察から総合的に判断すると，小泉遺跡とその周辺には何らかの「官衙に関連する機能」が存在した可能性が指摘できる。ただし，官衙「施設」そのものであるか否かは現在のところ遺構も未確認であり，不明と言わざるを得ない。

墨書土器とその使用目的を理解するため，速やかな遺跡本体の把握と遺跡の性格の解明が必要であることは言うまでもない。

【脚注】

1 遺跡とその周辺環境については，以下の資料を参照されたい。佐藤正彦「小泉遺跡とその周辺」『法政大学国際日本学サテライトシンポジウム 海の蝦夷 ―小泉遺跡が語りかけるもの―』2003

2 シンポジウムでの佐藤敏幸氏の指摘による。

3 2003 年 7 月 13 日現在の確認の段階。なお，墨痕としてのみ確認されるものは含まない。

4 土器焼成前に，ヘラ・棒などで文字や記号を記した土器。

5 土器焼成後に，先の鋭い工具などで文字や記号を記した土器。

6 伊藤博幸「東北地方における「厨」銘墨書土器について」『法政大学国際日本学サテライトシンポジウム 海の蝦夷―小泉遺跡が語りかけるもの―』2003

7 平川南「「厨」墨書土器論」『山梨県史研究』創刊号，1993(『墨書土器の研究』2002 所収)

8 「上厨」(名生館官)「志厨上」(御子ヶ谷遺跡)「下厨南」(伊場遺跡)の例から厨家の組織分化がうかがえ，施設を上・下あるいは上・中・下等に分けていたとの説(山中(1994)や，政庁を中心として東西南北の施設を方向別に呼称している(佐藤(1997))事例を指摘した研究がある。

山中敏史「第一章 郡衙の構造と機能 第三節 館・厨家の構造と機能」『古代地方官衙遺跡の研究』1994

佐藤信「第一章 宮都・国府・郡家」『日本古代の宮都と木簡』1997

9 平川南「墨書土器とその字形」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 35 集，1991(『墨書土器の研究』2002 所収)

10 三上喜孝「文献史学からみた墨書土器の機能と役割」『古代官衙・集落と墨書土器 ―墨書土器の機能と性格をめぐって―』奈良文化財研究所刊，2003

11 前掲註(8)平川氏論文

12 市原市文化財センター『市原市稲荷台遺跡』2003

13 水沢市埋蔵文化財センター他『水沢市埋蔵文化財センター調査報告書第 16 集　林前南館跡』2003

14 1 点の土器に，墨書が数ヶ所される場合があり，総計で 100 パーセントにならないデータである。

15 文字方向の内訳点数は，確認できたものについてである。

16 総合的な土器の観察とその意義については拙稿（1999）で指摘した。また，磨耗などの使用痕跡を検討した川畑氏の業績がある。近年では，こうした観察を報告書にも取り入れ成果を挙げている例（高桑（2001））がある。

荒木志伸「墨書土器にみえる諸痕跡」『お茶の水史学』1999 「古志田東遺跡出土の墨書土器」『米沢市埋蔵文化財調査報告書　第七三集　古志田東遺跡』2001

川畑　誠「素描・墨書土器の周辺」『古代北陸と出土文字資料』1998 「墨書土器の周辺―消費痕跡を中心に―」『古代官衙・集落と墨書土器―墨書土器の機能と性格をめぐって―』奈良文化財研究所刊　2003

高桑弘美ほか『山形県埋蔵文化財センター調査報告書　第 93 集　三条遺跡第 2・3 次発掘調査報告書』2001

17 いわき市教育委員会『いわき市埋蔵文化財調査　第七五集　荒田目条里遺跡』2001

18 シンポジウム当日の田熊清彦氏，小松正夫氏のご指摘による。

19 考古学的な視点からの分析として八木光則「太平洋交流・交易の世界」がある。また文献側からの問題を整理したものとして熊谷公男「山道の蝦夷と海道の蝦夷」樋口知志「奈良末・平安初期の気仙地方」『法政大学国際日本学サテライトシンポジウム　海の蝦夷―小泉遺跡が語りかけるもの―』2003 がある。

【補注】なお，シンポジウム当日の詳細な内容については『法政大学国際日本学研究所報告　第 4 集　海の蝦夷―小泉遺跡が語りかけるもの―』2003 がある。別途参照されたい。

【表1-1】小泉遺跡　墨書・刻書・線刻土器　観察表

No.	文字	種別	部位	器種	口径	底径	器高	黒色	切離	出土位置	再調整	付着物（場所）	使用痕跡	残存率	補足	略号	登録番号
1	厨	須恵器	底外	杯	*	74	*	－	ヘラ切	A6-3層	－		底内スレ	底部完存		KZ991118	536
2	吉	須恵器	体外(正)	杯	136	*	*	－	欠	－	欠			20%		KZ80	512
3	吉	土師器	底外	杯	*	73	*	内黒	調整	－	手持ケズリ（体下端～底面）			底部1/4	底内にハジケ	－	523
4	吉	須恵器	底外	杯	*	56	*	－	糸切	A6-2層	－	墨（底内）	底内スレ	底部3/4		KZ991122	541
5	吉	須恵器	底外	杯	*	70	*	－	糸切	A6-5層	－			底部完存		KZ991122	542
6	吉	須恵器	底外	杯	*	68	*	－	糸切	A6-3層	－			底部完存		KZ991119 KZ80	543
7	吉	土師器	底外	杯	*	59	*	内黒	糸切	A7-3層	－			底部完存		KZ991119	550
8	吉	土師器	体外(横)	杯	150	*	*	内黒	欠	A7-3層	欠			20%		KZ991119	561
9	吉 吉	須恵器	体外(横) 底外	杯	163	60	61	－	糸切	A7-2層	－			70%		KZ991119	575
10	□(吉)	須恵器	体外(正)	杯	*	*	*	－	欠	－	欠			破片		KZ80	516
11	□(吉)	須恵器	体外(横)	杯	*	55	*	－	糸切	A6-2層	－			30%		KZ991118	537
12	□(吉)	須恵器	底外	杯	146	54	47	－	糸切	A3-3層	－			70%		KZ991122 KZ80	572
13	□(吉)	須恵器	体外(逆)	杯	147	64	45	－	糸切	A7-2層 A7-3層	－		底内スレ	30%		KZ991118	573
14	羽 □	須恵器	体外(正) 体外(正)	杯	150	73	47	－	糸切	A6-3層 A7-3層 A7-2層	－			50%		KZ991118	559
15	羽	土師器	体外(横)	杯	130	*	*	－	欠	－	欠			破片	赤焼き土器	－	514
16	羽	須恵器	体外(逆)	杯	*	70	*	－	調整	－	回転ケズリ（体下端～底面）			破片		－	517
17	羽	土師器	体外(逆)	杯	*	*	*	内黒	欠	A2-2層	欠			破片		KZ991118	525
18	集 ×［刻書］	須恵器	底外 底外	杯	*	67	*	－	糸切	－	－			底部完存		－	508
19	□(止)	須恵器	体外(正)	杯	132	64	36	－	ヘラ切	A5-5層	－	墨（底内）	底内スレ	60%		KZ991122 KZ80	509
20	□ 主	須恵器	体外 底外	杯	*	70	*	－	糸切	－	－			30%	文字以外の墨痕有り	KZ80	510
21	□	須恵器	体外	杯	*	*	*	－	欠	－	欠			10%		－	513
22	□（浄ヵ） □	土師器	体外(正)	杯	*	*	*	内黒	欠	－	欠			破片		－	515
23	下	土師器	底外	杯	138	68	43	内黒	糸切	－	－	煤（体外・底外）	口内スレ	ほぼ完形		－	519
24	具	須恵器	底外	杯	*	65	*	－	ヘラ切	A8-3層	－			底部1/2		KZ991117	526
25	□(吉?)	須恵器	体外(逆)	杯	*	*	*	－	欠	A5-2層	欠			破片		KZ991119	527
26	∪	土師器	体外(正)	杯	150	74	50	内黒	糸切	A6-2層 A7-3層	手持ケズリ（底外周）		口内スレ	50%		KZ991112	544
27	一	土師器	底外	杯	*	55	*	内黒	調整	A6-2層	回転ケズリ（体下端～底面）		底内スレ	30%		KZ991118	548
28	□	土師器	体外(逆)	杯	129	55	58	内黒	糸切	A6-2層	回転ケズリ（体下端）		底内アタリ	70%	丞？一次？か	KZ991118	552
29	上	須恵器	底外	杯	140	66	42	－	糸切	A7-3層	－			80%		KZ991119	560
30	□(第) 丈［刻書］	須恵器	体外(正) 体外(横)	杯	146	62	57	－	糸切	A4-2層	－	油煙（体外・体内）		80%	灯明皿	KZ991118	562
31	中	土師器	底外	杯	132	60	45	内黒	糸切	A6-3層	手持ケズリ（体下端）	煤？（体外・底外）	底内スレ 口縁カケ	ほぼ完形		KZ991119	564
32	□(集)	土師器	体外(正)	杯	139	61	48	内黒	糸切	A7-2層 A6ベルト3層	－		口内スレ	80%		KZ991119 KZ991922	565
33	干	土師器	底外	杯	139	63	50	内黒	糸切	A7-2層 A8-2層	手持ケズリ（体下端）		底内スレ	80%		KZ991117	563
34	化	須恵器	底外	杯	135	65	46	－	糸切	A6-2層 A6ベルト6層	－	墨？（底内）		ほぼ完形	火襷	KZ991122	566
35	木	土師器	体外(正)	杯	140	60	47	内黒	糸切	A6-3層	手持ケズリ（底外周）		口内スレ 底内スレ	50%	書順誤り	KZ991118	567

【表1-2】小泉遺跡　墨書・刻書・線刻土器　観察表

No.	文字	種別	部位	器種	口径	底径	器高	黒色	切離	出土位置	再調整	付着物（場所）	使用痕跡	残存率	補足	略号	登録番号
36	大□	須恵器	体外(正)	杯	135	66	43	－	糸切	A6-5層 A6ベルト3層	－	赤色顔料（底内・体内・口内）	体内スレ 底内スレ	ほぼ完形		KZ991122	574
37	吉 主 吉	須恵器	体外(横) 底外 底外	杯	148	68	51	－	糸切	A6-2層 A6-3層 A7-2層	－			70%	主（底外）は二度書き	KZ991118	579
38	吉	須恵器	底外	杯	140	62	45	－	糸切	A6-5層	－			80%	火襷	KZ991122	585
39	□(吉)	須恵器	体外(逆)	杯	＊	＊	＊	－	欠	A6-2層	欠			破片		KZ991118	539
40	□(吉)	須恵器	体外(横)	杯	140	48	43	－	糸切	A6-2層 A6-3層 A7-2層	－			40%		KZ991118	545
41	□(吉)	須恵器	体外(横)	杯	138	60	48	－	糸切	A6-2層 A7-2層	－			40%		KZ991118 KZ991122	581
42	□(吉?)	土師器	体外	杯	＊	＊	＊	内黒	欠	A7-3層	欠			破片		KZ991118	535
43	□(吉)	土師器	体外(正)	杯	＊	＊	＊	内黒	欠	A7-3層	欠			破片		KZ991119	540
44	□(吉)	土師器	底外	杯	＊	63	＊	内黒	調整	A5-3層	回転ｹｽﾞﾘ（体下端～底面）			底部完存		KZ991119	546
45	□(吉?)	須恵器	体外(正)	杯	＊	＊	＊	－	欠	－	欠			破片		KZ99	530
46	□(吉?主?)	須恵器	底外	杯	135	54	41	－	糸切	A7-2層 A7-3層	－			50%		KZ991118 KZ991119	586
47	□(吉?)	須恵器	体外(横)	杯	＊	＊	＊	－	欠	－	欠			破片		－	534
48	主	土師器	体外(逆)	杯	154	68	62	内黒	調整	－	回転ｹｽﾞﾘ（体下端～底面）			50%		KZ80	582
49	□(吉?)	土師器	体外(逆)	杯	＊	＊	＊	内黒	欠	－	欠			破片		KZ80	522
50	具	須恵器	底外	杯	＊	63	＊	－	ﾍﾗ切	A3-5層	－	煤	底内スレ	20%		KZ991122	592
51	□(吉?)	土師器	底外	鉢	170	80	74	内黒	調整	A6-3層	手持ｹｽﾞﾘ			30%		KZ991119	570
52	生	須恵器	底外	杯	133	54	44	－	糸切	A7-3層	－			70%		KZ991118	589
53	□(万)	須恵器	体外(逆)	杯	144	64	48	－	糸切	A7-2層	－			30%		KZ991118	590
54	□(羽) [刻書]	土師器	体外(横) 底外	杯	142	65	56	内黒	調整	A3-3層	手持ｹｽﾞﾘ（体下端～底面）		底内アタリ 口内スレ	50%		KZ991122	568
55	□(吉?主?)	須恵器	体外	杯	＊	＊	＊	－	欠	－	欠			破片		－	532
56	□(力)	須恵器	底外	杯	＊	66	＊	－	糸切	－	手持ｹｽﾞﾘ（体下端）	煤？（底外）	底内スレ	底部3/4		KZ80	511
57	干	須恵器	体外(逆)	杯	140	60	39	－	糸切	－	－			20%	火襷	KZ80	584
58	卄	土師器	体外(正)	杯				内黒	糸切	A7-2層	－			10%		KZ991118	549
59	卄	須恵器	体外(正)	杯	146	＊	＊	－	欠	－	欠			破片		－	591
60	□（止）	須恵器	体外(正)	杯	＊	77	＊	－	ﾍﾗ切	A6-2層 A6-3層	－			底部完存		KZ991118 KZ991119	587
61	十 □（×?） [刻書]	土師器	体外(正) 底外	杯	126	54	48	内黒	糸切	A8-2層 A8-3層	手持ｹｽﾞﾘ（体下端）		底内スレ	70%		KZ991117	588
62	□	須恵器	体外(正)	杯		.		－	欠	A6-2層	欠			破片		KZ991118	554
63	□	須恵器	体外(正)	杯	＊	＊	＊	－	欠	－	欠			破片		－	555
64	□	須恵器	体外(正)	杯	144	＊	＊	－	欠	A6-3層 A7-2層	欠			30%	２文字の可能性も	KZ991119	569
65	□	須恵器	体外(逆)	杯	＊	63	＊	－	糸切	A6-2層	－			底部3/4	火襷	KZ991118	580
66	□	須恵器	体外	杯	＊	50	＊	－	糸切	－	－			破片		KZ80	507
67	□	須恵器	体外(逆)	杯	＊	＊	＊	－	欠	A7-3層	欠			破片		KZ991119	531
68	□	須恵器	体外	杯	＊	＊	＊	－	欠	－	欠			破片		－	556
69	□	須恵器	体外	杯	＊	＊	＊	－	欠	－	欠			破片		－	558
70	□	須恵器	底外	杯	138	68	37	－	ﾍﾗ切	－	－	煤か墨（底内）		ほぼ完形	灯明皿	KZ80	594
71	□	須恵器	底外	杯	＊	＊	＊	－	ﾍﾗ切	－	－			10%		KZ80	597

【表1-3】小泉遺跡　墨書・刻書・線刻土器　観察表

No.	文字	種別	部位	器種	口径	底径	器高	黒色	切離	出土位置	再調整	付着物（場所）	使用痕跡	残存率	補足	略号	登録番号
72	□	須恵器	底外	杯	*	58	*	-	糸切	A7-3層	-		底内スレ 体内スレ	20%		KZ991119	612
73	□	須恵器	体外	杯	*	*	*	-	欠	-	欠			破片		-	576
74	□	須恵器	体外	杯	*	*	*	-	欠	-	欠			破片		-	577
75	□	須恵器	体外	杯	151	*	*	-	欠	A6-2層 A6-3層	欠			20%		KZ991118	593
76	□	須恵器	体外	杯	*	*	*	-	欠	-	欠			破片		KZ99	595
77	□	須恵器	体外	杯	*	*	*	-	欠	A4-2層	欠			破片		KZ991118	596
78	□	須恵器	体外	杯	*	*	*	-	欠	-	欠			破片		KZ99	611
79	□	須恵器	体外	杯	*	54	*	-	糸切	A3-2層	-			破片		KZ991119	613
80	□	土師器	底外	杯	*	*	*	内黒	欠	-	欠			破片		KZ99	610
81	□	土師器	体外	杯	*	*	*	内黒	欠	A7-2層	欠			破片		KZ991118	601
82	□	土師器	体外	杯	*	*	*	内黒	糸切	A2-2層	-			破片		KZ991118	602
83	□	土師器	体外	杯	*	*	*	内黒	調整	A6-3層	手持ｹｽﾞﾘ（体下端～底面）			10%		KZ991118	603
84	□	土師器	体外	杯	*	*	*	内黒	糸切	A5-2層	-	煤（体外）		破片		KZ991119	605
85	□	土師器	体外	杯	*	*	*	内黒	欠	-	欠			破片		KZ99	606
86	□	土師器	体外	杯	*	*	*	内黒	欠	-	欠			破片		KZ99	607
87	□	土師器	体外	杯	*	*	*	内黒	欠	-	欠			破片		KZ99	608
88	□	土師器	体外	杯	*	*	*	内黒	欠	-	欠			破片		KZ99	609
89	□	土師器	底外	杯	*	*	*	内黒	糸切	A6-2層	手持ｹｽﾞﾘ（底外周）			破片		KZ991117	529
90	□	土師器	体外（正）	杯	*	*	*	内黒	欠	-	欠			破片		-	518
91	□	土師器	体外（正）	杯	*	*	*	内黒	欠	-	欠			破片		-	520
92	□	土師器	体外（正）	杯	*	63	*	内黒	糸切	-	-			底部完存		KZ80	583
93	□	土師器	体外	杯	*	*	*	内黒	欠	-	欠			破片		-	521
94	□	土師器	体外	杯	*	*	*	内黒	欠	-	欠			破片		-	524
95	□	土師器	体外	杯	*	58	*	内黒	調整	-	手持ｹｽﾞﾘ（底面）			破片		-	528
96	□	土師器	体外	杯	*	*	*	内黒	欠	-	欠			10%		KZ	533
97	□	土師器	体外	杯				内黒	糸切	A6-2層	体外面ﾐｶﾞｷ			10%		KZ991118	551
98	□	土師器	体外	杯	*	*	*	内黒	欠	-	欠			破片		-	557
99	□	土師器	底外	杯	*	58	*	内黒	糸切	A3-2層 A4-2層	回転ｹｽﾞﾘ（体下端）			底部完存		KZ991119	571
100	□	土師器	体外	杯	*	*	*	内黒	欠	-	欠			破片		-	578
101	□	土師器	体外	杯				内黒	調整	A6ベルト3層 A7-2層	回転ｹｽﾞﾘ（体下端～底面）			20%		KZ991118 KZ991122	547
102	□ □ × ［刻書］	須恵器	体外 体外 体外	杯				-	糸切	A6-2層	-			底部完存		KZ991118	553
103	□ 一	土師器	体外 底外	杯	*	*	*	内黒	糸切	A6-2層	回転ｹｽﾞﾘ（体下端～底面周縁）			底部完存		KZ991117	598
104	□ 一 ［刻書］	土師器	底外 底外	杯	*	*	*	内黒	糸切	A6-2層	-			10%		KZ991118	599
105	□□	土師器	体外	杯	140	58	45	-	糸切	A8-2層	-	墨？（底内）		20%	赤焼き土器	KZ991117	538
106	□	土師器	体外	杯	*	*	*	-	欠	-	欠			破片	赤焼き土器	KZ99	600
107	□	土師器	体外	杯	*	*	*	-	欠	-	欠			破片	赤焼き土器	KZ80	604
108	□	土師器	体外	杯	*	*	*	-	欠	-	欠	煤（口内体外）		破片	赤焼き土器	KZ99	614

【表1-4】小泉遺跡　墨書・刻書・線刻土器　観察表

No.	文字	種別	部位	器種	口径	底径	器高	黒色	切離	出土位置	再調整	付着物（場所）	使用痕跡	残存率	補足	略号	登録番号
109	□	土師器	体外	杯	*	*	*	-	欠	-	欠	煤・油煙（口内体外）		破片	赤焼き土器	KZ99	615
110	□	須恵器	体外	杯	*	*	*		糸切		欠			破片		表採	
111	□	須恵器	底外	杯	*	*	*		ヘラ切		欠			破片		表採	
112	□	須恵器	体外	杯	*	*	*		欠		欠			破片		表採	
113	□（⿱十非）［線刻］	土師器	-	杯	*	*	*	内黒	欠	A7-2層	欠			破片		KZ991117	622
114	⿱十非［線刻］	土師器	-	杯	*	*	*	内黒	（摩滅）	-				破片		-	623
115	□［刻書］	須恵器	-	杯	*	68	*	-	糸切	A6-3層	-			20%		KZ991118	621
116	□［刻書］	土師器	-	杯	136	68	42	内黒	調整	A6-2層 A7-3層	手持ｹｽﾞﾘ（底面）		底内スレ	30%		KZ991118	625
117	□［刻書］	須恵器	-	杯				-	ヘラ切	A4-2層	-			20%		KZ991119	618
118	□［刻書］	須恵器	-	杯	*	*	49	-	欠		欠			30%		25-19-2	624
119	□［刻書］	須恵器	-	杯				-	糸切	A7-2層	-	煤（底内）		底部完存	割そろえ	KZ991118	617

【表の見方】

1、No.および、登録番号は巻末観察表と対応。ただし、文字解釈や付着物、消費痕跡など、本表に関する事項はすべて村木の個人的判断による。よって、事実記載、認識の誤り等の責任はすべて村木に属する。

2、文字について、□は欠損等により、文字が不明なもの。□□は二文字。

3、消費痕跡については、アタリは器同士を重ねた折などに底部外面カドと底部内面があたって形成されるようなものを指す。スレは底部内面を何らかの目的で使用した時や、口縁内側に帯状に横に磨れた状況のものを指している。

5、残存率に関しては、その計測式等で算出したものでは無い。肉眼で判断した残存状況を参考程度に掲載している。

図1　小泉遺跡出土の墨書・刻書内容

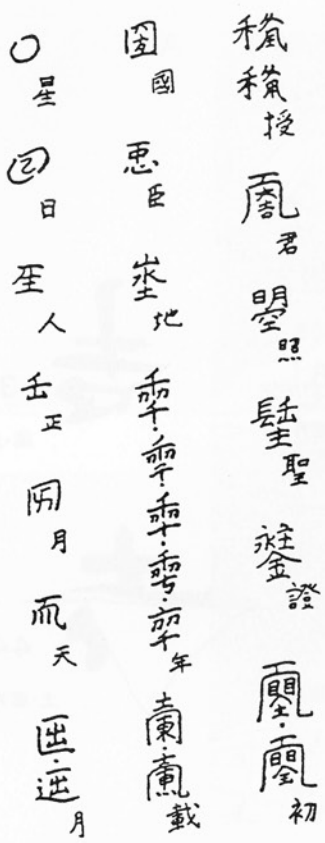


図２　則天文字一覧（文献註9より）

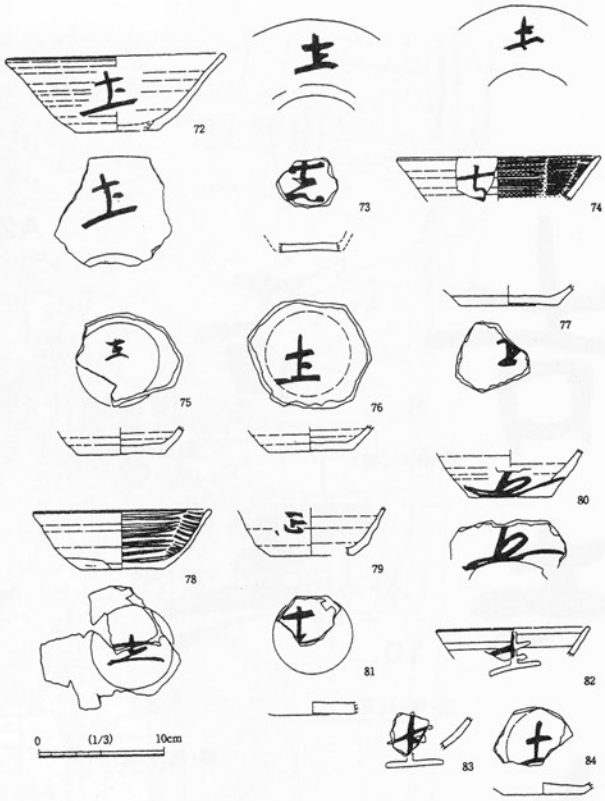
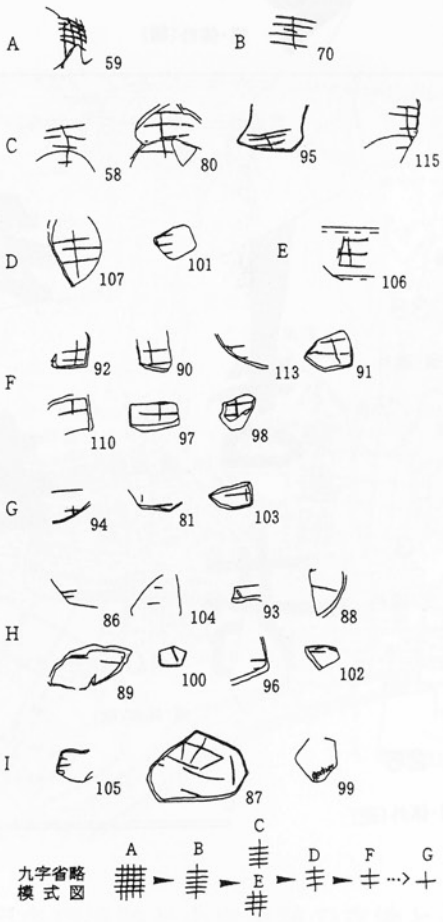


図３　稲荷台遺跡の「土」墨書土器（文献註12より）



＊表中の括弧は数が増える可能性があるもの

	No.	線の数	線刻の部位
A	59	4 × 5	内面　体～底部
B	70	1 × 5	内面　体部
C	58	1 × 4	内面　体～底部
	80	1 × (4)	内面　体～底部
	95	1 × (4)	内面　体部
	115	(1) × 4	内面　体～底部
D	10.	1 × 3	内面　底部
	101	(1) × (3)	外面　体部
E	106	2 × 3	外面　体部
F	92	1 × (2)	内面　口縁近く
	90	1 × (2)	内面　口縁近く
	113	1 × (2)	内面　口縁近く
	91	1 × (2)	内面　体～底部
	110	1 × (2)	内面　体部
	97	1 × (2)	内面　体部
	98	(1) × (2)	内面　体部
G	94	(1) × (1)	内面　口縁近く
	81	(1) × (1)	内面　底部
	103	(1) × (1)	内面　底部
H	86	(2)	内面　底部
	104	(2)	内面　底部
	93	(1)	内面　口縁
	88	(1)	内面　底部
	89	(1)	内面　底部
	100	(1)	内面　体部
	96	2?	内面　体部
	102	3?	内面　体部
I	105	呪符？	外面　体部
	87	絵？	内面　体部
	99	細かいキズ	外面　体部

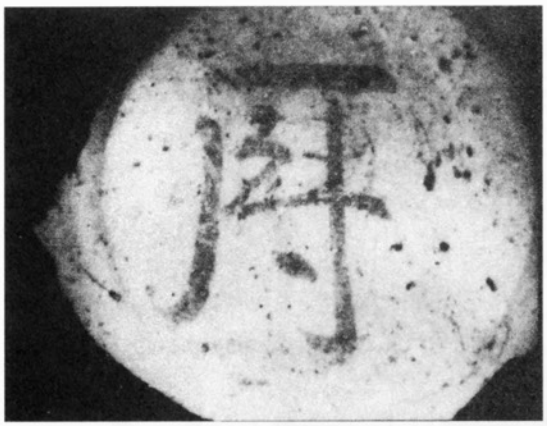
図４　林前南館遺跡の字形変化の例（文献註13より）

図5　小泉遺跡「吉」の字形とその分類

A

B

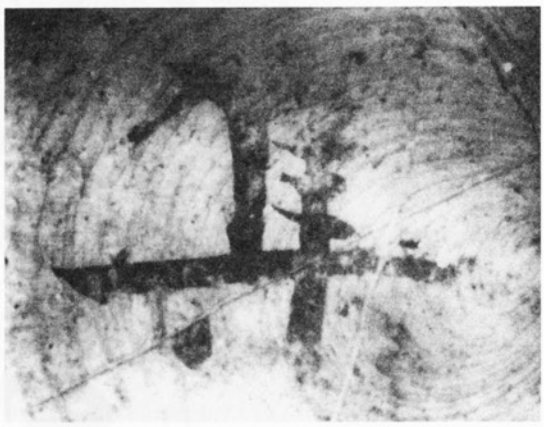
図６　荒田目条理遺跡と小泉遺跡の立地とその比較
（Aは文献註17、Bは文献１にそれぞれ加筆）



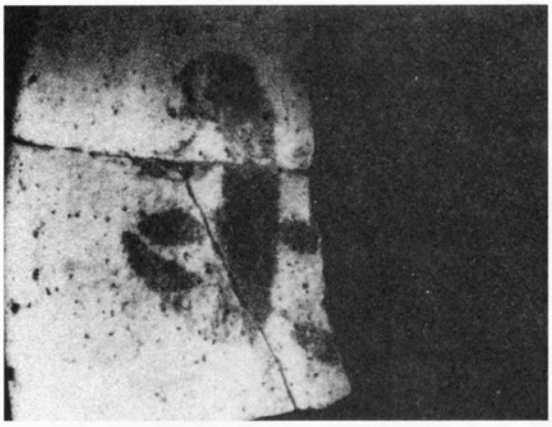
「厨」（No.１）

「中」（No.３１）

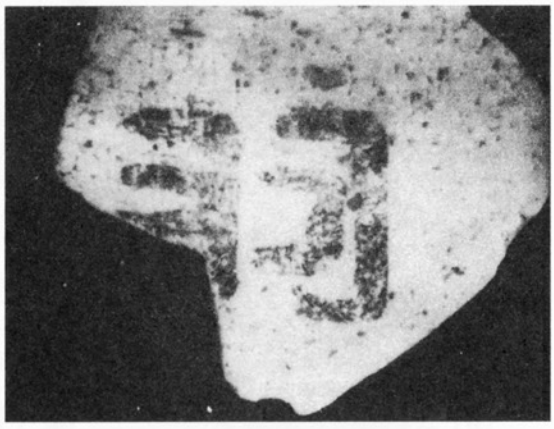
「下」（No.２３）



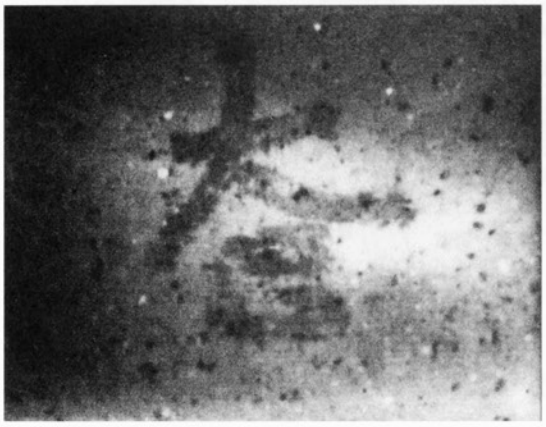
「集」（No.１８）



「羽」（No.１５）

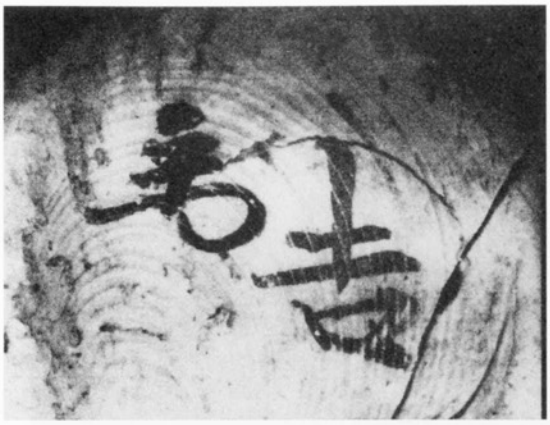


「羽」（No.１６）

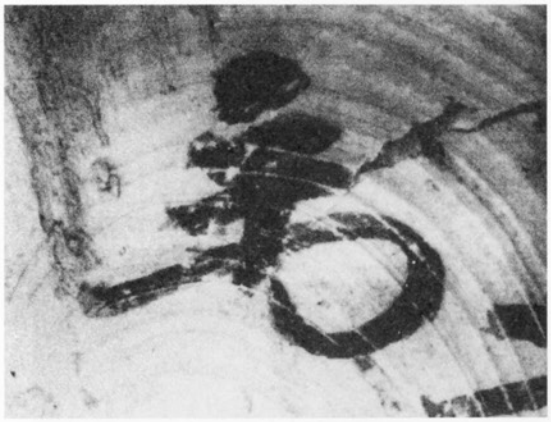


「大□（不明）」（No.３６）

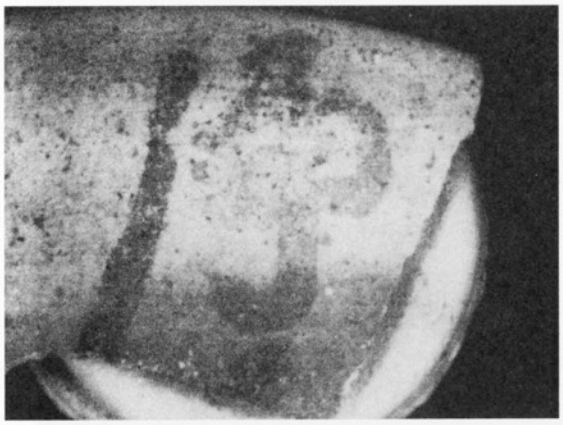
「□（永ヵ）」



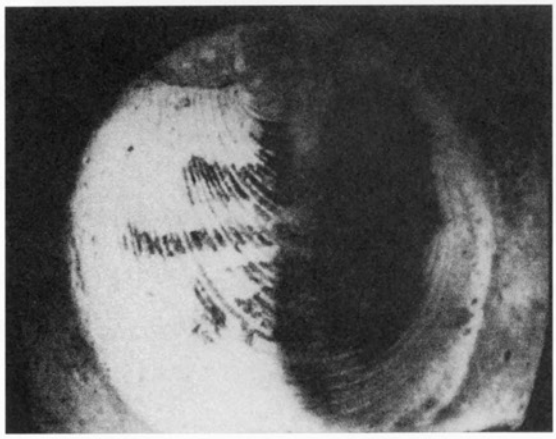
「主・吉」底部外面（No.３７）



「主」二度書き部分（No.３７）



「□（浄ヵ）□」（No.２２）

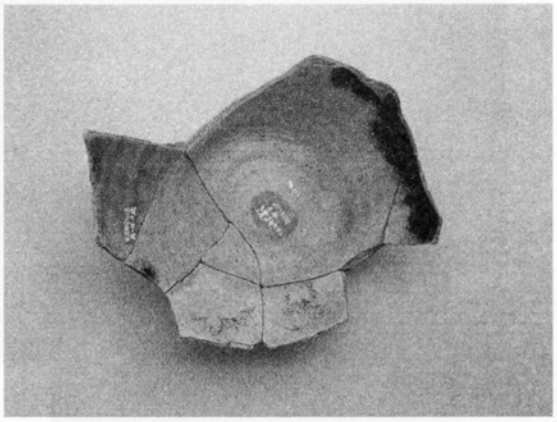


「吉」（No.７）Ａ２類

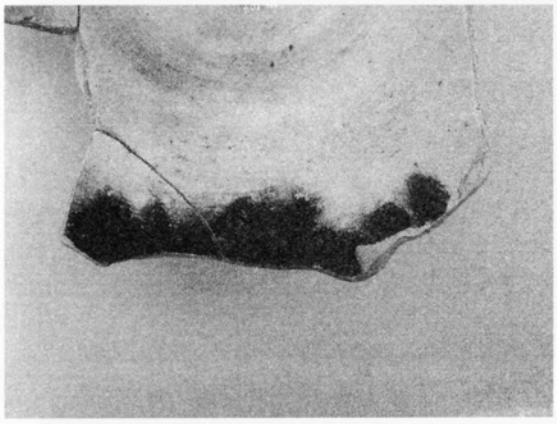
「吉」体部外面（No.３７）

吉（No.８）Ａ１類

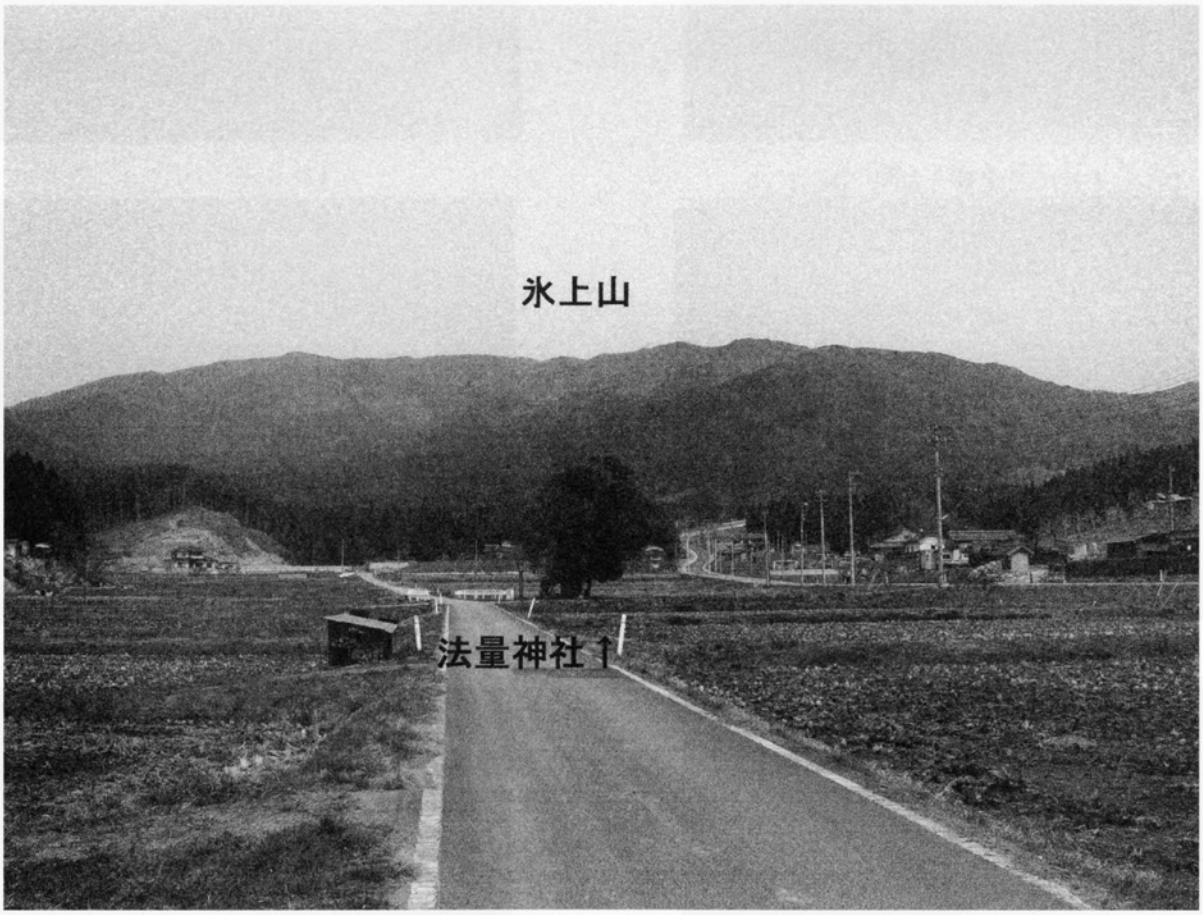
吉（No.３）Ｃ類



No.３０　油煙付着墨書土器



No.３０　付着部分アップ



小泉遺跡とその周辺環境

小泉遺跡出土の大型植物遺体

熊谷　賢
（陸前高田市立博物館）

1 はじめに

平成 11 年度の小泉遺跡発掘調査により検出された大型植物遺体の種類は，双子葉植物 6 種類とマツと思われる樹皮などを含む木片である。

第 1 表　小泉遺跡出土大型植物遺体種名表

種　　名	検出部位	A5-2 層	A6-3 層	A8-3 層
1．クルミ科オニグルミ	核	○	○	○
2．ブナ科クリ	果実（破片）			○
3．バラ科スモモ	核	○	○	
4．バラ科モモ	核	○	○	○
5．トチノキ科トチノキ	種子（破片）	○		
6．エゴノキ科ハクウンボク	種子			○

これらはすべて発掘中に採集したものであり，調査区はかつて用水路であった地点である。出土したグリッド，層位は限られ，A5(2 層)，A6(3 層)，A8(3 層)からのみ出土している。また，遺物を含まない 4 層を境に，下位の層からの植物遺体の出土は見られなかった。以下各植物遺体について触れる。

2 出土大型植物遺体の内容

・オニグルミ *Juglans mandshurica* Maxim.var.*sachalinensis* (Miyabe et Kudo) Kitamura

出土した部位はすべて核である。これらを遺存状態別に見ると完形のもの 5 点，縫合部から半分に割れているもの（自然状態）15 点，破片 7 点の計 27 点である。計測値については第 2 表に示した。長さ，幅ともに計測可能なものは 9 点で，厚さは完形のもの 5 点のみが計測可能であった。長さは，最小値 26.0mm，最大値 38.5mm，平均 31.8mmであるが，破片資料の中には長さ 42.5mmを測るものもあり，縦長タイプのものも見られた。幅は，最小値 25.0mm，最大値 30.1mm，平均 27.2mm である。厚さは，最小値 23.4mm，最大値 26.3mm，平均 25.1mmである。長さと幅の関係から見ると，幅は 25.0～30.0mm の範囲に集中するが，長さは 25.0～30.0mm の範囲のものと，35.0～40.0mm の範囲のものの 2 つタイプが見られる。これはオニグルミの核自体の個体差によるものと思われる。

出土した核のほとんどは完形，半分のものを問わず頂部が尖ったままであり，A5(2 層)からは齧歯類（ネズミ類）によるかじり痕が認められるものもある。これらは自然堆積である可能性を示唆している。

人為的な痕跡が見られるものとしては，火を受け部分的に黒色化しているものが，A5(2 層)，A6(3 層)，A8(3 層)からそれぞれ 1 点ずつ出土している。また，破片資料はA6(3 層)のみから出土しているが，頂部が残存しているものもあり人為的である可能性は低いと思われる。

第2表　オニグルミ核一覧表　　単位：mm

遺存状態	出土地点	層位	長さ	幅	厚さ	備　　考
半	A5	2層	(33.3)	(22.8)	(11.9)	
半	A5	2層	35.5	29.0	(13.1)	
半	A5	2層	38.5	28.0	(16.1)	
半	A5	2層	34.0	(25.4)	(13.4)	
半	A5	2層	(31.7)	(26.5)	(13.5)	
半	A5	2層	(30.1)	(23.9)	(9.6)	下部が火を受け一部黒色化
半	A5	2層	(20.5)	(22.8)	(6.7)	
完形	A5	2層	34.5	25.9	23.4	
完形	A5	2層	(26.2)	(22.6)	27.6	齧歯類によるかじり痕あり
半	A6	3層	28.1	27.4	(15.4)	
半	A6	3層	27.5	27.1	(12.7)	
半	A6	3層	34.0	(21.8)	(10.0)	
半	A6	3層	(29.7)	(29.3)	(12.5)	火を受けて一部黒色化
半	A6	3層	(39.9)	29.9	(13.8)	
半・破片	A6	3層	(29.4)	(22.8)	(10.3)	
半・破片	A6	3層	(35.9)	(24.2)	(13.5)	
半・破片	A6	3層	(29.9)	(20.6)	(6.1)	
半・破片	A6	3層	(32.0)	(15.6)	(6.2)	
半・破片	A6	3層	(17.6)	(22.0)	(9.8)	
半・破片	A6	3層	(26.1)	(22.0)	(15.0)	
半・破片	A6	3層	(19.4)	(11.6)	(14.0)	
完形	A8	3層	26.0	30.1	24.8	
完形	A8	3層	30.6	25.0	26.3	
完形	A8	3層	28.6	25.2	25.7	
半	A8	3層	36.6	26.8	(12.3)	
半	A8	3層	42.5	(27.3)	(13.9)	
半	A8	3層	(26.2)	(23.6)	(10.9)	火を受けて周囲が黒色化

（ ）は現存値

・クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc.

A8（3層）より長さ1cmほどの果実片が5点出土している。これらは大きさや残存部の観察からすべて側果の同一個体のものと思われる。

着点（果実の下方に見られるざらざらした部分）を観察したところ不定形でうろこ状の構造と果皮に無数の縦の筋が認められたことからクリと同定した。

クリは広く食用として利用される植物であるが，出土個体数1個体程度であり利用されたものであるかは不明である。

・スモモ *Prunus salicina* Lindley

A5(2 層)より完形 1 点，A6(3 層)より完形 5 点(齧歯類のかじり痕のあるもの 1 点含む)，縫合部から半分に割れているもの 1 点，破片 1 点が出土している。すべて核である。スモモはモモ同様弥生時代に大陸から伝来したもので，その核はウメに近似するが，やや平面的であり，表面に小さな穴はなく，浅いくぼみがあるなどの特徴が見られる。

計測可能な完形のもの 6 点の計測値は，長さが最小値 15.2mm，最大値 18.2cm，平均 16.4mm。幅が最小値 12.1mm，最大値 13.1mm，平均 12.6mm。厚さが最小値 8.2mm，最大値 8.6mm，平均 8.4mm である。

第 3 表　スモモ核一覧表　　**単位**：mm

遺存状態	出土地点	層位	長さ	幅	厚さ	備　　考
完形	A5	2 層	18.2	12.8	8.5	
完形	A6	3 層	16.4	13.1	8.2	
完形	A6	3 層	16.9	12.6	8.5	
完形	A6	3 層	15.3	12.5	8.3	
完形	A6	3 層	15.2	12.1	8.6	
完形	A6	3 層	16.2	12.5	8.4	齧歯類によるかじり痕あり
半	A6	3 層	16.1	12.6	(4.8)	
半・破片	A6	3 層	(14.4)	(8.5)	(4.2)	

( ) は現存値

・モモ *Prunus persica* Batsch；*Persica vulgaris* Miller

本遺跡でもっとも出土数の多い種である。出土部位は核であり，遺存状態は完形のものが多い(70.6%)。計測値は第 4－1，4－2 表に，長さと幅の相関図は第 1 図に示した。長さは最小値 20.1mm，最大値 36.0mm，平均 28.8mm であり，27.1～31.6mm の範囲に集中し，25.0mm 以下の範囲より 35.0mm 前後の範囲に小さいが分布が見られる。幅は最小値 16.7mm，最大値 25.5mm，平均 21.5mm であり，特に 18.7～24.6mm の範囲に集中し，17.0～19.0mm の範囲にも小さいが分布が見られる。厚さは最小値 12.6mm，最大値 17.1mm，平均 15.4mm で 14.7～16.0mm の範囲に集中する。

次に本遺跡のものを奈良県布留遺跡・三島(里中)地区(古墳，奈良～平安時代)(太田：1966)，福島県御山千軒遺跡(9 世紀後半)の分析結果(渡辺：1983)と比較してみる。なお，布留遺跡の分析結果については奈良～平安時代のもののみと比較し，古墳時代のものは除いた。

長さの平均値は布留遺跡 25.5mm，御山千軒遺跡 27.8mm，本遺跡 28.8mm で，それぞれ 3.3mm，1.0mm ずつ長くなっている。幅は布留 20.3mm，御山千軒 19.8mm に対して 21.5mm で，それぞれ 1.2mm，1.7mm ずつ幅広となっている。厚さは布留 15.2mm，御山千軒 15.1mm に対して 15.4mm で，それぞれ 0.2mm，0.3mm 厚いがほとんど変化がない。

布留遺跡の分析結果では，古墳時代のものと，奈良～平安時代のものとでは奈良～平安時代ものが古墳時代のものより形態的に大きいことが判明しており，長さ 18.0mm 以下のものが姿を消し，長さと幅の比率も古墳時代のものと比較して大小に関係なく近似し，バラツキが小さいことが指摘されている。また，奈良～平安時代のものが古墳時代のものより大きくなる傾向は，一品種が連続的な推移を示しており，その出土数の多さ(奈良～平安時代のもの約 5500 点)も踏まえた上で栽培の可能性をも指摘している。

第4−1表　モモ核計測値　　単位：mm

遺存状態	出土地点	層位	長さ	幅	厚さ	備　　考
完形	A5	2層	35.3	24.6	15.6	
完形	A5	2層	34.9	23.2	16.3	
半	A5	2層	(30.8)	(22.6)	(7.1)	
完形	A6	3層	33.8	25.2	16.7	
完形	A6	3層	31.6	22.6	14.4	
完形	A6	3層	30.3	22.7	15.6	
完形	A6	3層	29.5	19.7	12.9	
完形	A6	3層	26.8	22.5	16.2	
完形	A6	3層	27.1	21.2	17.1	
完形	A6	3層	29.2	20.5	15.2	
完形	A6	3層	30.3	23.8	16.8	
完形	A6	3層	29.0	21.3	15.6	
完形	A6	3層	28.6	19.8	14.9	
完形	A6	3層	26.5	20.9	15.7	
完形	A6	3層	27.9	20.4	14.7	
完形	A6	3層	24.7	19.4	15.1	
完形	A6	3層	23.0	17.9	14.5	
完形	A6	3層	26.4	21.2	15.3	
完形	A6	3層	26.5	20.1	14.8	
完形	A6	3層	26.9	21.3	15.4	
完形	A6	3層	20.1	16.7	12.6	
完形	A6	3層	22.3	(14.9)	11.2	側縁やや破損
完形	A6	3層	35.2	(20.4)	14.8	齧歯類によるかじり痕あり
完形	A6	3層	(22.7)	(18.9)	(11.0)	周縁やや破損
半	A6	3層	30.9	22.1	(7.9)	
半	A6	3層	30.4	21.9	(7.1)	
半	A6	3層	24.7	18.7	(7.3)	
半	A6	3層	(28.5)	18.8	(7.4)	
破片	A6	3層	—	—	—	4点
完形	A8	3層	33.5	25.3	16.0	
完形	A8	3層	33.9	22.7	15.7	
完形	A8	3層	36.0	25.0	16.8	
完形	A8	3層	30.2	23.0	17.1	
完形	A8	3層	29.4	21.7	14.9	
完形	A8	3層	28.1	21.9	16.0	
完形	A8	3層	29.4	21.3	15.1	
完形	A8	3層	29.6	22.9	16.6	
完形	A8	3層	31.3	(20.9)	14.3	側縁やや破損
完形	A8	3層	(22.2)	18.6	13.8	頂部やや破損
完形	A8	3層	26.3	17.3	14.0	

( ) は現存値

第 4－2 表　モモ核計測値　　単位：mm

遺存状態	出土地点	層位	長さ	幅	厚さ	備　　考
完形	A8	3 層	27.0	(19.8)	14.5	側縁やや破損
完形	A8	3 層	29.0	(19.5)	17.2	側縁やや破損
完形	A8	3 層	21.9	19.0	14.5	
完形	A8	3 層	26.4	(20.8)	16.0	齧歯類によるかじり痕あり
完形	A8	3 層	27.9	22.9	(16.8)	
完形	A8	3 層	26.1	17.9	(10.9)	
完形	A8	3 層	(27.2)	22.4	14.4	
半	A8	3 層	28.3	23.5	(18.5)	
破片	A8	3 層	(23.7)	(18.1)	(7.0)	
破片	A8	3 層	(19.2)	(15.5)	(5.9)	
破片	A8	3 層	—	—	—	5 点

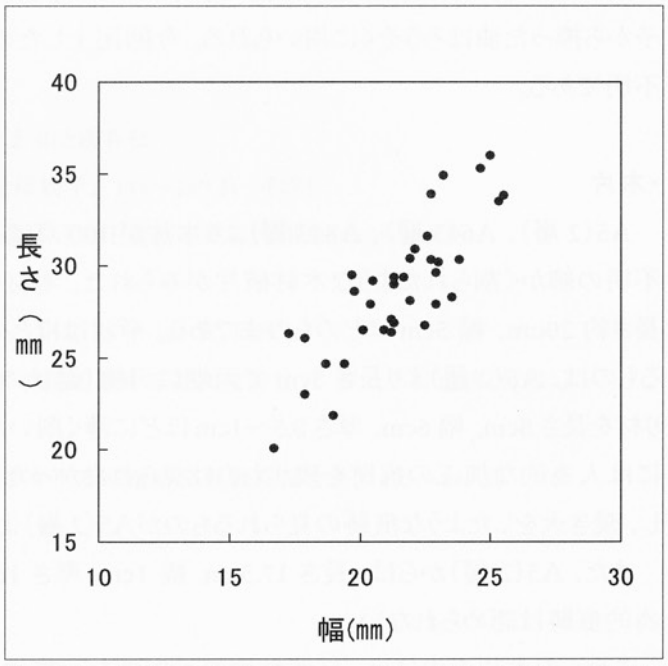
（ ）は現存値

御山千軒の分析結果については，特徴として長さが 37.0mm を境にかなり狭長で大型のタイプへと移行していることが判明しており，地域差の考慮の必要性を訴えているが，漸移的な大型化というよりも，別系統の品種の導入を指摘している。

本遺跡から出土したモモ核の形態は，表面に維管束の通る小孔が見られ，形は先端がほとんど尖らず丸みの強いものも散見されるが，全体的にはやや長めで，先端が尖るものが多い。モモ核の大きさは個体変異が大きいため，一概にその計測値からの検討は非常に困難であり，本遺跡からの出土数も多くないため参考程度のものであるが，ここでいくつかの検討を試みたい。

長さ・幅・厚さの平均値は前述のとおり，28.8・21.5・15.4mm で，布留遺跡，御山千軒遺跡をすべての計測値で上回る。長さ／幅の比では御山千軒遺跡 1.40，布留遺跡 1.26，本遺跡 1.34 であり，御山千軒遺跡ほどではないものの狭長である傾向が見られた。

小清水卓二氏は，長さ 19.0mm，幅 15.0mm，厚さ 15.0mm，長さ／幅の比 1.27 の小型で球形のものをコダイモモ（*antiqua*），長さ 21.0mm，幅 19.0mm，厚さ 15.0mm，長さ／幅の比 1.10 の中型でやや丸いものをノモモ（*subspontanea*），長さ 29.0mm，幅 21.0mm，厚さ 16.0mm，長さ／幅の比 1.38 の大型で長く扁平なものを栽培モモ（*vulgaris*）と形態分類している。これに本遺跡のモモ核をあてはめてみると，多くがノモモ，栽培モモにあたるものと思われる。また，最大長で 36.0 mm のものもあり，これは現生の上海水蜜桃に相当する長さのものである。さらに，長さの計測値が集中する範囲は，布留遺跡が 22.0～29.0mm，御山千軒遺跡が 25.0～30.0mm，本遺跡が 27.1～31.6mm であり，狭長型のものが含まれる点，長さの計測値が集中する範囲がほぼ重なる点から布留遺跡のものより御山千軒遺跡出土のものに形態的に近いといえる。



第 1 図　小泉遺跡出土のモモ核の長さと幅の相関図

次に，モモ核利用の可能性の有無についてであるが，モモ核は加熱することで 2 つに割れるため占いに用いられた可能性が指摘されているが，本遺跡出土のものは，すべて火を受けた痕跡は認められず，出土したモモ核の7割が完形であることからその可能性は極めて低いと考えられる。また，核の中にある種子（仁）は，乾燥し解熱・婦人病薬として古くから用いられている漢方薬である。このような観点から縫合部から半分に割れたモモ核の仁を摘出するために人為的に割られたものであるとの指摘もあるが，本遺跡出土の割れたモモ核は，きれいに縫合部より半分に割れており，人為的に割られた痕跡は認められなかった。したがって，これらは自然に割られたものであると考えられる。

このように本遺跡出土のモモ核には，人為的な痕跡は認められなかったが，モモ自体が弥生時代に大陸より渡来した栽培植物であり，本遺跡に持ち込まれ消費され，その結果として非可食部である核を廃棄したものであると思われる。計測値，形態などから検討した結果，栽培されたものである可能性が高いが，個体変異が大きいモモは，その形態の違いから栽培されたものであるかどうかの判別は困難であるとされており，推測の域を脱しない。出土したモモが仮に栽培されたものであったと仮定しても，その栽培場所等については今回の調査区の性格上，不明な点が多く，今後のデータの蓄積と検討が必要である。

・トチノキ *Aesculus turbinata* Blume

A5（2 層）より種子の破片が1点出土している。トチノキは縄文時代中期以降から現代に至るまでさまざまな形で利用されているが，市内遺跡からの出土はこれまで知られていない。現在，市内におけるトチノキの利用は，食用というより薬用が主である。沢沿いで9～10月に完熟し落下した種子を採集し，採集した種子をアルコールに漬けて利用する。打ち身などに効果があるとされる。今回出土したものは破片 1 点のみで，果皮などは全く見られず，その利用などについては不明である。

・ハクウンボク *Styrax obassia* Sieb. et Zucc.

A8（3 層）よりハクウンボクの種子1点が出土している。長さ 12.1mm，幅 9.0mm，厚さ 6.9mm で半楕円形の完形である。エゴノキに似るが，種子中央部を縦に走る細い隆帯状の筋があることからハクウンボクとした。ハクウンボクの材は，淡黄白色，緻密で硬く，傘のろくろ，将棋の駒などの器具，彫刻材に用いられる。また，種子から搾った油はろうそくに用いられる。今回出土したのは種子 1 点のみであるため，その利用については不明である。

・木片

A5（2 層），A6（3 層），A8（3 層）より木片が 100 点ほど出土している。主にマツと思われる樹皮破片や，種不明の細かく割られたような木材破片がみられた。木材破片は長さ 2～3cm，幅 1cm ほどの小さなものから，長さ約 20cm，幅 5cm ほどのものまである。形状はほとんどのものが棒状を呈している。人為的痕跡が見られるものは，A5（2 層）より長さ 5cm で両端に刃物（鋸状のものか）による切断痕のあるものが 2 点，A8（3 層）より材を長さ 8cm，幅 6cm，厚さ 0.5～1cm ほどに薄く削いだような破片が 2 点見られるのみで，そのほかの木片には人為的な加工の痕跡を残すものは見られなかった。また，この棒状の木片の一端が火を受け一部炭化し，焚き火をしたような痕跡の見られるものがA5（2 層）より 2 点，A6（3 層）より 3 点出土している。

また，A5（2 層）からは，長さ 17.5cm，幅 1cm，厚さ 1cm ほどの細長いマダケの破片が出土しているが，人為的痕跡は認められない。

これらの木片の中には，自然堆積の可能性を示唆する薄い樹皮が残る木根も見られる。

3 おわりに

今回報告した植物遺体は発掘調査時に採集された大型のもののみであり，小型・微細植物遺体は含まれていない。そのため，今後はこのような小型・微細植物遺体を得ることが課題として挙げられる。

出土した大型植物遺体は 6 種で全体数は少ないが，モモ・オニグルミ・スモモは比較的まとまった数が出土している。遺体の観察では，オニグルミのように先端部が鋭く尖ったままで人為的に割られた痕跡は認められず，自然堆積である可能性を示すものや，モモ・スモモのように栽培植物が人為的に廃棄された可能性を示すものなどが混在している。これは，調査区がかつて用水路であったことに起因するものと思われる。

また，出土した木片は細かく棒状に割れた破片が多く，一端が火を受け炭化しているものもあり，人為的要素も感じられるが，自然堆積を示唆するものも見られ，大型植物遺体同様にその性格については今後慎重に検討する必要がある。

本論を作成するにあたり，名古屋大学名誉教授渡辺誠先生には，種同定，同定用標本のご提供などをはじめ多大なるご指導，ご教示をいただきました。また，岩手植物の会常任幹事吉田繁氏，岩手県埋蔵文化財センター濱田宏氏に多大なご協力をいただきました。銘記して衷心より感謝の意を表します。

【引用参考文献】

浅野貞夫 1995『原色図鑑芽ばえとたね－植物 3 態／芽ばえ・種子・成植物－』全国農村教育協会

甘中照雄 1999『名まえしらべ 木の実・草の実』保育社

伊藤ふくお 2001『どんぐりの図鑑』トンボ出版

太田三喜 1986「古代遺跡出土の桃核について」『考古学と自然科学』第 19 号 85～99 頁 日本文化財科学会

岡本省吾 1966『標準原色図鑑 樹木』保育社

金原正明 1996「古代モモの形態と品種」『考古学ジャーナル』№409 15～19 頁 ニュー・サイエンス

小清水卓二 1963「古代日本の住居跡から出土する桃核について」『近畿古文化論攷』559～568 頁 東京

佐竹義輔・原寛ほか 1989『日本の野生植物 木本Ⅰ』平凡社

佐竹義輔・原寛ほか 1989『日本の野生植物 木本Ⅱ』平凡社

茂木 透 2000『樹に咲く花－離弁花①－』山と渓谷社

茂木 透 2000『樹に咲く花－離弁花②－』山と渓谷社

茂木 透 2001『樹に咲く花－合弁花・単子葉・裸子植物－』山と渓谷社

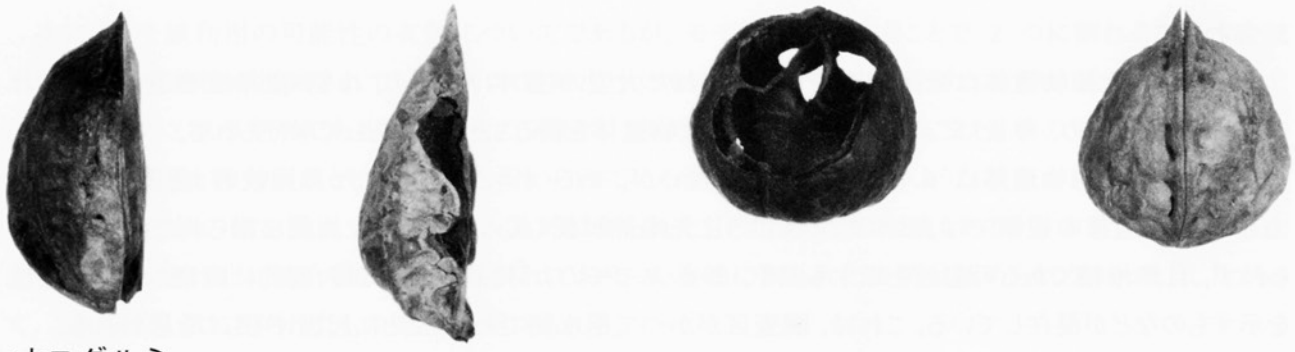
辻誠一郎 2000「第 5 章 種実類：大型植物遺体」『考古学と植物学』111～149 頁 同成社

福田美和 1998「付編 2 山王遺跡町地区出土の大型植物遺体」『山王遺跡町地区の調査』204～208 頁 宮城県教育委員会ほか

南木睦彦 2003「第 5 節 種実の調査法」『環境考古学マニュアル』153～161 頁 同成社

渡辺 誠 1983「御山千軒遺跡出土の植物遺体」『東北新幹線関連遺跡発掘調査報告Ⅵ 御山千軒遺跡（付編）』51～66 頁 福島県教育委員会ほか

渡辺 誠 1988「第 4 節 李平下安原遺跡出土の植物遺体」『李平下安原遺跡発掘調査報告書』493～496 頁 青森県教育委員会



オニグルミ

クリ

スモモ

モモ

ハクウンボク

トチノキ

小泉遺跡出土の大型植物遺体 1

オニグルミ

モモ

0 5cm

小泉遺跡出土の大型植物遺体 2

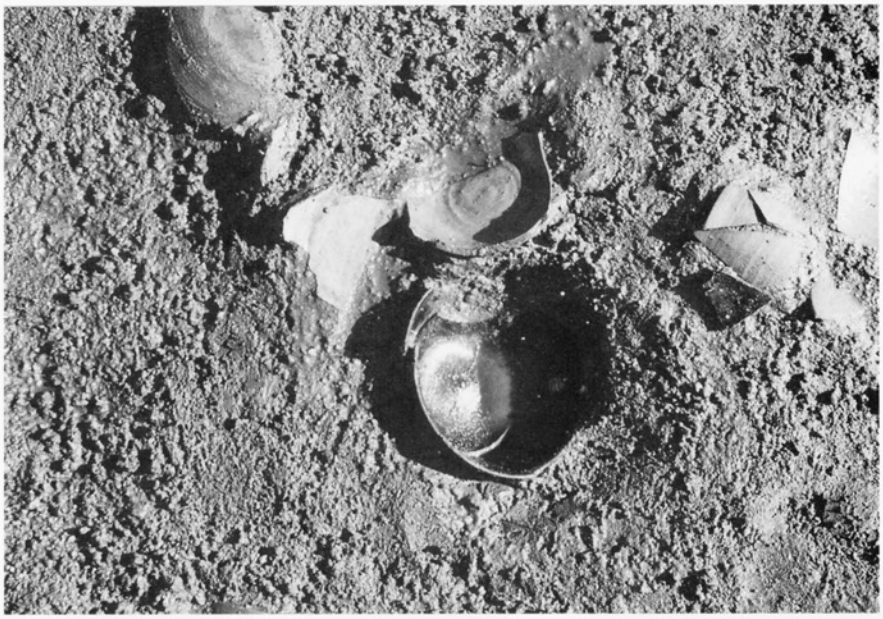
発掘調査地全景
（南→）

発掘調査地近景
（南→）

発掘調査風景

小泉遺跡の調査（1）

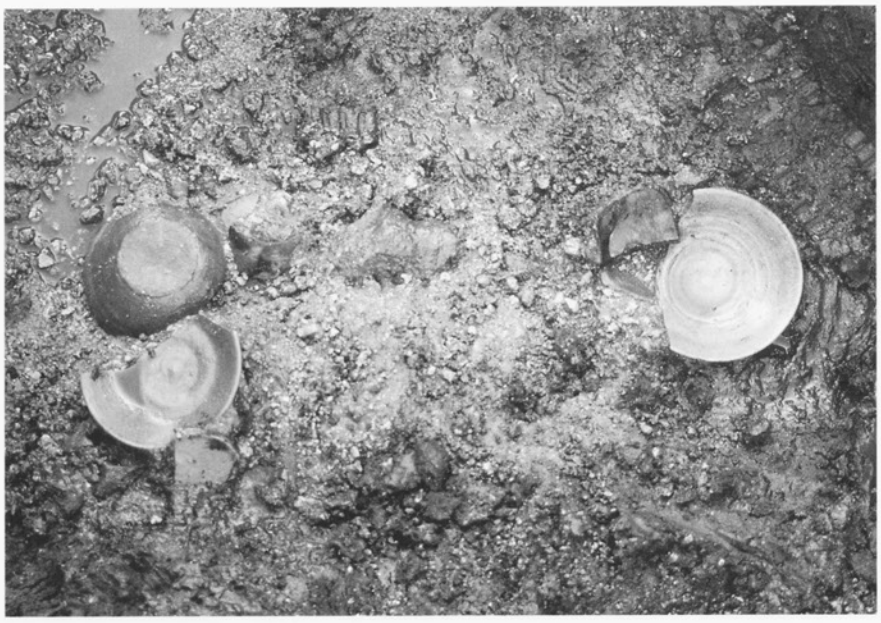
発掘区西側



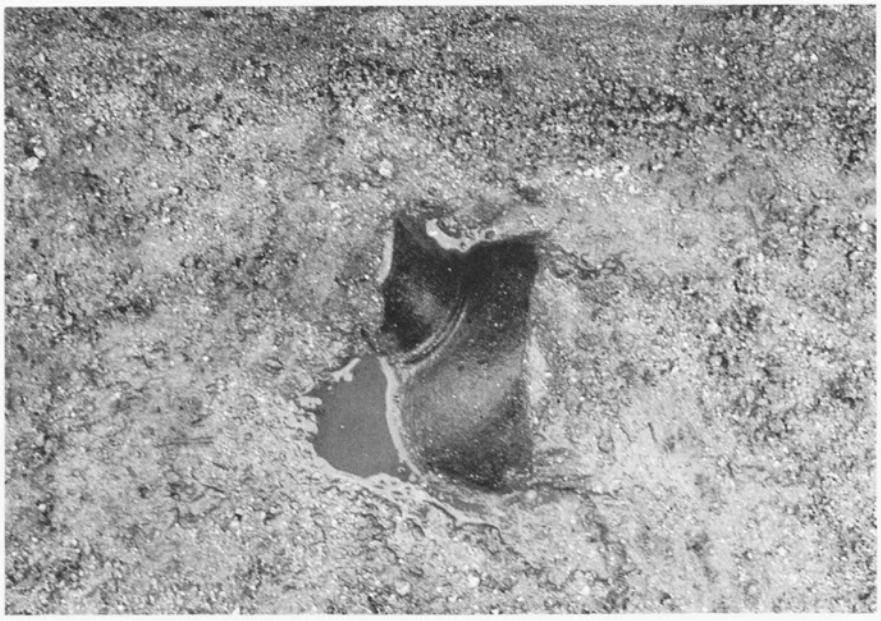
遺物出土状況 1

遺物出土状況 2

小泉遺跡の調査（2）

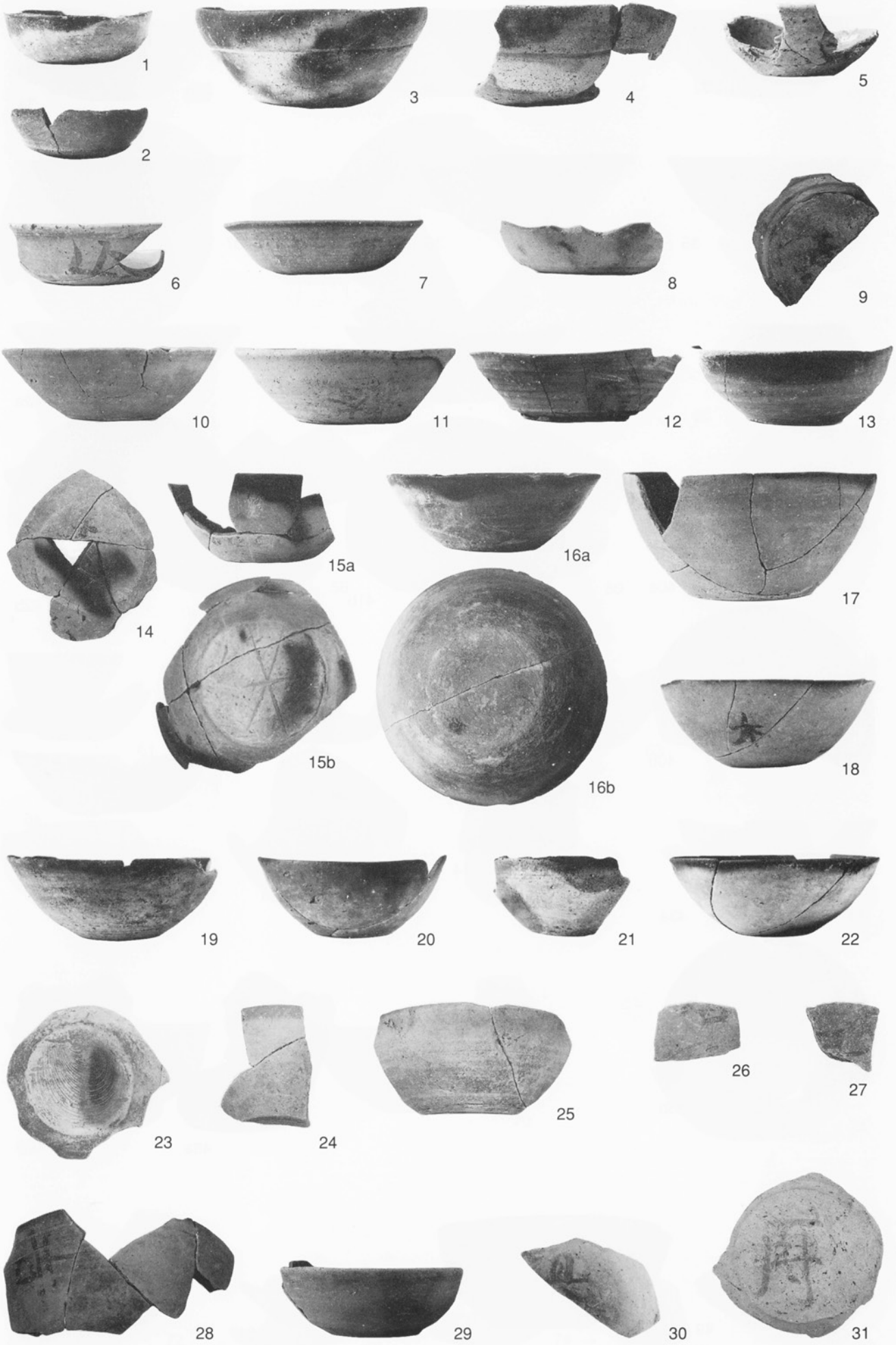


A−6 区 5層　遺物出土状況

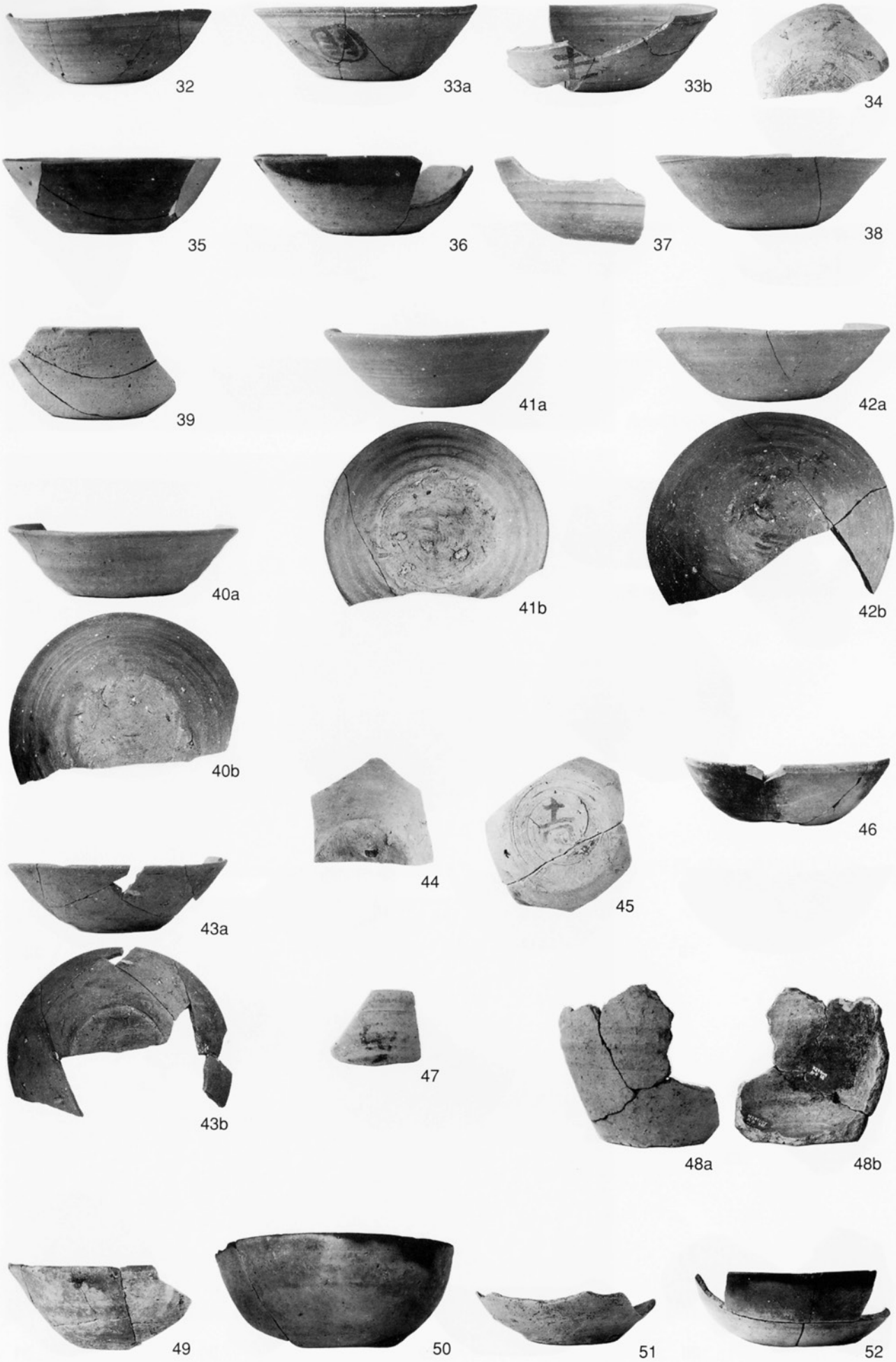


A−7 区 2層　遺物出土状況

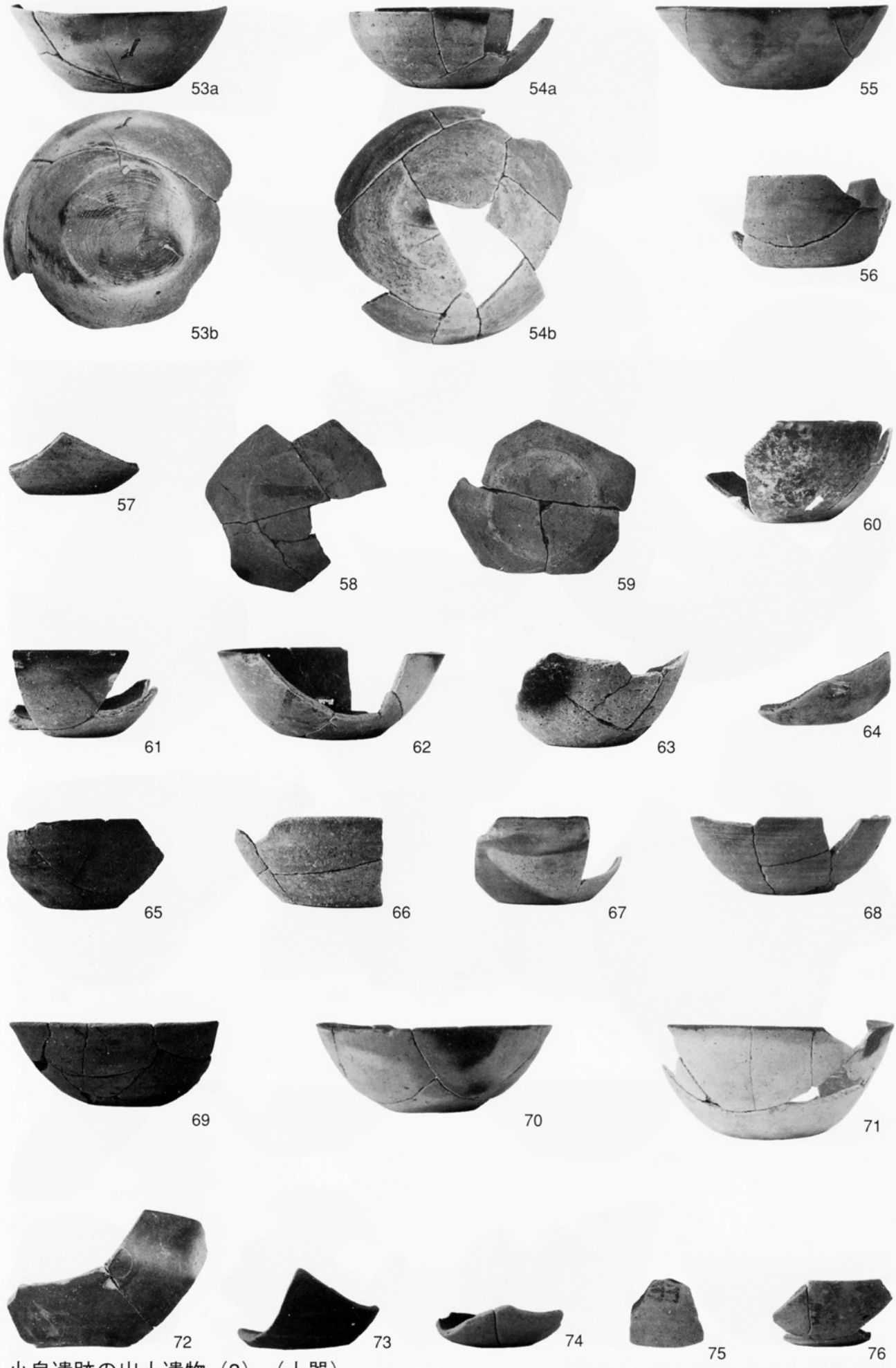
モモ核出土状況



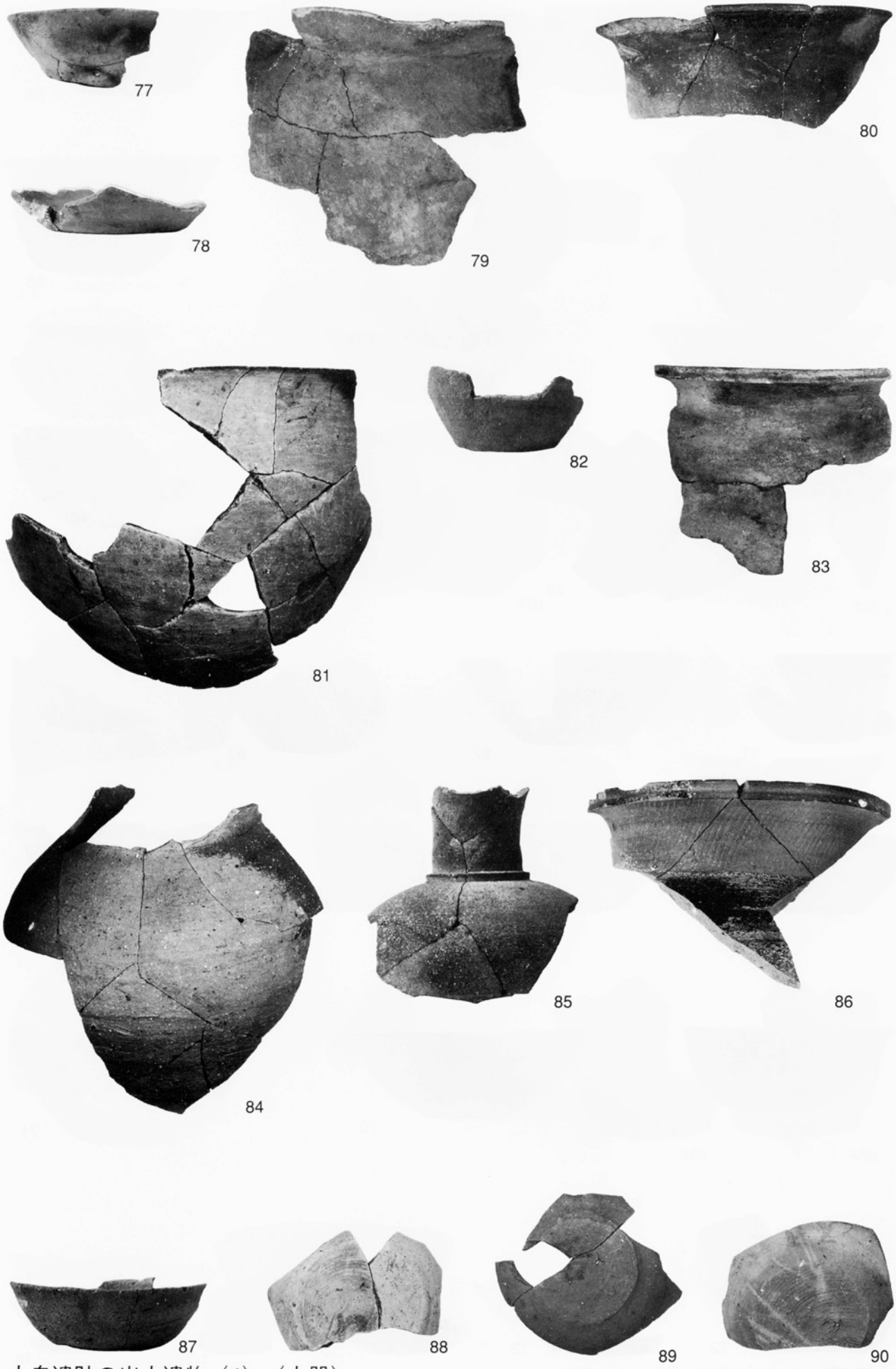
小泉遺跡の出土遺物（1）（土器）



小泉遺跡の出土遺物（2）（土器）

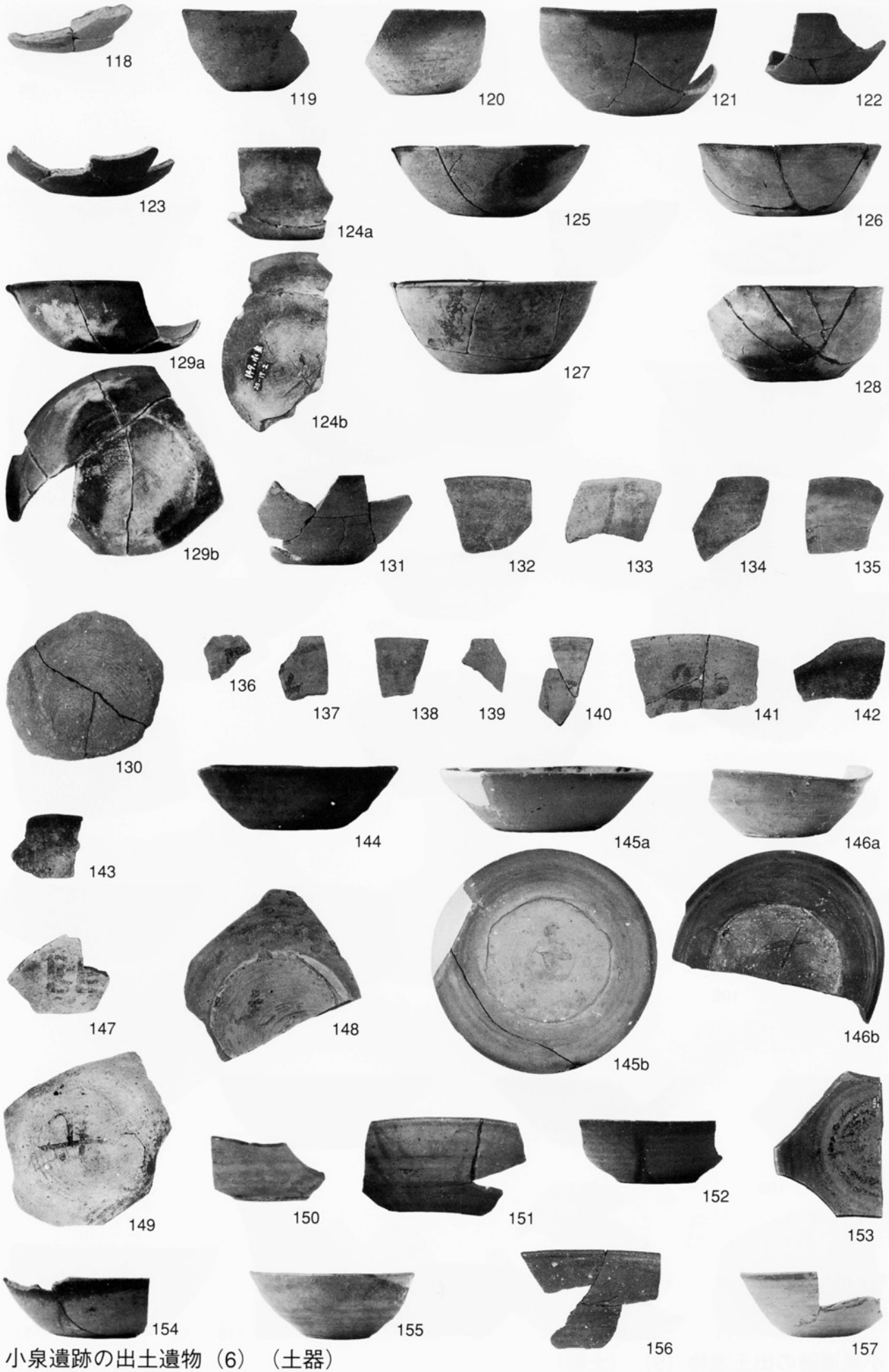


小泉遺跡の出土遺物（3）（土器）



小泉遺跡の出土遺物（4）（土器）

小泉遺跡の出土遺物（5）（土器）



小泉遺跡の出土遺物（6）（土器）

小泉遺跡の出土遺物（7）（土器）

小泉遺跡の出土遺物（8）（土器・土製品・鉄製品）

陸前高田市立博物館紀要
第 9 号
特集「小泉遺跡の墨書土器の研究」

平成 16 年 3 月 31 日　刊行
編集・発行　陸前高田市立博物館
〒029-2205　陸前高田市高田町字砂畑 61-1
電話　（0192）54-4224　FAX　（0192）54-3227
e-mail　hakubutu @ city.rikuzentakata.iwate.jp
印刷・製本　（有）高田活版
〒029-2205　陸前高田市高田町字馬場前 114
電話　（0192）55-2694　FAX　（0192）54-5173